

501
117

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5

始



36.11.28

521-117



を
呼ぶ
樹

□

未
明
著



大正
10 8.15
内交

目次

片目になつた話	一
死刑囚の寫眞	一三
浮浪者	三五
人間の機械	四九
雪の上	六三
煙の動かない午後	七九
風の鞭	一三七
駁者	一四五
月に祈る	一五九
蓄音器	一七五

思はぬ變事……………	六七
路を歩きながら……………	二〇五
老旗振り……………	三三二
囚人の子……………	三三三
崖に碎ける濤……………	二四七
人間の悪事……………	二五七
ある男の自白……………	三七七
戦慄……………	二九九
冷酷なる記憶……………	三一九
崩れかゝる街……………	三三七
殺される人……………	三三七
饑饉の冬……………	四七一

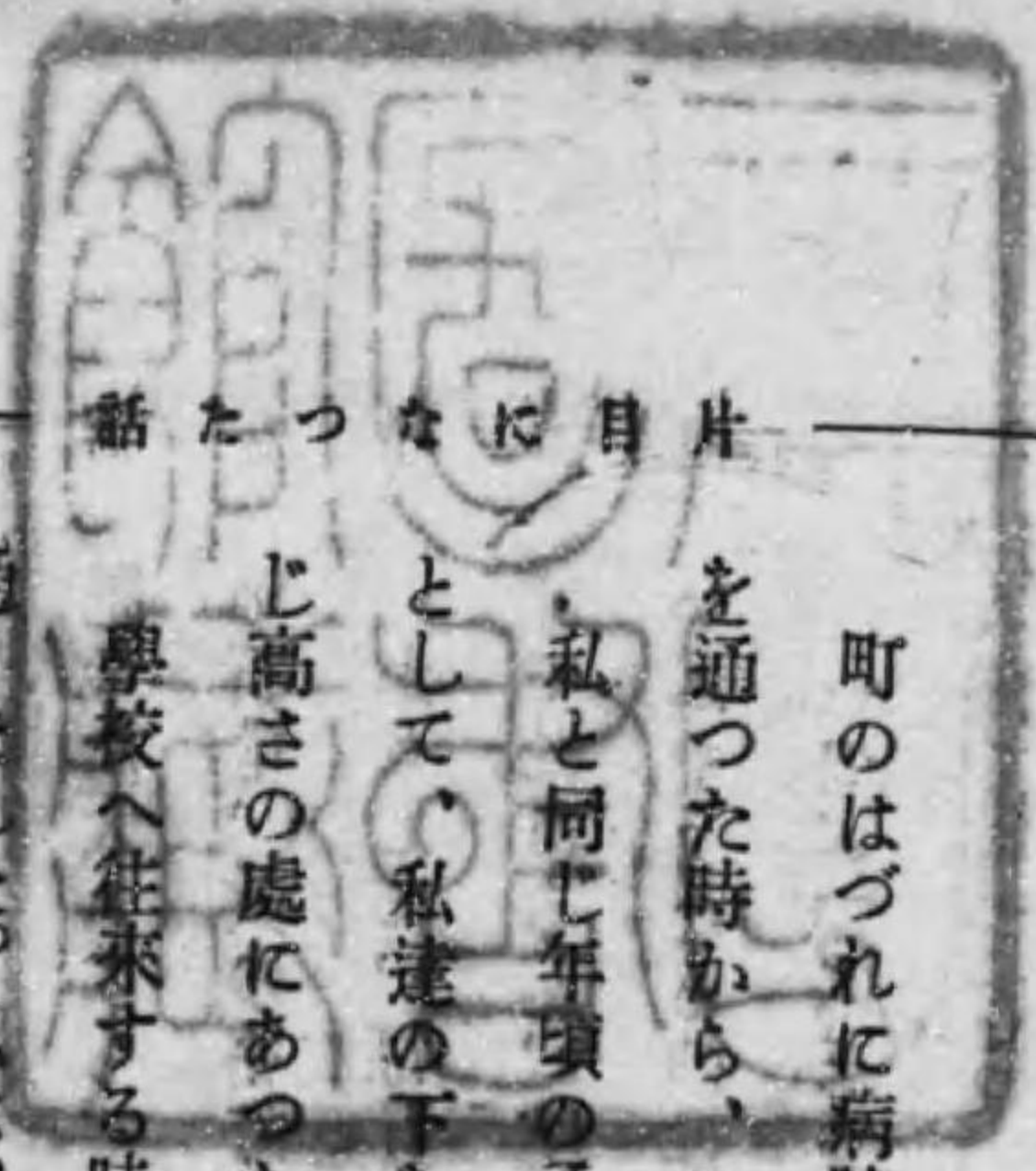
雨を呼ぶ樹

小川未明著

雨、判、樹

小川未樹著

片目になつた話



町のはづれに病院がありました。病院の石垣は長く幾十間となくつづいておりました。其の下を通つた時から、この話は、はじまるのです。

私と同年頃の子供には、其の石垣が高く見えました。一番上の方にある石は、いつも傲然として、私達の下を通るのを見下してゐた。そして、ちやうど私達の頭とすれ／＼になる、同じ高さの處にあつた石が、毎日顔を合すので最も親しかつたのです。

學校へ往來する時分に、右の肩から鞆を下げ、左の肩からは辨當を下げて、この石垣の下を通りました。私は、殆んど、其れも毎日のやうに石垣のはづれから、あちらのはづれまで石敷を算へて歩いたものです。其等の石は、みんな天然に山から掘り出された圓石を使つておりましたから、どれ一つといつて同じ形の石はなかつた。それ／＼異つた顔付をしておりました。形が異つてゐたばかりでなしに色まで、白いのや、赤みがかつたのや、黒いのや、いろ／＼であり

ました、中にはきら／＼と光りを含んだ石などもあつた。私は其の一つ一つの石に對して、特別な感じを抱いてゐました。さまざまに異つた顔の人間を見る時と同じやうに、石は、決して同じ感じをば私に與へなかつたのであります。

尖つた石は、瘦せた人のやうにも思はれた、また、圓い石は肥つた人のやうにも思はれた。

肥つた大人にも、またいろ／＼其の人の顔付や様子によつて、愛憎の感じが異なるやうに、圓い石も、其の格好によつて、私には好き嫌ひがありました。

かうして、毎日、同じ石を往來に見ますと、全體ではなく、自分の頭とすれ／＼になる處だけではあるが、随分澤山な、幾百とある石の中でも、いつ見ても氣持の好い、なつかしい石と樹いふやうなものは、眞に僅かしかありませんでした。

一つ、二つ、三つと言つて私は、例の如く、片端の方から算へながら行きますと、其の圓い、人間で言つたら、人の好いお爺さんを思はせるやうな石に出遇ひました。すると石は、また、私の顔を見て笑ひました。

『今日は、少しおそい。學校の鐘が鳴つた時分だ』と、其石は言ふのでした。

私は、はじめて氣が付いたやうに、驚いて頭を上げて、道の上を見廻しました。一方は青々とした圃になつてゐます、あたりは、しんとして、他に道を行く生徒の影も見えなかつたのです。其れで、慌て、大急ぎで、次から次へと三十、三十一、三十二と、石を數へながら、驅け出すやうにして行きました。けれど、私は、尙ほ、石を算へることをやめなかつたのです。

小供の時分には、どうしてかう自然が、物悲しく、またなつかしく見えたでせう。夏の日などは、この道の上に陽炎が立つて、霞んでゐました。そして、石垣の上には、胡蝶花が、首を垂れて其の下を通る人々を眺めてゐるやうに、美しく咲いてゐました。私は、ぼんやりと其の花を見上げて、其の厚みのある幅廣の濃綠色の葉の上に、星のやうに照り映へる太陽の光りに見入つて、遠い、はかない空想に、自分を忘れて囚へられたことがあつたのです。

この石垣を出端れると、また青々とした圃になりました。道は二つに分れて、一つを行けば、學校や、製絲工場の方に出るし、一つを行けば、やがて橋の上に出ました。

まだ、私は、この話をしますのに、このあたりの景色をも言つて置かなければなりません。橋は、さびしい田舎へ通ふ路になつた小さな橋です。大水が出ると、いつも流れはしないかと

氣遣はれた程、もう古びてゐました。下には、水がいつばい岸に溢れて流れてゐる。兩岸には、草が茂つてゐる。ところ／＼樹があつて、其の影を氷の面に落してゐました。

友達もなく、私は、ただ一人で、この川の邊に来て、木の下で釣をしたことがあつたのです。

草の上に渡る風の光りを見た時、私は思ひ出せない世界の記憶をそゞられるやうな氣持がして

悲しみに喉の重く垂れるのを覺えました。

立ち上つて、脊伸をして、彼方を見ます。國境の高い山々が、遠く齒の並んだやうに晴れた

空の下に頭を擡げてゐました。私には、其の山は人間の行ける處ではないやうな氣がした。寫

生帖を懐から出して、其の山の姿を描いてゐたこともあります。ある時は、日が蔭つて、水の上

に浮いてゐる赤いうきが、黒くなるまで其の川の邊にゐたこともありました。そして、もはや

うす暗くなつた、石垣の下を歩いて家の方へ歸つて行つたこともありません。

私は、臆病者でした。かうして病院の横手を通つても、決して、正門の方へは路を曲りませ

んでした。石垣は、もとより正門の方へ廻はつてゐましたけれど、私は、端れまで行くと、入

口のある方へは曲らずに、この石垣から分れてしまつたのです。

血！ 血！ 血を見ることを、私は、他のどんな弱い子供よりも怖れた。私の毎日通りまし
た石垣の外側の道からは、もとより内側の建物はよく見えませんでした。たゞ、硝子窓の一部
が、しかも硝子の内部は、眞暗になつて、——其れは、光線の具合で、深い水の中を覗くと、ち
やうど黒くなつて見えるやうに、また、よく晴れた空を仰ぐと、それが青黒くなつて見えるや
うに——冷たく、しんとして見えたのであります。其れも内側を見やうと思つて、私が道の片側
に寄つて、脊伸びをしなければ、建物の硝子窓の一部分は見えなかつた。私は、歩いてゐる時
は、たゞ石垣の石を見ただけでありました。この日光に照らされて、乾きよつてゐる石の面が、
いかに私になつかしく、いろいろのことを空想させたであらうか。

ちやうど、あちらの青葉の林を越えて、どこかの路を歩いてゐる物賣りの聲を聞いた時、ま
た祭りの太鼓の音を聞いた時、石の面は日の光りの底に、微かな光りを放つて、恰かも日の光
りが、石の面に染み込むやうに、石は其の光りを吸つて、無事に消えて行く夏の日盛りに永久
に平和の夢を石が見てゐるやうに思はれたからです。

單調な、そして平和を自然を私は、愛しました。其處には、永久に甦されない眠と休息があ

つたからです。學校から運動に疲れて汗ばんだ顔をして、物憂さうに歸つて行くと、親しい圓顔の石は、

「早く家へ歸つて行くと、何か、きつと好いことがある」と、私に囁いたのです。

私は、急に元氣付いて、家を急ぎました。そして、門口から、

「お父さんは、もう歸つて来たかい」と、母に向つて呼ばりました。其頃父は、常に旅へ出てゐたからです。父のゐないのが、どんなに當時私に物さびしかつたか知れなかつたのでした。

ある日のこと、私は、いつになく石垣について病院の入口の方へ曲がりました。そして何か怖しいものでも見る氣持で、入口に立つてゐる大きな門から、二三步も入り込んで、よく内部の様子に見える處まで、自分の姿を現はしました。

何を見たでせう？石炭酸の臭が鼻にしみました。私は、この臭ひを嗅ぐと、直ちに光るメスと血を連想しました。思はず、神経が戦いた時、あちらの廊下を白い服を被た看護婦が兩手で黄銅の手水盥をさぐげて足音を立てずに過ぎる様子を見ました。私は、近付き難い世界に近づいてゐるのに心付いて、逃げ出すやうに門から外へ出て、路を駆け出すといつしか圃の中の細

道にさしかゝつてゐました。

青々として葉の繁つた梅の林があります。其の下を通ると、青い實が幾つも葉隠れになつて、覗いてゐました。もう私は、すっかり恐怖から脱れてゐたが、尙ほ、梅の木の下で石炭酸の臭がするやうに覺えたのでありました。

人間が腹を切開したり、手や足を鋸で引いて切り離すやうな手術をする時には、麻酔剤を用ふる。其の時、患者は無意識に大きな聲で何か喚きつゞけることがある。また、麻酔剤を嗅がしてから、氣の遠くなるまで、患者に一つ、二つ、三つ……と言つて呼ばせるといふことを聞きました。

其の手術室も、また、死體の解剖室も並び合つて、私が、毎日學校への往來に通る石垣を一重隔て、直ぐ内側にあると聞かされた時に、私は、どんなに驚いたであります。

脊伸びをすると、冷たく黒くなつて外界の光線を反射してゐる硝子窓は、解剖室の窓ではなだらうか。さう思ふと、私は長い間平氣でゐたのが、知らなかつたとはいへ呆れる程でした。「君は、まだ知らなかつたのかい。解剖室も手術室も、みんなあちらの側にあるよ。外を通つ

てゐても、麻酔劑をかけられて、分りもしないのに、痛い！ 痛い！ と、喚いてゐる聲が聞えることがあるよ」と、友達が言った。

其の友達は、よく病院の内部のことを知つてゐたのです。

「其れは、ほんたうかい。石垣の外でも其の聲が聞えるかい」と、私は、驚いてたづねました。

「なかには、麻酔劑をかけなくて、切る者もあるのだよ。其の者が、痛い！ 痛い！ と、言つてゐるのは、ほんたうに分つてゐるんだよ」と、其の友は言ひました。

「ほんたうに、そんな聲が、石垣の外まで聞えるかい」、私は、もう今日の歸りにも、其路を通るのは、氣味が悪くてたづねたのであります。

「あゝ、聞えるといふことだ。ほんの僅かばかりしか、石垣から離れてゐないんだからね」と、友達は言ひました。

私は、いままゝで自分で、一つ、二つ、三つ……と言ひながら歩いてゐて、他から聞えて来る、一つ、二つ、三つ……といふやうな、その氣味の悪い聲に氣付かすにゐたのであります。

其れ以來、私は石垣について、石を算へながら歩くことはやめてしまひました。いままゝで、

空想に耽りながら歩いたこの道は、其後通る時に、必ず死、切開、麻酔劑、苦しんで叫ぶ聲を考へずにはゐられなかつた。私は、怖しいものを探るやうに、耳を絞つたのです。そして、しんとして音のない世界から、患者が喚めいてゐる、一つ、二つ、三つ……といふ聲が聞えはしないかと付むこともありました。

また、ある時は、下を向いて心で、耳を掩うやうにして、何も聞かないやうに急いだこともありました。

平和で、楽しかつた、すべての空想は、永久に破られてしまつた。其のかはりに、死、呻き、手足の切斷、さまざまの痛々しい光景が、眞赤な血に塗れて眼の前に浮びました。

私は、病院の横を通つて、釣に行くことも稀になりました。そして、なるだけ、この道を通らないやうにしました。

ある日、私は、病的にも道の上に立つて、石垣の頭から、あちらに見える、冷たい、黒い、建物の硝子窓の一部をちつと眺めて、何か聞えはしないかと、執念深くも、しばらく氣味悪いのを我慢して立つてゐたのです。ちやうど、其の時、動物の叫ぶやうに、人間の苦しさを叫

び聲が、前にも、後にも、たゞ一聲高く聞えたのでありました。

なんでも、男が、手か、足かを手術せられて、苦しみ悶えて叫んだらしく、たゞ、空間に、青ざめた男の顔が、眼をむき出して、口を歪めて手をさしのばしてゐる、その形相が、刹那に眼にはつきりと浮んで見えた。私は、もう何も他のことを考へる勇氣がなく、一生懸命に、其處から駆け出したのです。

「たしかに、聞えた。男の喚めいた聲が聞えた」と、私は、口の中で叫びつゞけながら。

雨
を
呼
ぶ
樹

「なぜ、私がつとい、醫者にかゝらなかつたか」と、お問ひなさる疑ひは、これで解ける譯です。

小學校を卒業する時分になつて、私は、眼を患ひました。其の病院には、眼科もあつて相當の醫者もゐたこと、思ひます。けれど、血！ 叫び、苦痛といふことを、幾年間其の傍を通るたびに、頭に刻み付けられた私は、何うしても、其の病院へ行く氣にはなれなかつた。恐らくこの年になつた、今でも、私は尙ほ其の病院に對して特別の感じを抱いてゐた、やはり行か

いでおませう。どの病院も同じとは知りながら、心に刻まれたこの不快な、そして、物凄しい印象をどうして除くことが出来ませう。

私は、其時どうしても其の病院に行くことを拒みました。両親は、私を町のみつらぬ眼醫者にかけたのです。そして、其の醫者は、自身の出来る限り、最善を盡したのであらうけれど、ついに私の片眼を潰してしまつたのです。

「あの醫者にかゝらずに、お前が親の言ふことを聞いて、早く病院へ行つたら、手後れにもならず、こんなことにならずにしまつたのだ」と、母は私の顔を見ながら、涙を含んで言ひました。

私は、人々が、さう言つてくれましたけれど、少しも後悔はしませんでした。そして、病院へ行かなかつたことを、決して悪いことをしたとも思ひませんでした。

私は、片眼だけれど、青、赤、黄、といふやうに繪具を溶くのを決して誤りはいたしません。藝術家として、片眼で澤山だと思つてゐます。

「君は、馬鹿だ。しかし、其れだから、また君のやうなアナクロニズムの作品が描けるのだ」

と、ある友達は、私のこの話を聞いた後で言ひました。
或は、さうかも知れません。

死刑囚の寫真 ○

私の好きな早春があぐつて來ました。梅の梢は珊瑚樹のやうにうす紅く色づいて、空は酒に酔ふてゐるやうに、ほんのりと匂やかに色めいてゐます。

小さな窓を開けて、黒ずんだ中にも蘇生へる力のうごめいてゐるやうな、外の繁みを眺めてゐた時、町の方から起つて、空の中をはね返へつて聞えて來る、さまざまの小さな音に心を捕へられてゐました。今までにも、こんなやうな音は聞えて來たのであらうけれど、其等の音が一つ、二つ笑つたり、飛び上つたり、嬉しさうにして、黄昏の空を氣ままに何處へか驅けて行くのを聞いたことがなかつた。人間ばかりでない、物の音までに、やはり春の來たのが嬉しいと見えるやうな穏かな日暮方でありました。

ぼんやりして、考へ込んでゐた私は、急にそわ／＼として、かうして眺としてはゐられないやうな氣持がしたのであります。もう一度、春のやうに若やいだ氣持になつて、見落して來た

幸福を引返して拾つて見やう。それには、まだそんなに年をとつてしまつたといふ程でない。まだ私にとつて人生の日は頭の上に高く、日が暮れるのに間がある筈だ。其れなのに、何をくよく／＼してゐたのだらう。誰もやつて来て、自分の肩を叩いて、無理に引き立て喜びと悲しみの巷に突き出すやうな者はない。自分で出なければならぬのだ。

雨 「この世の中を愉快に暮らすのも、さうでないのも氣の持ちやう一つである」と、私は、思ひました。

呼 ヒヤシンスの花の咲く頃です。私は、あの香氣の強い、分けて紫色のこの花を見るのが大好きです。町へ出て、其の花を一鉢買つて來やうと思ひました。そして、室の裡に置いて、新しい氣持でこれからの仕事にとりかからうと思ひました。

室を見まわした時に、あまりに其の室は荒れてゐます。何を見ても、いたましい生活の汚みがついてゐます。この室の中に新しい、みづ／＼した感情の芽ぐむには、あまり冷た過ぎる氣がしました。其の中でも、圓いテーブルに、壊れかけた椅子の二つは、何うしても、氣持を愉快にすることが出來ない。其れには、死んだ二人の子供の爪の跡が、いくつも付いてゐるから

であります。

たとへ未來に華かな空想を描くとしても、過去の記憶は、破壊するでありませう。私はこのテーブルと椅子だけは、子供の紀念として永久に、傍から離さないと思へたことがあります。ある時、子供は其の上に乗つてゐた。ある時、子供は其れを臺にして遊んでゐた。而して、無数の指紋と爪の跡とが其の上についてゐる。子供等はゐなくなつてしまつても、其れだけは残つてゐるからと思つたのです。

けれども、考へ直して見るのに、其れが畢竟何になるでありませう。みんなかうして足跡を一度はこの地の上に残して行つたのです。けれど、月日の經つに従つて、誰も其れを見分けるものがない。

河の中へ流してしまふ氣で、この二つを人生の波の中へ投げてしまはふ。さうすれば、この二つのものは行衛が分らなくなつても、また何處かで人々に使はれて、人はこのテーブルに向ひ、また、子供はこの椅子によち上るであらうと思ひました。

ヒヤシンスの花を買つて來て、この古いテーブルに置くには、あまりにこのテーブルの過去

の思ひ出は、いたましまし過ぎたのであります。私は、思ひ立つたままに、直に道具屋を呼んで来て、この二つの品物を賣拂はうと思ひました。

そして、明日から、此處に新しい臺の上に紫色の香の高い花が載せられてある光景を想像しました。死んだ子供等と自分との間にあつた、つながりはついに断たれてしまつて、だん／＼に遠く、幽かに距つてしまふやうな淋しさが心に感じられましたけれど、極めて小さいことながら、兎に角室の中に起る革命に私の心は幽りました。而して、其のことは自分の氣分を何か新しい方へ誘ふであらうと考へると、明日からの生活に、楽しみが持たれたのであります。

刻々に變つて行く、そして、其れに新しい生活の興味がある、これが人生であると、私は樹考へました。

早速、近所の道具屋へ使ひをやりました。其の間に、テーブルの上のものを片付けて置きま

した。道具屋の來るのを待つ間、私は、ぼんやりとして坐つてゐました。そして、ちつとテーブルと椅子の二つの影が、鼠色の夕暮方の光線の中に浮き出てゐるのを見詰て、永久に別れなければならぬ名残を惜しんでゐました。

思ひ出したやうに私は立ち上つた。そして其の椅子に腰をかけて、テーブルに向つて見ました。すると、其れは私自身でない。死んだ男の子が、かうしてこの椅子に腰をかけてテーブルに向つてゐた姿があり／＼と浮んで來ました。もとより子供の兩足は疊の上に付かずに五六寸も高い處に浮いてゐます。其れは熱い夏の日のことで、窓の外には、いろ／＼な木の葉が繁り合つて、つや／＼と日の光りが葉の面を流れて輝いてゐました。空の色は赤つぽかつたのです。そして、子供は單衣の白地緋の着物を被てゐました。後ろに結んだ三尺の端がだらりと垂れてゐたのも眼に残つてゐる。

すべての思ひ出は、すべて、ある日のある時刻に、一たびは現在となつてこの地球の上につた事柄であります。さう考へると、私の心は、戰慄を感じた。

たとへば、其の時分に活々として、これがいつ凋落するなどは思ひも寄らぬ勢であつた程の澤山な木の葉が、いつの間にか姿もじびてしまつたやうに、私は、窓から枝ばかりとなつた木立に眼を移しながら、自然の推移を何うすることも出來ないと感じたのであります。

其時、使ひが歸つて来て、あとから直に道具屋がやつて来ました。外では遊んでゐる子供等の聲などが聞えて来て、穩かな晩方でありましたが、まだ季節だけに空氣は殊に暮近くなると冷えきつてゐました。西の方の雜木林の間を紅く染めて、今日も日は沈んでしまつた。空には殘光が漂つてゐます。

雨 室に入つて來た男は、顔の色の黒い、鼻先の尖つた眼の窪んだ小柄な人間でした。その鼻先は、寒い風に當つて來たので際立つて光つて見えた。男は兩方の手をさすりながら頭を低く下

呼 げた。

ぶ 「このテーブルと椅子なんだがね」と、私は、早速言ひました。
樹 「あ、左様ですか」と、男は眼で笑つて、私の傍にあつた火鉢に、彼も腰をおろして當りながら煙草を喫ひはぢめました。

「俺が、道具屋をはじめましてから、今年で三年になります。この頃のやうな不景氣なことはありません、其の前までは、北海道で魚の方を商つてゐました。其の前は、栃木縣で鳥屋をしてゐましたが、何をして、金といふものは、あまり儲からんものです」と、男は自分から

聞かぬことまで話をしながら、時々眼を二つの品物の方に向けてゐました。

「其のうちで、どの商買が一番好かつたね」と、私は、好奇心から、つい話をしかけた。

「さあ、どれがよろございましたか、人によつてみんな異ひませうが、俺には、鳥屋をしてゐた時が一番金が儲かりました」と、彼は、答へてまた太い煙管でたばこを喫ひ付けてゐました。

「なんで、其の商買をしてゐなかつたんだね」と、私は、つい金の儲かる商賣であつたなら其れをつづけてゐて、よささうなものだと考へたので聞きました。

男は、また眼の縁に小皺を寄せて笑ひながら、

「殺生は氣持のいいもんでございませぬ。牛や馬などになりますと、物をいはないといふばかりで、なんでもよく分つてゐます。其れさへ殺して食べるんですから、雞などはなんでもないやうなもんですけれど、やはり殺されることはよく知つてゐます。鳥屋の手に渡つて、籠の中へ入れられると、目方を殖すために餌を澤山やつても、ぐんぐんと目方が減るばかりでも分りますさかへ、殺生をすることは罪になるもんです」と、男は、言つて、過ぎ去つた日のことを追懷してゐました。

この男の語つたのは、これだけであつたけれど、籠の中へ入れられて餌をやつても目方がぐんぐんと減る、鳥屋の手に渡つた時から鳥はもう死を知つてゐると言つたのが、私には少なからず感動を與へたのです。

其れは、私は、毎日のやうに町の中を散歩します。自働電話のある往來の四つ角に一軒の鳥屋がある。其の家の前を通るたびに、其の店頭の低地には、雨降りの後などはよく水が溜つてゐる、其の中を田を掻き廻すやうに家鴨が歩いてゐる。傍には、いくつも竹籠が並んでゐて、其の中に雞が入つてゐるのを見ました。すぐ籠の上には、此家の雇人達が厚い臺の上で雞を裂いてゐるのです。血は、其の板を眞赤に染めてゐます。庖刀の光りが血の色に曇つて氣味悪く、空氣の裡に閃きます。そして、肉は細かに刻まれて一處にかためられ、骨は何か物の殻かぶのやうに隙間だらけになつて臺の片隅に小山の如く積み重ねられてゐます。

其れを見るたびに、私は、いつも籠の中の雞がどんな氣持でゐるだらうと考へるのです。つい朝まで、いつしよに餌を拾つて食べてゐた仲間が、こんな姿になつてゐるのを見ても何とも思はないのだらうか？ 私は、鳥の心理は如何なるものかといろ／＼に考へました。其れとも

造化は、鳥には自省といふ意識を與へなかつたのだらうか。そして、はじめから、かうした不幸なものとして存在するやうに運命づけるために、都合よくなされたのだらうかとさまざまに考へたのである。

ちやうど、私は、胸毛の白い、全體の毛色の褐色がかつた牝雞が下を向いては餌をつゞいて、其れを飲み込む時に、仰向いて、出来るだけ頸を伸ばしながら、眼をしばたいてゐるのを通りかかりに眺めたからであります。

そして、この牝雞に、臺の上の有様が籠の荒い編み目を通して見えない筈がないからでありました。

長い間の私の疑ひは、道具屋の言つたことで解けたのであります。やはり雞には、よく分つてゐる。其れでいくら餌を澤山やつても目方は減つて行くのだ。其れは、雞が心で死を怖れるからだ。

何にも言はない彼等に、こんな恐怖心があるといふことを誰が同情をして、常に見るでありませう。黙々のうちに、悲しみ、痛み、怖れる、このいぢらしい有様を平常、誰が思ひやり深

く見守るでありませう。私は、雞が黙つて、ああして籠の中にはいつてゐる事實そのことが既に怖しくなりました。

男は、まだいろ／＼屠牛場の話や、自身が子供の時分に見た記憶などについて語りましたが、私は、もう雞のこと一つで、胸の中が一抔になつてゐて、其れを考へるだけでも、他のことに耳を傾ける餘裕がなかつたのであります。

そのうちに、男は、テーブルを擔ぎ、椅子を抱へて出て行きました。私は、其の二つの行衛を見送つてゐました。

自分より強い力を持つてゐる者に對して、これに抵抗することが出来ずに、黙つて其の運命に甘んずるといふことは、なんといふにぢらしいことでありませう。

もう外の木立の影は、ぼんやりとよく分らなくなりました。冷たい青黒い空の色が次第に鮮かになつて、燈火の光りが灰色の路につづいて、何か楽しいことを思ひ出させるやうに輝いてゐました。

ふと、私は一枚の寫眞をしまつて置いたことに思ひついたので。すぐに立つて、私は書棚

の前に行きました。そして抽斗を探つて新聞の切抜きや、紙などの間にほさまつてゐる繪を引出して、またもとの机の前に坐つて燈火の下で其の寫眞を見ました。

其れをぢつと見詰てゐるうちに、私の體は震へるのを感じました。どうして、こんな怖しい光景を寫眞に撮つたであらう。どうしてこんな怖しい光景を人前に晒らすことが出来るだらうか。そして、これは正しいとなのであらうかといふやうな疑惑が一時に頭の中に起つて來た。

この一葉の寫眞版は、ある雑誌の口繪となつてゐた、外國の某監獄で行はれた死刑執行の刹那の光景であつたのです。しかも其の囚人は、二名の婦人であつて罪名は嬰兒殺戮といふのである。彼等がどんな風にして、子供を殺したかはちよつと想像に浮んで來なかつたが、いま、まだそんなに年寄りでもない、生先きのある女が、病氣でも何でもないので、一思ひで命をとられやうとしてゐる有様は空想でない現實であつた。

正面には、長方形の扉が開いてゐます。其の内側はそんなに廣いとは思はれない。しかも一二尺落窪んでゐて、其の中に立つてゐる囚人の足先きは、扉の閉る下の石段に隠れて見えなかつた。そして、もとより其の中は扉が閉つてしまへば全くの暗黒であつて、何處からも光線の

射込む處がないので、一つの窓もついてゐなかつた。ただ囚人の立つてゐる頭の上の天井から一筋の縄が下つてゐる。其の天井も外からは、あまり高いので扉の開いてゐる口からは見えなかつた。其の縄は布を被^カされた女の頭についてゐた。女はあちらを向いて立つてゐるので、見えるのは、女のうしろばかりであつた。うしろに廻はされた兩手は、手頸の處で二つ堅く結られてゐる。これは、死刑になる瞬間であつて、女は、いまか、いまかと、自分の命をとられる時刻を胸の裡ではかつてゐるやうに、俯向き加減になつてゐる。どんな顔をしてゐるか、其れは布を頭から被されてゐるので、たとへ前にまわつて見ても分る筈がない。けれど一枚の布の下で懊惱と絶望のために苦しんでゐる怖しい形相を想像することが出来る。そして、同時に肩から背を傳はり、腰にかけて、足の方へ流れてゐる服の下には軟かな女特有の肉附きがあることを思はせる。曲線のみが、こんな怖しい場合にあつても、事件と無關係に自然の美を示してゐる。

「人間に、人間を殺す権利があらうか？」と、これを見たら誰でも疑ひ、思ふにちがひない。

長方形の扉の開いた外側には、壁の處に一つのいぼが出てゐた。其のいぼに手をかけて背の

高い、あご髭の長い帽子を被つた、年をとつた獄吏が立つてゐる。獄吏は、指頭に全身の神経を集めてゐる。其のいぼを押せば、時を経たずに、室の中に立つてゐる女は死ぬのである。電氣で死刑を執行するのである。

これを見るだけで、私には充分でありましたのに、なほ、一人の女囚が、外に立つて自分の番の來るのを待つてゐます。

恐らく、數分間前に、其處で二人の女は、説教を聞いたのでありませう。そして、生の終りで、死によつて救はれる未來のために祈りを捧げたのでありませう。腰掛の上に一冊の聖書は、ある頁を開いたまま伏せて置かれてあつて、傍に宣教師が見まじき光景を見なければならぬやうに顔を擧げて心の苦痛を堪へながら、片手を下顎に當て俯向いて立つてゐます。

偶然に、一人が、一人よりも先に殺されるのです。ほんたうに、其のことは偶然であつたにちがひなからう。そして、二人は、ついに二たび生きながらいつしよに並んで立つとがなない。後にたつた女は、やはり頭から布を被されてゐました。兩手はうしろに廻されて、結ばれてゐました。そして、兩方の足もまたしつかりと結ばれてゐました。二つの靴の先きが觸れ合ふや

うになつてゐます。しかし、かうして一處に立つてゐることは出来ても一步も歩むことは出来なかつたであります。だから、一人の女が殺されたら、そして、其の女の番になつたら、尙ほ、其場に二三人立ち合せてゐる帽子を被つた獄吏等が、この女を抱へて扉の開いてゐる入口から室の内へ移すにちがひない。ちやうど荷物か何かを運ぶやうにして……。そして、前の女のしたやうに、同じ場處に立たせられて、やはり天井から下つてゐる繩を頭に結び付けられるのであります。

呼 夜のことであるらしい。晝間のことかとも思つたが、大きなランプが、外側の天井につる下つてゐるのを見ると、夜中のことであるらしい。そして、考へて見るのに、こんなことがどうして白日行はれ得るであらうか。

こゝにも、私は、弱い者が黙々として死んで行かなければならぬ事實を見るのです。彼等は悪いことをしたにちがひない。けれど、かうして人間が、人間を殺す権利をどこから得たであらうか。やはりこのことも、また悪いことであるにちがひない。もし、この女等が殺されなかつたなら、なほ幾年か彼等は世間の人々といつしよに何等異なるところがなく笑ひ、悲しみ、そ

して働いて生活することが出来るであらう。その間に、なんで彼等は他人のために泣かないといふことが出来やう。また美しいものに對して、正しいものに對して感激しないといふことが出来やう。

私は、この世の中に、初めから罪人と名づけられるものは一人もない。かうしてみんな生きてゐる不思議な人間なのだと思います。其れを殺して活動を止めることを考へると言ひ知れぬ怖しいやうなことに感じたのです。ついぼんやりとして、寫眞を見詰たまゝに、いつまでもぢつとしてゐました。

ヒヤシンスの花を思ひ出しました。寫眞を机の抽斗の中にしまつて、窓を開けて外の氣はひを覗みますと、夜の空には、星の光りがうるんでゐました。やがて雨になりさうな模様もあつたのであります。かうして、降る一雨毎に暖かに向つて、土はゆるみ、其の底からいろ／＼の草の芽がのびるのであらうと思はれました。私は、いよく出かけようとまご／＼してゐました時に、誰か、人がたづねて來たやうであります。

しばらく顔を見なかつたKが、こちらまでついであつたから立寄つたといふのです。Kと

私とは専門の仕事が異つてゐましたが、もう數年前からの親しみでありました。彼は先刻まで、テーブルと椅子の置いてあつた場處に坐りました。

「其後、變つたこともありませんか」と、二人は、互に言ひ合つて笑ひました。

「穏かな、暖かな晩ですね。もう、あまり寒いこともないでせう」と、私は言つた。

「さうです、散歩にお出かけになつて、おるすではないかと思つて來ましたが」と、Kは言ひました。

二人は、そんなやうなことから、いろ／＼な話をした。私は、かうして話をしてゐるうちに、死刑囚の寫眞がありありと眼の中に浮んで來たので、机の抽斗を開けて、其の寫眞を取り出し、樹ました。そして、Kに示して、

「さつき、この寫眞を見て、いろ／＼なことが考へられてならなかつたのです」と、私は、言ひながら、彼が、この寫眞に對して、どんな感想を抱くであらうかと、知りたかつたのであります。

Kは、しばらく寫眞の上に眼を落してゐた。やがて、眼を上げると、

「死刑囚について思ひ出すことがあります。其れは、私が支那を放浪してゐる時分に、出遇つたことなんです。まだ、あなたにもお話しなと思ひますが……誰にも語つたことがないのだから、忘れ難い記憶があるのです」と、Kは言つた。

彼は、もはや私の示した寫眞の上には、心をとられてゐなかつた。そして、遠い記憶をありと見詰めるやうに、瞳を凝らして、燈火の下で私の顔の方を眺めて、語つてゐました。

「まだ、聞いたことがありません」と、私は、彼に其の話を促したのであります。

Kは、今から數年前までは、支那の方に行つてゐました。彼地で、どういふことをしてゐたか、もとより其等についての委しいことは、彼自身より他に知るものはないが、私は其れを聞かうともしなかつたのです。彼との交際も其れ以後のことで、全くふとした機會からであつたから。

「もう八年ばかりも前になりますが」と、Kは語りはじめた。

「君は、眼を見て其の人間を見分けることが出來ますか。苦勞を経験して來た人は、自づとも

のを見る眼付に共通なところがあります。其れは敬虔な信念の閃きに近いもので、なつかしい感じを與へるものです。少なくとも、さうした経験のある人々なら、よく其の眼付きを理解するものです。考へて見ても分ることで、多年暗黒な牢獄の裡に坐つてゐたならばどんなに僅かな隙間から洩れて来る光線でも有がたいでせう。そして、其の光線にちつと見入る心持は、どんなに敬虔な澄みきつたものでありませう。獨り、自然に對してばかりでなく、さうした人々は、やはりお互に對してもこのやさしみの籠つた瞳をちつと向けるものです。

呼 さうです。もう冬に近い、秋の寒い日のことでありました。私は、山海關の停車場へ行く道を何事か考へながら、下を向いて歩いてゐました。たまく／＼私の前を行く者があります。顔を上げると古くなつた洋服を被た老人が、黒い帽子を眼深に被つて、汚れた靴を引摺るやうにして同じ方向に歩いてゐるのです。私は、其の人の後について行くと、老人は後方を振り向きました。其時、私の眼と其の老人の眼とびたりと互に覗き込むやうに合ひました。其の眼は單にやさしみがあるといふばかりでは言ひ表はせなかつた。人生に對して、ある理解を有するものだけに限つて有するやうな澄んだ眼でありました。私は、其の老人が何人であるかを知りませ

んが、過去の経験についてほど會得することが出来るやうな氣持がしました。それで、私は私も微笑むと、老人は決して相手の感情には釣込まれないで、少しも最初の印象を變へずに穩かにうなづいてゐるやうに、灰色になつた長い顎髭は揺いでゐるのです。

二人は物も言はず、たゞ顔を見合つたといふだけであります。そして、私は、老人を追越して停車場に行きました。

汽車は南に向つて走つてゐました。窓の外には、荒寥とした田畑が見られた。擾亂と民心の不安とで、其のあたりは荒れ果て、ゐます。何を見るにつけても、この老大國の運命は占はれるのでした。

空は雪でも降りさうに曇つて、凍つた雲が低く遠く野原の上に漂つてゐて、車室の中はうす暗かつた。まだ燈火がつかないので、私は、窓際に、ポケットから取り出した地圖を翳すやうにして、いまゝで通過して來た土地や、これから行かなければならない土地の所在などを眼分量で其の距離などはかつてゐました。

其時、不意に私の肩を叩いたものがあります。驚いて振向くと、先刻、停車場へ來る途中で

見た老人でありました。

「ちよつと地圖をお見せ下さいませんか」と、老人は、調子の整つた日本語で言ひました。「さあ、どうぞ」と、私は、手に持つてゐる地圖を老人に渡しました。

老人は、熱心に地圖の面に見入つてゐました。其の澄んだ瞳は、肉の削げた頬から下に向つて飛出すやうに輝いてゐました。

私は、心に思ひ當ることがあつたから、

「あなたは上海へおゐでになるのでせう。私は天津に降りるのですから、其の地圖をお持ちなさつても構ひません」と、私は、なんでもないやうに言つた。

「いや、もう分りました。有がたうございます」と、老人は答へて、地圖を私に返しました。

車室の内に燈火がつく時分に、老人は何處へ行つたか見えなくなりました。

私は、あの老人が最近まで牢獄生活をしてゐたといふことは、其時、彼が手を差しのべた時にちらりと見えた、手錠の痕がついてゐるので分りました。

いまだに、あの時のことを考へると、何ともいへない氣持がするのです。私は、獨りでこの

時のことを思ひ出しては考へるので、誰にも話する氣になれませんでした。

Kの話は、これだけであつた。

ヒヤシンスの花を買ひに出やうなどと思つてゐたが、Kを送り出した時には、もう、この黒水晶のやうな早春の夜は、大分更けてゐました。

浮浪者

空想から破れた時には、佐吉は汽車の中にある自分を見出したのであります。

汽車は、廣い野の中を殆んど全速力を出して走つてゐた。其處には、人家が見えなかつた。野は、物淋しく一面に枯れかゝつてゐました。

もはや、ある小山も、森も、みんな後になつてしまつたのです。其の小舎の中には、二年間働いてゐました。あまり誰とも話をすることもなく、朝から、日が暮れるまで黙つて木を切つたり、また其の木を板に挽いたりしてゐたのであつた。

北方の青い空の下に、黒く頭を擡げてゐる森の片側が、赤く火の燃え付いたやうに入日に反映して、きら／＼と風に木の葉の動くのをちつと立つて見詰めたこともありません。

隣の小舎といつても、大きな森を一つ越して、彼方の小山の麓にあつたのだが、其家の女房が水を汲みに來た時、通りかゝりに、よく聲をかけて行つた。また、嫉妬深い亭主が銃を擔い

で出かけた留守などには、立寄つて佐吉が仕事をしてゐる傍で、木に腰をかけている／＼な話をした。

彼女は、まだこの北海道から離れたことがないばかりでなく、賑かな小樽の町も、函館の市街も見ることがなかつた。其れで、東京のことなどは、夢にでもいゝから、どんな處であらうかと憶がれてゐたのであります。

「何がいゝところなもんか。怖い處なんだ」と、佐吉は、言ひました。

「怖しいたつて、熊や、狼が出て來はすまいに」と、彼女は、鳥の巢のやうに繕れた頭髪をしぶながら、不思議さうなまなざしで聞いた。

「熊や、狼は、出ないが、金を持たない者や、弱い者は、みんな殺されてしまふのだ」と、佐吉は、鋸を引く手をゆるめて答へました。

彼女は、しばらく伏目になつて、黙つて考へ込んでゐた。まだ、二十五六であつたが、派手な着物を身に纏ふではなく、また、寶石や、紅、白粉で化粧をし、飾るではないから既に、年がすつと老いて見えた。けれど、眼には、尙ほ、何處やらに青春の名残をとどめてゐるやうに、

輝いて見えることもあつた。

「妾など、行つても殺されるだらうか」と、彼女は、殆んど其のことについて想像が付かないやうに聞きました。

佐吉は、東京にゐた時に、労働をすることについて職を選ばなかつた。其の日、其の日の生活に追はれて、其れを選ぶことが出来なかつたのであります。自分ながら思ひ出して、あゝいふやうに、いろ／＼な仕事が自分に出来たものだと思ふ位であります。けれど、いつも貧困と不安から脱れることが出来なかつた。悲しみは、常に、自分の後からついて來た。

この都會を逃れたら、少しは、生活は樂になるだらうと思つて、つひに友達に別れて、東京を離れた。けれどやはり後から、貧困と悲しみは追ひかけて來た。

流れて海を渡り、北海道に入り、而して、この稀にしか人の來ない森の中に、この小さな隠れ家を見出して、流石に、此處までは、不安がついて來て、自分を脅かすやうなこともないと思つた。

彼が此處に來てからも、冬籠の間に、熊に食はれて三人死んだ。また、自分から切り倒した

木の下に敷かれて死んだ者が二人あつた。何處にあつても、不幸は人間の身の上に見舞つて來ることを知りました。

彼女は毎日二つの大きな桶に水をいつぱい入れて、其れをむつちりとした肩に擔いで、草履をはいて、坂を上つて來た。而して、小舎の前に来ると下して、入口から覗いたのです。水の面は、鏡のやうに光つて、空の雲の影を映した。

を 佐吉は、彼女が都會の生活に慣がれて、其のことを口に出すと、どういふものか、そんな處はつまらない處だと頭を振つて打消さずにはゐられなかつた。

呼ぶ 春から夏にかけて、深い緑につまれました。彼女は、やがて桶を擔いで森の中を通つて行きました。其の姿は、直に木の繁みに隠れて見られなくなつた。佐吉は、また黙つて仕事をしておりました。草履を穿いて來る彼女の足音は、來る時も、また去る時も、よく聞き取る事が出來なかつた程、静かであつた。濕り氣を含んだ、冷たい土の上に、刻まれる彼女の足音は、梢の蔭で鳴いてゐる小鳥の耳にすら入らない程であつたから、佐吉は空想に耽りながら仕事をすする時に、不意に、彼女から聲をかけられて、びつくりすることもあつたが、僅かに、それによ

つて孤獨の生活を慰められて來ました。

夏が去つて、秋が來た。秋も老けると、早くも地の上は凍つた。

浮 彼女の夫といふのは、やはり木を切り、また獵に出かけてゐたが、無口の人付きのよくない男で、濃い髭が口のまはりから頬にかけて一面に深く生えてゐました。而して、眼は底意地の悪さうに險しく光つてゐました。

浪 來年の春、雪が解けて、木々の梢が芽を萌くまで、あのやさしい彼女とも言葉を交はすことがないと考へると、佐吉は、急に人間といふものが戀しくなつた。今迄、すべての人間を呪つて來た。また、人間といふものは、弱い者をば何處まで虐げるか知れない、冷酷な者だと思つたのが、急に、其の人間が戀しくなつた。また、男や、女の群がつてゐる、其處にはいろいろ面白い光景の思ひ浮べられる都會が戀しくなつたのである。

者 すべての流浪者が、大抵さうであるやうに、何處か暮らしたい、而して、景氣のいゝ處を探すために、彼は、また旅に上つたのであります。

何處へといふ當もなかつたけれど、少しでも南の方へ、東京へ距離が幾分でも近くなる方

へと志ざしたのでありました。彼は、汽車の窓から頭を出して、今来た路の方を振り返ると、雲切のした青い空の下をオホク海の方から吹いて来る寒い風が顔を吹き止まなかつたのであります。

途中で、彼は、正宗の二合燗を買つて飲みました。而して、汽車に揺られて、一眠入りしたかと思ふと、追分驛で乗換へなければならなかつた。

佐吉は、ある驛で一つの光景に心を捕へられました。彼の乗つてゐる客車は、空いてゐました。すぐ前にあまり綺麗な風をしてゐない五つばかりの男の子が手に赤林檎を握つて、鼻をたらしながら憂鬱さうに、腰掛の上に立つて、窓から外を眺めてゐる傍に、三十前後の女の人が、何か口の中で頻りにつぶやいて、また、途方に暮れたやうに四邊をきよきよと見廻してゐるのでした。

其の女の眼は、幾たびか、佐吉の顔の上に止まつた。佐吉は既に、酒の酔は醒めてしまつたが、尙ほ、幾らか顔の色が赤かつたのと、あまりいゝ様子をしてゐなかつたので、女は彼に對して何か言ひ出しにくさうにためらつてゐる如く見られた。女は、誰か他に話しかける相手が

なからうかといふ風に、右を見たり、左を見たりしてゐました。

つひに、女は、我慢がし切れなくなつて、不意に、佐吉に向つて、問ひかけました。

「あなたは、どちらまでお行きになりますか」と、女は言つた。

「山形まで行きます」と、佐吉は答へた。

其處には、しばらく音信は絶えてゐるが、彼の知つた者が住んでゐる筈であつた。

「誰か、この子を汽車の中に置いて行つたのですよ。懐の中にこんな手紙が入れてありました。妾は、札幌までしか行きませんが、後はお世話でも、あなたが見てやつて下さいませんか」と、女は一通の手紙を子供の懐の中から引き出して、佐吉に示した。

佐吉は、その手紙を受取つて讀みました。すると、其れには、拙い字で、「この子は仔細があつて、東京へ行く者です。實は、連れて行くのですけれど、いけませんから、お情けある方にお願いたします。上野の停車場には迎ひに出てゐる者がありますから、どうか面倒を見て連れて行つてやつて下さいまし。其の御恩は一生忘れはいたしません」と、書いてあつた。

「何處からこの子は、獨りでゐたのですか」と、佐吉は驚いて、何にも知らずに、黙つて、珍

らしさうに外の景色の動くのを見てゐる子供の様子を見守りました。

「妾もよく知りませんが、ちやうど乗り合はすと子供が泣いてゐるのです。お母ちゃんが何處かへ行つたといつて泣いてゐるのです。見ると、懐から、何か書いてあるものがぶら下つてゐますので、其れを讀んで、始めて子供を汽車の中に置き残して行つたといふことが分りました」と、女は答へた。

「この文字は、女が書いたんですね。きつと母親が書いたのでせう」と、佐吉は、言つて、其の女と、子供の顔とを見較べたが、其れは全く何の關係のないといふことが分つた。

「妾は、何うしたらいいかと思つてゐたのですよ」と、其の何處かさびしい、人の好さうな女は、佐吉を頼み甲斐ある人だと感じてか、さも安心したやうに言ひました。

佐吉は、自分が連れて行ける處まで連れて行つてやらうと考へた。

「私は、行く處までつれて行きます。而して、其れから先は、また誰かに頼むことにしますから」と、彼は、女に言つた。

子供は、東京までの切符と、ほんの少しばかりの小使錢とを財布に入れて、帯に結び付けてゐた。而して、子供を置き残して行つた母親が、道中食べるために、林檎を五つ程、別に新聞紙に包んで子供に渡してあつた。

佐吉は、子供が泣き出した時何うしたらいいだらうと思ひました。彼は、其れがために子供の機嫌を取りました。子供は、泣かなかつた。物を言つても、まだよく分らなかつたけれど、可愛がつてくれる人の心持だけは、よく了解をして佐吉に、直に慣れてしまひました。

佐吉は、この子供を不憫に思ふと同時に、この子供に別れなければならなかつた母親の心持に對して憎しみよりは、却つて言ひ知れぬ悲しみを感ずました。而して、いろ／＼に其の母親の姿を想像しました。

札幌で、女は降りてしまつた。女が降りる時に、もう一度子供の身の上について佐吉に頼んだことを彼は思ひ出しました。あの女とこの子供とは、いはゞ何の關係もない他人であつたが、尙ほ、あの女は、この子供の身の上を案じた。而して、今も尙ほ案じてゐるだらう。彼は、この人生に於ける愛について考へた。此時、子供は、彼に抱かれるやうに倚りかゝつてすやくと眠つてしまつた。

どんな夢を見てゐるのだらう。恐らく、母親といつしよにゐる時の夢を見てゐるにちがひないと思はれた。子供は、無邪氣な顔をして、鼻水の乾いた、林檎の皮のついてゐる口の邊りに微笑を浮べてゐた。佐吉は、思はず其の顔に見とれた。すつと、子供は聲を立て、笑つた。けれど子供は、尙ほ、よく眠つてゐるのであつた。

しかし眼が醒めた時に、子供は泣き出した。其處には戀しい母がゐなかつた。而して、知らぬ男の手に抱かれて、燈火の付いた、うす暗い汽車の中にあつたからである。

「坊は、強いのだらう。さあ、いゝ子だから泣くんぢやない。強い者といふものは泣くもんぢやない」

佐吉は、かうして子供をだました。かういふ経験はこれまでなかつたと言つていゝ。すつと尙ほ少年の時分に、弟をだましたことがあつたであらうが、其れは忘れてしまつた程、遠いことであつた。

しかし、子供は、直におとなしく、黙つた。彼は、一層、この子供に對する愛着を感じさせられたのでありました。

「其の先、東京までは、誰に頼んだらいいだらうか。親切にしてくれる人に頼みたいものだ」と、彼は思ひました。さう思ふと、彼は、この汽車の中に、そんなやうな人は乗つてゐないかと、きよろ／＼と四邊を見廻はしたのであります。

彼は、はからずも札幌で別れた、あの淋しい、人の好さうな女の人が、自分に向つてこの子供を頼む前に、幾たびも自分の顔を見ては言ひ出し兼ねてゐた様子を思ひ出した。而して、今はつきり、あの女の人の心持を知ることが出來た。

佐吉は、夜汽車の中で、この不幸な子供の小さな體をしつかりと抱いたまゝ、俯向いて其の體に顔を押し付けるやうにして、今更、人生の悲しさを感じ、たゞ愛のみによつて救はれるものだといふことを身にしみて覺えたのであります。

函館から汽船に乗り遷る前に、切符を檢べられた。佐吉は、連れてゐる子供について、係員に委しく話さなければならなかつた。係員は子供の懐にあつた、書いたものを讀んだ。而してしばらく仔細に子供の様子を見守つてゐた。子供は、佐吉に縋つてゐた。

「私は、山形までしか行かない者です。どうか其の先のことは、よろしく願ひたいもので

す」と、佐吉は、其の係員に話しました。

この時、汽車に乗り合はして、この光景を見た人々は、皆なこの不幸の子供の上に、また何の關係もない旅人が其の子供を慰はつてゐる、其の人の上に等しく視線を投げてゐました。

「ちよつと、お待ち下さいまし」と、係員は彼方へ行つた。

やがて其の係員は、他の二三人の者とやつて來ました。

「ほんたうに、お氣の毒でございました。たしかにこの子供は、此方で保護をして東京まで送り届けますから安心下さい」と、言つて、係員は其の子供を抱き上げた。

子供は、佐吉に別れるのを悲しがつて、泣き出しさうな顔付をしたが、係員が、子供の頭を撫で慰はつたので、眼にいつばい涙を溜めながら子供は泣き出しもせず、彼方に連れられて行つてしまつた。

佐吉は、また一人になりました。もはや遠く、遠くなつてしまつた、木を挽いてゐた森の中の小舎を思ひ出しました。隣の女房と其の夫のことを思ひ出しました。

津輕海峡の沖は静かでありました。人々は甲板の上に出て、茫々として前方に開けた青い海

を望み、離れ行く北海道の山々が、波間にうすれてゐるのをちつと見返つてゐました。

いつしか、日は海に沈まうとしてゐました。この時、西の空には、雲が花瓣を散らしたやうに、ちり／＼に飛んで、地平線は、炎の流れるやうに、次第に燃え擴がつてゐました。

佐吉は、子供のことが案じられてならなかつたのです。而して、其の姿を探してゐました。

すると、二等室の甲板の上に、子供は立つて、ぼんやりと沖の方を眺めてゐました。しかも胸には、大きな圓い黄銅の札をぶら下げて、其れには「東京行」と書いてあつた。尙ほ、其れには、鐵道院の文字が刻まれてゐる。子供は、誰がくれたか知れないが小さな手に蜜柑を握つてゐました。

「お前の未來は、この海のやうに廣いんだ。大きくなつたら、社會に出て戦ふだらう。其の時今日のことを覚えてゐやうか？」

佐吉は、無心にちつと沖の方を憂はしげに見詰めてゐる子供の眼の光りを見て思ひました。而して、彼は、感慨に堪へざるものゝやうに自分の三等室の方へ踵を返しました。

人間の機械

寺があつた。壊れかゝつた門の際に、一本の櫻の木がありました。木は年をとつてゐて、冷たい灰色の空に枝を擴げて、葉が落ち盡してから長い月日の間、憂はしげに見えてゐたが、そして、寒い風は、其の細かな枝に鳴つてゐたが、いまは、うす赤味を萌して花を咲きかけてゐたのであります。

機 空の色も、いつか緑色に變つてゐた。日の光りは、土の中に染むように暖かに當つて、忘れてゐた、いろいろの記憶までが、心の中に蘇生つて來るのを覺えたのであります。

一層そのことは、哀れ深く感ぜられた。音もない、華かでない田舎の春は、足音を立てずに野道を歩いて行くのです。其の日、私は友のKと二人で、寺の門前に來ました。そして、櫻の木の下にあつた石に腰を下ろして雑誌を二人は繕いて覗いてゐました。

「君は、誰の小説が一番好きだい」と、私は、私と頭を並べて下を向いてゐるKにききました。

二人は中學の同じ四年生でありました。

「僕は、Mの小説が、誰のよりも一番好きだよ。Mは徹底したニヒリストだ。何うもかうもこの人生はならないんだね」と、彼は、答へました。

面白をかしく、賑かに笑つたり、話したりして遊ぶことがあるけれど、また、急に寂さうに黙り込んで、みんなから獨り離れて、茫然として考へ込んでゐることのあるKに、私は、Mの小説が一番身にしみることを成程と思はずにはゐられませんでした。けれど、

呼 「君も、僕も、まだ若いんだらう。これから人生といふものが分るんぢやないか。いまから、君は、ほんとうにさう無興味でゐることが出来るのかい？」と、私は、たづねた。

樹 寺の門前を過る道は、遠く町の方へとつゞいてゐるのであります。其の道の上には、蜻蛉のすきとほる薄い羽根を思はせるやうな陽炎が、ちら／＼と立ち上つてゐました。けれど、其れだけで、人影も見えなかつた。たゞ遠方の木立の頭が、いつも其れを見るたびに、未知の世界のあることを思はせげに、霞んでゐるのでした。

Kは、頭をあげました。彼の眼は、水の中に沈んだ眞珠のやうに光つてゐた。

「Mの小説の中に書いてあつたよ。何かこの先きあるにちがひないだらう。其れを自分ばかりが知らないのだ。みんな年をとつた人々は其れを知つてゐる。其れで、みんなが安心をしてゐるのだ。大きくなれば自分にも、其れが分るだらう。不安でたまらない。そして、自分は、年をとつた。また、いろ／＼の人について聞いて見た。やはり、彼等は、なんにも知らないのだ。自分は人生の虚無を感じた。と主人公が言つてゐたよ。僕もやはり、この人生は、誘惑に違ひ間 ないと思ふ。

の いつか誰かの翻譯で露西亞の小説を見たら、何か先に安住の地があると思つて、せつせと山の頂きを望んで上つて行く。けれど何處まで行つても其れらしいところがない。いつしか山の頂に達した。しかし其處も變つたところがない。また、この先に何かあるやうな氣がして、せつせと歩いて行くうちに、いつしか眞暗な深い谷の底になつてしまつた。死は彼を待つてゐたといふのがあつた。やはり人生の虚無を語つたもんだね。

よく考へて見れば、其れにちがひないんだ。短かくても、長くても、其れは人生なんだ。して見ればこの刹那がやはり人生のすべてといふことが出来る。五十年、六十年生きてゐたら、

人生を味ひ得たといふ理屈のある筈がない。刹那は、即ち永遠なんだ。かうして、二人が、此處に話をしてゐる。其れ以外に人生は何もないのだ」と、Kは、言ひました。

其の日のことを、私は、よく憶えてゐます。

數日間も経つと、其の櫻の木の花は美しく咲きました。寺の前に立つと、御堂の壊れた白壁の痕が、咲き誇つた花のために全く隠されたのです。

ある日、私は、Kと並んで道を歩きながら話をして學校から歸つて來ました。其時、Kは突呼然にも私に向つて、

「學校を退いて、東京へ行くようになるかも知れない」と、言つた。

かうして仲の親い二人が、永久に別れなければならぬといふ悲しみと、いくら憧がれても、容易には行けさうに思はれない都會へ友達はいよく行くといふ羨望の念とがごつちやになつて、私の頭はふらく／＼としました。

しかし、Kは、其のことをあまり喜んでゐなかつた。決して、彼は、嬉しさを腹の中に隠したのでない。父親のない彼は、叔父を頼りに上京して、今後母のために生活の道を考へなければならぬ境遇になつたのだから。

さびしい春の日暮方、私は、赤く林の間に沈む夕日を眺めながら、友のことを思ひ出してゐたのは、其れから、あまり長い間ではなかつた。花は、すっかり散つて、若葉は水色の空の下で晩方の風にふるひてゐた。

Kからは、都會についての感想や、其の日々の生活の有様などを、其の當座はよく知らしてくれたが、そして、私も、何かと田舎の様子などを書いて送つてゐたが、いつからともなく、Kからたよりが來なくなつた。従つて、私も返事を書いて送るような機會が杜絶へて、日は流れた。

私は、學校を卒業すると、しばらく百姓をしてゐました。其時分になつて、またKから手紙が來ました。

其れには、かう書いてあつた。

「僕は、銀行員になつた。全く自分には思へがけないことだ。しかし、何をしたつて同じなのだらう。毎日、僕は、大きな建物の中で金の勘定をしてゐる。いろ／＼の階級の人やいろ／＼

の風をした男や女がこの建物の中に集つて来る。そして、血眼になつて、金を出したり、入れたりしてゐる。人生といふものが、さながらこれより他にないと思つてゐるように、彼等の神經は、みんな手に握つてゐる金の上に注がれてゐる。其の何よりも彼等にとつて、またこの社會にとつて大切な金をば、殆んど僕は、日に幾千圓、時に幾萬圓となく算へては出したり、受けたりしてゐる。全く妙な氣持だ。この金のために泣いたり、笑つたり、死んだり、殺されたをりするのだらうと思ふと、全く妙な氣持だ。僕までが、この金のために、血眼になつて、其れに捕はれなければならぬかと思ふと全く妙な氣持だ。最初のうちは、僕は狂人になつて、この紙幣を引裂きはしないかといふやうな全く妙な氣持がしたよ」

樹 かう書いて來たKの手紙にも、かうした經驗のない私は、其れ程の同感を持つことが出來なかつたのです。

其れから、またしばらく経ちました。

ある時、Kから最近の寫眞を送つて來ました。全く、其れを見ると、昔、短かい袴を穿いて、帽子をあみだに被つて、いつしよに學校へ往來してゐた時分とは様子が變つてゐた。頭髪を眞

中から奇麗に分けて、洋服を着て椅子に腰をかけてすましてゐました。

「オイ、君がK君かい」私は、覺えず其の寫眞を見た時に呼びかけた。

すると、すぐ其の後で、Kから手紙が來ました。其のれには、かう書いてあつた。

「僕の變つた様子を見て、君は、さぞかし驚いたらう。しかし東京の銀行員の様子といふものは、みんなかういふもんだ。朝、晩、電車に乗つて見たまへ、どれがどれだか、ちよつと分らないやうに、こんな様子をした月給取りでうぢや／＼してゐる。アンドレエフの小説の中に、こんなやうなことをちよつと書いてあつた。汽車に乗つて前側に腰をかけた人を見ると、同じやうな洋服を着て、ネクタイをして、手に握つてゐるステッキから、其の飾までが似てゐるので彼が自分か、自分が彼か？と疑ふといふのがあつた。

これは、まだしも我慢がされるとして、僕がこんなやうな風をして、紅革の靴を穿いて、物を言ふ時に、ポケットからハンケチを出して、口の周囲を拭き、笑つては、またハンケチで口を拭うといふやうな有様を見たら、君は、憤るより寧ろ呆れてしまふだらう。僕は別に、これも大した意味のないことだと思つて、みんなのやるやうにやつてゐる。この社會に入つて、獨

り異つた風をして、空気を破ることを好まないから」と、自分をあざけるように書いてあつた。其後、長く手紙が來なかつた。私から手紙を出しても返事がなかつたのです。一年ばかり経つた時分に、

「僕は、神経衰弱にかゝつた。其れからついに病氣になつた。やはり、自分までが小さな齒車のやうな機械にされてしまつたんだ。そして、其の齒車は役に立たなくなつた。暗い死が自分を待つてゐるばかりだ」

を
呼 こんなような意味をしるした手紙が來ました。

ぶ 其れから程なくして、私は、Kの死去した知らせを受取つた。なんでも、彼は、いよいよ駄目だといふことが分つてからも慌てなかつたさうです。さういふことを彼の従弟から手紙に書いて來ました。

私は、其の頃、不思議にも次のやうな話を雑誌で讀みました。そして、みながら刺戟されたのです。

外國のことであるが、世界に名の聞えた植物學者であつたさうです。ある日、大學から歸る

と、いつもの如く自分の室に入りました。しばらくすると、教授は、夫人を自分の室に呼びました。

やがて夫人は、書齋に入つて來ました。教授の顔付は、いつもと少しの變りがなかつた。夫人は、靜かに、

人 「何のご用です？」と、聞いた。教授は、黙つて腰掛を指した。

問 夫人は、これに腰を下して、教授の顔を見上げた。

の 「他ではないが、私は、この人生がもう厭になつてしまつた。この先き生きたいといふ氣持がない。たゞ同じような日が繰返されるに過ぎないだらう。其れで、日頃から考へてゐた自殺を、いよく決行したいと思ふのだ」と告げました。

機 これを聞いた夫人は、どんなに驚くかと思ひの外、少しも驚かなかつた。却つて、はつきりとした調子で、夫の顔を見上げながら、

「實は、妾も、前からさう考へてゐました。いま、あなたから、さう言はれたので、こんなに嬉しいことはありません。妾もいつしよに死にます」と、答へた。

二人は、子供がなかつたから、遺産を全部姪に與へるよしを書置いて、二人は自殺をしました。其の日は、やはり、いつもの日と少しも變つてゐなかつた。いろ／＼の物音は、唄のやうに巷から起つて、曇つた空に反響し、人々は下を向いて、無關心に往來の上を歩いてゐました。徹底したニヒリストの死に、私は打たれたのでした。そして、何處か其の面影が、私の友のKであつたことを思はずにはゐられなかつた。

かうして、Kは、永久に去つてしまつたのです。

雨を呼ぶ樹

幾年の後、私は、の都會への人であつた。

ある日、雑誌社から受取つた小切手を持つて、行きつけない街へ銀行をさがしながら歩いてゐました。

金といふものに對して、一種厭惡と反抗心を抱く私は、金といふものが無くなつて、平和に暮らして行ける社會を想像するのでした。

「食ふために生きてゐるのでない。生きてゐるために食ふのだ。其の事を忘れてはならない。

こんなことすら氣付かずに世間には、醉生夢死の生涯を送つてゐるものがある」と、小學校の時分に、老先生は、よく生徒に諭して言つたことを覚えてゐます。

「私は、金のために、自分といふものを忘れてゐる幾多の人々を見ました。そのたびに、私は、金がいつしか、あまりに權力を持ち過ぎたのを憎むのでした。

私達の望んでゐる生活には、もとより金錢は眼中にないのです。其れで、銀行とふようなものに用事がないのです。

人間の機械

「やつと、私は、表記の銀行をさがしあて、建物の中に入りました。めつたにかういふ處へは來ないので、何を注意して見て置くのも經驗の一つだと考へて、眼を、出たり入つたりする人々に注いでゐますと、ある者は、厚い紙幣の束をドツサリと音をさして、小さな窓口から差出します。其れは、金を預けるのです。この金は利息を産んで、ちやうど生物のやうに子供が出來て知らぬ間に不思議に殖えるのです。

次から次と金を出して行く者、金を入れに來る者がつゞきました。まるで、金のために、人間が極度に神経過敏になつて、氣がいぢ／＼として血眼になつて、傍にゐるすべての人々を拘

摸か盗賊のやうに、警戒してゐる淺間しい有様を眼の前に見る事が出来たのです。

「もう、自分の番が来さうなものだ」と、私は支拂課のゐる内側を、黄銅の棒を透して眺めた。

其處には、二人洋服を着て、頭髮を綺麗に分けた男が並んでゐました。そして、出したり、入れたりする紙幣を一生懸命に算へてゐました。

雨 なんとといふ神経質な、物狂はしい有様だ。二人の男は、てんでに手にしてゐる紙幣を一度算
を へる。また、二度算へる。頸を傾けて三度同じように算へる。四たび目には、自己の認識を疑
呼 ぶやうに、いらいらした風で指頭を濡らして、一枚、一枚めくつてゐる。二人が同じやうなこ
とをしてゐる。そして、いよく間違ひがないと信ずるとやつと其れを窓口立つてゐる人間
樹 に渡す。

其の間に、一方には用捨なく、金を預けに来る者が紙幣の束を窓口を重ねる。其の紙幣の束の中には皺くちやになつたり、汚れたりしたのもある。男は、其れをまた、幾度も幾度も、間違のないやうに、自分の認識をすら疑ふまでに算へなければならぬのだ。そして、自省力が失つた時に、彼は、狂人になるのだ。

「人間の機械だ」と、私は、考へました。

しかし、鋼鐵で造つた機械なら、さう容易に壊れることもあるまいけれど、筋肉と神経によつて動く人間は、どうしていつか壊れずにゐられよう。

文明といふものは、産れて来る人間を、全く他のことをさせずに、たゞ金の計算をするだけに、一生使役する程の冷酷を敢てするものだ。

人間 其時、私は、ふと忘れてゐたKのことを思ひ出した。自分の知る人々の中にも、同じ犠牲者
の がゐたんだ。しかも、あの頭によかつたKが……何事に對しても囚はれなかつた、また熱した
機 ことのなかつたKが……洋服を着て、頭髮を綺麗に分け、神経衰弱から、肺病にかゝつて死
械 だ。

謎のやうな話であるが、彼も、この社會に生れて來たばかりに、社會化から脱れることは出來なかつた。それだけ、私は、魔物のやうな現代の社會を呪はずにゐられないのである。金を受取つて、外に出ると、ちやうど花の咲く時分で、街の中は、ざはめいてゐました。歩きながら、少年の日に、Kと寺の門前で、櫻の木の下で語つたことなどを思ひ出した。

「食ふために生きるのぢやない。生きてゐるために食ふのだ。そして、食ふといふことは當然の権利なんだ権利なんだ。……権利なんだ」

私は、頭を上げて街の中を行く人々を睨んだ。

俺は、権利を奪うわけやないぞと、こゝろをうん。

——一九二二、三作——

雪の上

何といふ奇怪な而して惨忍な事件だ。

零度以下三十五度といふ、寒い日である。雪の上は、晝のうちから既に鋼鐵のやうに堅く、白刃のやうに光つてゐた。

空の色は、落付きのない精神病者の眼よりも青かつた。其の下に起つた出来事である。

バルチザンは、十人ばかりの捕虜に假裝會に行く時の様子をさせた。ある者は女の風に、ある者は道化役者の様子に。而して、彼等にラツバを持たせた。赤い革命の旗を擔はせた。而して、十人を一列にさせて、雪の上を落日に向つて行進させるといふのだ。

血の海のやうに、落日は、奈落へ沈む前に雪の上を彩つた。赤い毛氈を敷いて、雪の體を暖めてやるやうに、若しくは、やがて彼等の運命の血腥いのを豫覺させるために、熱のない光線は、雪と共に其の上に並んだ一列を彩つた。

彼等は、ラツバを吹いた。其の力ない響きは、果てしない雪の曠野に擴がつた。ラツバを吹いてゐる者は、其の音の中に限りない怨みを籠めて、この音色が、自分等の味方の耳に入り、思はぬ救ひが来ることを天に祈つたにちがひない。けれど金屬のラツバから出る音色は、やはり知覺ない反響を北方の天に起したまで、ある。

一行は、命ぜられるまゝに進んだ。いつたい何處へ行くといふのだらう。しかし彼等は、其のことを考へるまでもなかつた。赤い革命旗は、冷たく日に輝いた。

夜になる前に、ラツバを吹く者の指は凍つて、びつたりと金屬に附着してしまつて離れなかつた。彼は、氣絶してしまつて、ラツバを口に當てたまゝ雪の上に倒れた。

他の數人は、一齊射撃に遇つた。其等の死骸は、豆を散したやうに散在した。たゞ一人だけが、赤い革命旗を擔がされたまゝ雪の上いつまでも立たされてゐた。

其れは、遠い北方の西比利亞に於ける事實であつたのです。此方の村には、穩かに日が暮れました。西北の空を眞赤に染めて、夕日は山の彼方に沈みました。

其處には、年老つた二人の祖父母が、孫の安否を毎日氣遣つてゐるのです。孫の仁作は軍に加はつて西比利亞に行つてゐました。祖父母は、兩親の共に亡なつた仁作を子供の時分から、どんなに不憫に思つて愛しみ育て、來たか知れませんが、大きくなつて、兵隊に取られて、しかも西比利亞へ行つてからは、毎日、孫の身の上を案じ暮らしたのです。

いろ／＼の怖しい、而して、あり得べきことでないやうな話が傳はつて來ますにつけて、仁作の體に變りがなければいゝがと、神や佛に祈つてゐました。

冬になると、この村にも雪は深く積りました。而して、天氣の好い日には、仁作の行つてゐる、海の彼方が眞赤に炎の燃えたやうに彩られたのです。祖父母は、夜になると炬燵に當つて孫の身の上のことを氣遣ひながら話をしました。變り易い冬の天氣は、忽ち吹雪となつて、粉雪の雨戸にかゝる音が聞え、枯れた笹の葉の騒ぐ聲などがしたのであります。其れを聞くと、二人は、思はず身震ひをいたしました。

戦地は、どんなに寒いだらう。この頃、便りがないが、仁作に變りがないだらうかと案じたのです。

「なか／＼手紙を書く暇もあるまい。あの子ばかり行つてゐるのぢやない。澤山同じ年頃の人が行つてゐるのだ。さう案じたものでない」と、祖父は、婆さんを慰はつてゐた。しかし、二人は、いつしか黙つて、思ひ／＼に、外の風の吹く氣はひに魂を奪はれて、等しく孫の身の上を思つてゐるのでありました。すると海の波の音が、雪の野原の上を何處までも轉がつて行くやうに耳に聞えたのでありました。

雨
を
呼
ぶ
樹
「今夜、寒い晩だが、良い夜の氣だ。仁作もきつと國のことを思ひ出してゐるだらう」と、雪が晴れた、青黒い空に、寒い月の光りが輝いて、白い雲が慌しく網の目のやうに風にちぎられて、折々月の面を掠めるのを仰ぎながら祖父が、家の中にある祖母の耳に入る程の聲を出して外から言ふことがありました。

仁作が、凍つた雪の上に、歩哨として立つてゐた時に、其の眼の中にあつた涙は凍つて硝子珠のやうに光つて見えた。而して、其の眼は、やはり、青い底の知れない空に凍い付いてしまつて動かない月を茫然と見詰てゐた。彼は、口も聞くことが出来なかつた。指頭の知覺は、もうとつづくに失なつてしまつて、銃を持つた、ブロンズの置物のやうにしやつちよこ張つてゐた。

何といふ青い、寒い世界だらうと、其の眼は感歎してゐるやうに、月の光りは、彼の體に照り返つてゐた。

其夜は、稀な寒さであつたさうだ。而して、最も寒い時刻であつたさうだ。交代になつた時、彼の足は雪に喰ひ付いてしまつて上らなかつた。

肉と骨が離れて、其れが腐りはじめた。雪に喰ひ付いた足も、銃を持つてゐた手も、而して、病院に入つた時は、手も、足も、切り取つてしまはなければならなかつた。

寒さの極度は、ちやうど磁石が鐵を吸ひ取るやうに、血の氣の通つてゐる肉體も、雪や金屬に觸れると喰ひ付いてしまつて離れないさうである。而して、無理に其れを引離す時は骨と肉と皮とが剝がれるさうです。

木の枝に、小鳥が止つたまゝ喰ひ付いてしまつたといふ光景は、極北の地に到ると珍らしいことではなかつた。

すべて、冬の間の出來事は、氷が解けて、船が海の上を通ひ始めなければ知ることが出来なかつたのであります。其の時分、内地は木々の梢が芽ぐむ頃でありました。

村の人々は、孫の身の上を案じてゐる祖父母を憫みました。

仁作の父親は、仁作が母親の腹にある間に悪性の風をひいて、其れが原因で死にました。母親は仁作を産むと間もなく脚氣が衝心して亡なつた。祖父母は仁作を二人の手で育てました。風をひかしてはならないといふのが、二人の平常からの一念であつた。冬になると、仁作は、ちやうど毬のやうに、澤山の着物を被せられたので、雪の上で、他の子供等といつしよに遊んでゐても、仁作の脊中は、ちやうど猫の脊中のやうに圓くなつてゐました。

呼 「こんな澤山着物を被ると苦しくて仕方がない」と、彼は、祖父母に訴へた。

ぶ 「何を言ふ。お前のお父さんは、薄着が好きだつたから、あんな悪い風をひいて死んだんだ。

樹 厚着さへしてゐれば、あんなことがなくてすんだものを」と、祖父母は叱るやうに言つて、まだ年若く死んだ悴のことを思ひ出して涙ぐむのが常でありました。

父親の墓は、野を越えて、山の麓にあります。葉の落ち盡した、木々の梢は、さながら針のやうに、鋭く、細く、尖つた、小枝を笹の目のやうに交へてゐます。青黒く冴えた空の下を、風は憤つて吹いてゐる。而して、其等の枝に衝當ると枝は悲痛の叫びを上げます。

星は、一面に、下には父親の墓がある、上の空に振り撒いたやうに、輝いてゐる。

祖父母は、年々、秋から冬にかけて悲しみを新にしますので。

仁作が兵隊に入つてから、祖父母は明け暮れ案じ暮した。

雲 「さう心配したものでない。無事に歸つて來られます」と、言つて村の人々は、二人を慰めました。

の 芋を掘つても、大きなのは賣らずに、仁作が歸つたら煮て食べさせようと思つてゐた。また、柿が其年は珍らしく澤山になつたけれど、仁作の歸るまでは、人にもやらす、食べずにゐようと言つて、皆な桶の中に入れてしまつて置いた。除隊にならうとする間際になつて、仁作は西

上 比利亞に出征しなければならなかつた。

「何、大丈夫無事で、直に歸つて來られますから、さう案じたものでない」と、また村の人々は、年老つた二人を慰めなければならなかつた。

祖父母は、烏が雪の上に澤山降りて啼くのを見ては、凶いことあつた知らせでないかと語り、夢見が悪いといつては、冬の寒い夜中に床の中で、外に吹雪く音を聞きながら言ひ暮らし

たのです。

柿の花が白く咲いた。而して、雨の降るわびしい日がつよいた。其時、西比利亚から便りがあつた。

病氣だから、来てくれいといふことが、仁作の手でない、他の人の筆蹟で書いてあつた。其れから、後にやゝ委しい手紙が、仁作の友達から着いたのであります。

寒氣のために、手と足が腐つてしまつた。病院に入つて、手と足を切断してしまはなければならなくなつた。命のあるうちに、一目遇ひたいといふから、若し來られるものならば来てくれいといふ意味でありました。

二人が、其の手紙を読んだ時は、狐につまゝれたやうな氣持がして、其れを眞實だと信ずることが出来なかつた。

「いくら寒くたつて、手と足が腐つてしまふものだらうか」と、思つたからである。

「手と足を切つてしまつたら、胴體ばかりぢやないか。うちの仁作が丸太を轉がしたやうに、病院で生きてゐるなんて、そんなをかしいことがあるものか。これは、きつと誰かのいたづら

だらう」と、眼をしばたゝきながら祖父が言ひました。

「こんな年寄を魂消させるなんて、ほんたうに悪い、いたづらをするものだ」と、祖母は、涙も出す震へた聲で言ひました。

けれど、二人は、其の日から安心が出来なかつた。祖父は、其の手紙を持つて、村の醫者の許へ行きました。

「こんなことを西比利亚から言つて來ましたが、嘘でございませうな。手も足もなくて、胴體ばかりで、人間が生きてゐられるもんじやありませんから」と、醫者に言ひました。

醫者は、眉を擧めて、其の手紙を読んでゐました。而して、氣の毒さうに、

「一概に嘘とも言へない。何しろ、この冬は零度以下三十何度といふ寒さだといふことが新聞に書いてあつた。其の寒さでは、手も足も凍つて、血の氣がめぐらずに腐つてしまふことがある。命に別狀はない様子だが、何しろ困つたことになつたものだ」と、醫者は言ひました。

醫者が、嘘ではないと言ふと、祖父は、この男まで、自分等を苦しめるために、いたづらをした者に加勢をして見せるのかと思ひました。而して、其の手紙を奪ふやうにして、醫者の許を

出ると、村中の誰れ彼れの家となく、其手紙を持つて廻りました。

しかし、皆なは、祖父に同情をしましたけれど、誰一人として、其の手紙は、いたづらだといふ者がなかつたのです。

祖父は、急に、氣が遠くなつたやうな氣がしました。而して、路を一人歩いて、我が家の方へ力のない歩みを運んだ時、

「若し、この事がほんたうであつたら、仁作は、どんなに辛かつたらう。少しも、そんなこととは知らず、此方では、仁作が手足を凍らして雪の上に立つてゐた時でも、床の中に入つて暖かく寝てゐたのだ。仁作は、可哀さうに……」と、眼の前に、半年ばかり前に別れた孫の顔を描いて、祖父は、聲を上げて泣きました。

年寄二人の苦しみを見兼ねて、村の人々は相談をした。而して、せめて孫の生きてゐるうちに一目遇はせるのが、二人の思ひやりにならうといふことになつた。村の人々は、互に金を出し合つて二人のために旅費を造つてやつた。

やがて、この年をとつた二人は、この村から立つて、汽車に乗つて、産れてからはじめての

遠い旅路についた。

汽車の中でも祖母は泣きつゞけてゐました。乗り合はした人々は、この二人の悲しんでゐる様子を見て、これから何處まで旅をするのかと聞く者もあつた。祖母は、泣いてゐて答へる勇氣もなかつたが、祖父は、孫の身の上について仔細を語つたのであります。すると、この話を聞いた、知らぬ人々までが暗い顔付になつて、心から二人に同情を寄せたのであります。

「其れは、大變なことだ。船にも乗らなければならぬのだから、道中氣を付けなさい。西比利亞は日が遅く暮れて、夜が早く明けるといふことだ。冬は、寒いことがこの上ないといふから、お孫さんばかりでない、行けば、いろ／＼難儀をしてゐる人がありませう」と、知らぬ人は、思ひやり深く言つた。而して、これ以上二人を慰める言葉について、見出し得なかつたのであります。

祖父は、黙つて、其の人の言ふことを聞いてゐた。日が遅く暮れて、夜が早く明けるといふから、土地の極めて高い處かも知れない。其れで冬が寒いのだらう。祖父は、若い時分に高い山へ登つて、其の山で同行の人々と一泊したことを思ひ出した。日がいつまでも暮れずにゐた。

而して、朝早く太陽が上つたことを思ひ出したからであります。

二人は、北へ、北へと走る汽車に乗つてゐた。而して、村を出てから、日が経つた。

村には、この二人の行つた後は、其の家の戸が終日閉つてゐました。柿の花は散つてしまつて、青い實が付いてゐた。而して、日が照つたり、曇つたりした。村の景色には變りがなかつた。日の照らす時は、鶯色の家根の上から陽炎が立つてゐました。

二人が去つてから、村では、思ひ思ひに、二人の身の上を案じ、また、二人の心持に同情したのであります。人々は、各自の仕事に忙しいから、忘れてゐる時もあるが、また思ひ出して、中には、地圖を擴げて老人の行く先などを檢べたものもあります。

ある新聞の附録となつて、ついて來た地圖は滅多に取り出して、見る用もなかつたのがこんな時には、特別の有がたみを感じさせました。

九州から、北海道のはてまでといへど、青い海の彼方に横はつてゐる茫漠とした西比利亞の大陸に較べれば、豆の程にしか見えなかつたのである。其の小さな國の中を縦斷してゐる汽車の線路は、馬の脚のやうな北海道の北端に到つて止つてゐます。眼で見れば、實に僅かな距離

にしか思はれないけれど、實際に汽車に乗つては一日に幾百哩走るとしても、幾日かかゝるので、而して、其の先き、尙ほ、この青い、青い、廣い、水の冷たさうな海を、また幾日も船に乗らなければ、彼方の港に着くことが出來ないのだと思ひました。

地圖を擴げて、空想に耽りながら、老人の身の上を思つた者もあれば、また、初夏の光りが野菜の葉に漲り映る圃の中に鋤を持つ手を休めて、空を仰いで、今頃は、あの老人夫婦は何處まで行つたらうと思ふ村人もありました。

さながら、海の色にも似た空は、仰げば、仰ぐ程、虚無といふことが眞に感ぜられるのです。其人は、この土地に、ちつとして平和に住んでやがて其の生を終るべき二人が、晩年にかうして悲しい思ひを抱いて、多くの人々の行きもしない異國に旅するなどいふことは、宿世の因縁であり、これが運命といふものであらうと考へてゐたのである。

老人夫婦が彼方の地に着いてから、間もなく仁作は死にました。其の遺骨を携へて二人は、また遠い旅路を故郷に向つて出發しました。

「お婆さんが、行きから、歸りまで泣きつゞけてゐた」と、いふことがやがて村中の噂となつ

た。皆なは、さうもあらうと、二人の心持に同情した。

「人間の涙といふものが、よくさう泣いても盡きないものだ」と、いふ疑ひが皆な的心にあつた。而して、其のために、恐らく、老祖母の生命が涙となつて流れ出たやうに感じられたのであります。

雨 秋風が吹いて、柿の葉の紅く色づいたのが圃の中へ落ちる時節になつた。しばらく外にも出なかつた祖母は、悲しみが原因となつて其れがために餘病を發して、遂に、この世を去つてしまつた。

ぶ 村の人々は、其の死を痛ましく思つた。葬式の日には、心ある人々が伴についた。寺の鐘が、鉛色の空氣を破つて鳴り響いた。

其時、西風が吹いて、森の頂きが動いてゐました。葬式は、水溜りのある處に來ると、其の鏡のやうに靜まつてゐる水の面に柩の影を映しましたが、忽ち、人々の足によつて其の鏡は打ち碎かれてしまつた。柩にかゝつてゐる白布の端が、時々風に吹かれて、旗のやうになびいた。

祖母が墓に行くと、地上には、間もなく雪が積りました。家の中には、たゞ一人殘された祖

父が、啞のやうに黙つて住んでゐました。木枯が窓の外に吹き荒む時に、祖父は、獨り佛壇に蠟燭を點して、其の前に坐つて、茫然としてゐました。蠟燭の火が盡きて、小さなあるかなきかの音を立て消えかゝるまで、祖父はちつとして暗い佛壇の中を見詰てゐましたが、燈火が消えると、また、新しい蠟燭を點して合掌しました。急に、佛壇の中が明るくなつた。而して、燈火の揺れるたびに、其處には、祖母の顔も、仁作の顔も、またずつと以前に死んだ仁作の母親も、また我が悴の顔も浮んで見えたのであります。

の 彼等は、何事か、祖父に向つて言はうとしてゐた。祖父は、ちつと、其の幻影を見詰て、彼等の言ふことを聞き取らうとしました。

上 「何、俺も、もう直にお前方のゐる處へ行くだらう。この世に獨りだけ生き残つてゐて、何の楽しいことがあるか。其れにしても、何うして俺ばかりが最後に残つたのだらう」と、祖父は、疑ひました。而して、今初めて、人生といふものをしみんと考へた。子供もない、妻もない、全く孤獨の人生といふものを考へた。而して、孤獨の生と死とどちらが望ましいかといふことを考へたのである。

一切の生活が過去になつてしまつた。喜びも、悲しみも、皆な過去にだけあつたのである。而して、今は、其の悲しみすら、あつた日の方が幸福であるやうな気がして、一心に、過去の幻影を眼に描いて、記憶を辿つてゐる時に、小さなあるかなきかの音を立て蠟燭の火は燃え盡して消えてしまつた。

雨 世界は虚無となつた、暗黒の裡を窓の外には吹雪が募つてゐた。寒さは、骨に染みるやうに襲つて來た。

呼 北國の冬の日の雪の景色は、仁作の死後もまた生前も、其れには變りがなかつたのである。

樹 日毎に、海の方から吹いて來る風は叫んだ。黒雲は、煙のやうに、西の地平線に湧き上つてゐる。落日は血を空一面に落して、狂つたものゝやうに沈みかゝつた。

——一九二〇、十一作——

煙の動かない午後

曾て叔母から従弟のことについて頼まれたことが、ふと頭に浮んだ。同時に頼りない叔母の様子が眼に見えたのだけれど、良吉は其のことについて思ふまいとした。

「また、そのうちに叔母から何か言つて來るだらう。東京へ行くなんて億劫なことだ。もう、二度とは出まいと思つたのだ。かれこれ六年になる。大分東京も變つたことだらう。」

良吉は、臥轉びながら空想に耽つた。

この窓際に立つと、畦に植つてゐる並木が夏のきら／＼とした眩しい日光に照らされて、白い雲影の浮んだ静かな空の下につゞいてゐるのが見える。

すべての希望を擲つて、この田舎に歸つた良吉は、既に両親がなかつた。しかも獨身の覺悟で、別に何をするといふこともなく物憂い日を送つてゐた。

彼の性質は、何とか言つて近寄つて來る村人を斥けることが出來なかつた。

村の表向きの相談や、會議などには出席しなかつたばかりでなく、其時の決議に對しては、反對したことがなかつた。

たとへ胸に燃えるやうな不平や、反抗があつても、自から先頭に立つといふ決心が付かなかつたから、無理に心を押へて、たゞ消極的に自分は、其の渦中に立入らないまでである。

しかし文學を好み、音楽を聞くことを喜び、人生に對して無關心であることが出来なかつた彼は、隱遁的な生活を送つてからも讀書や時事を知るところを怠らなかつた。

「こんな田舎にゐて、自分は、大西洋の香を嗅ぐ」と、彼がある時言つたやうに、タイムスを取寄せてゐる者は、他にはこの附近に一人もなかつた。

實際この村民の生活とは直接何の關係もない、外國の新聞などは讀んでも、讀まなくてもいいのである。

けれど彼には、隣の爺が時々訪ねて来て村の中に起つた新舊の事件を聞かせてくれることより、遙々船と汽車によつて送られて來たこの一枚の新聞紙を手に取り上げる時の氣持がどんなに楽しいか知れなかつた。

昨日、ちやうど其れがとどいた。最近の發刊であつたけれど、二十日ばかり経つてゐるので其後の緊要な事件は、外國電報によつて、既に東京の新聞に載つてゐる。時事問題の如き、舊聞ばかりのやうな氣がしないでもないが、彼は、一々隅から隅まで見落しなく讀み耽つた。

今しも、机の傍に臥轉びながら、眼を紙面の細かな文字の上に晒してゐた。塊地利、匈牙利が漸次ボルシェヴィズムに化せられて行くといふことは、彼の心を刺激せずには置かなかつた。彼は思はず起き上つた。

「其れは當然なことだ。英吉利や、亞米利加の得意と、富裕と、權力とを、塊地利や、匈牙利の憐れな現狀に較べて見れば分ることだ、其れが對照にならうか？やがては獨逸もさうなるであらう。かういふ現象は、人間に於ても、また國家に於ても見らるべきことだ」と、彼は考へた。

ある社會學者が、「自然の與へる不安は迷信を産み、階級より生ずる不安は革命を起す」と言つたのは、争ふべからざる眞理を含むやうに思はれた。

「誰が未來を知らう。すべてが必然的に趣くべき處へ達するばかりだと、彼は思つた。淋しい笑がちやうど朝顔の花のやうに顔に現はれると、直に消えてしまつた。」

彼は、またもとのやうに横になつて、黙り込んで、新聞の他の面に眼を移したのである。「死」といふ欄を見ると、一度も顔を知らない人々が、いろ／＼の街や、病院で死んだことが書いてあつた。かうして一日に幾何この地上で産れたり、死んだりすることだらう。

たとへ其の時代を同うしても、永久に互に同じく生存をしてゐたといふことを知らずにしまふのを不思議に思つた。

誰にせよ、自分を愛する程、他人の生活を愛するといふのは偽りである。すべての生活問題も、社會問題も畢竟、自分の生活が根底である。言ひ換へれば自分及び自分と同じ境遇にある人々のための叫びである。

かう思ふと、彼は、心の何處かに言ひ知れぬ淋しさを感じた。其れは、友達もなく、隠遁的な生活を送つてゐる、自分のやうな人間の淋しさと頼りなさに他ならなかつた。

彼は尙ほ讀みつゞけると、自殺した人々の欄があつた。其の中に——アボット、年二十八、生物學専攻家、病身にして厭世の結果自殺す。眞に一人の親戚もなき孤獨なり——と、書いてあつた。

これを見て、彼は、電氣に觸れたやうに衝動を覺えた。

「不思議だ、やはり俺と同じやうな境遇な人間があるのだ」

良吉は、黙つて其の一處を見詰めたまゝ思ひ込んでゐた。

この何でもない事實を報道した一枚の新聞紙が彼には人の知らざるなつかしきを感じさせた。

彼は、其の男が考へに沈みながら歩いたであらう街の往來や、立止つて、其の途の上から眺めたであらう陰鬱な姿の常盤木の頂きや、尖つた高い建物や、いつも見るたびに黒い煙の流れてゐる煙突や、雑多の光景の點在する巷の四角から渦巻いて起り彼の心を脅かした生活のどよめきを想像するばかりでなく、ちやうど自分の經驗の如く其の男の物憂い心持が察せられたのである。

自殺者は、生物學者だけに靈魂の不滅といふことも恐らく考へてゐなかつたであらう。而して、最後の手段を取つた刹那にも、ロンドンの街々から煙は上つてゐた。家々の窓は開け放たれて、青い、悠久に澄んだ空の色を迎へてゐた。また煙草を燻らしながら路を歩いてゐる男も

あれば、急ぎ足で人混みの中を燕の驅けるやうに歩いてゐた若い女もあつたであらう。
良吉は、境遇の同じものだけが、斯くお互の感情や、心持を理解することが出来るのだと思つた。アボットといふ男の心持は、たゞこゝに書かれた僅かに二三行だけで、よく自分に理解される。

雨 だから、最近、無産階級の運動が世界中に相響應して一つの大きな波を上げやうとするのも、畢竟二三行づゝの外國電報が覺醒させるに足りるのである。俺なども、生なか食つて行けるだけの遺産がなかつたら、この病弱の體をこの故郷には運ばなかつたらう。而して、今でも空氣の悪い都會で、やはり彼等と共に活動してゐるにちがひない。

樹 午後になつて、日が少し蔭つたら、外に出て花の咲いた黃瓜に水をやらうと思ひながら、良吉は臥返りを打つた。

窓の外では、桐の木に蟬が止つて鳴いてゐた。

其の鳴聲に心を止めてゐると、少年の時分の夏の日が、まだ昨日のやうに蘇返つて来る。けれど、もう祖母はゐない。また、母も生きてゐなかつた。

「若旦那さん、天氣が、よくつゞきやす」と、作爺が、外から聲をかけながら入つて來た。

もう三十にもなつて、若旦那と呼ばれる年でもないのだが、隣の爺は、まだ昔のやうに良吉を子供と思つてゐる。而して、なぜ嫁を取らないのだとか、いつもそんなに獨り家にゐては淋しからうに、外に出て交際をすれば、學問があるのだから、人望が付いていつか村長になれることもなからうとか、いろ／＼に思つて言つたのである。

「作爺さんか、まあ上つたらい」と、良吉は立つて入り口へ行つた。

「好いお天氣でございます。これで一雨夕立でも來てくれると作には申分ないんですが、少し濕り氣が足りません。二三日の内に雨が來るでござせう」と、作爺は眼をしよぼ／＼さして言つた。今迄、野良に出て働いてゐたと見えて、日に焼けた、苦勞と戦つて其の跡をとゞめた額際に汗が滴るやうに結んでゐた。而して、頂きの大きく禿げた廻りに僅かばかりの白い頭髮が残つてゐた。

「足が汚れてゐますから、お庭の椽側へ廻ります」と、深い廂の下に入りかけたのを、腰に差してゐる煙草入を抜いて、其れを手に持ちながら爺は裏手へ壁板について廻つた。

良吉は、臺所に行つた。彼は、煙草盆と冷たくなつた番茶の土瓶や、茶碗などを縁側に持運んだ。青苔が生へて木の茂つた庭の片隅には紫色の桔梗の花が幽暗な空に閃く星のやうに咲いてゐた。

「私共の地主さんのやうに分らない人も世間には少ないものです」と、言つて作爺は伸びた爪の間に土の溜つた、太い指で茶碗を握つて番茶を吸つた。

良吉は、日頃からこの村の大地主の一人である加藤のことをたび／＼聞かされてゐた。強欲で冷酷なばかりでなく、また一面近代的とも思はれるやうな處があつて、神主や、坊主の顔は見たくもないといつて寄せ付けず、村長や、郡會議員などいふ面倒臭い名譽職などは貰つても眞平だといつて、智識のある人々と交際をするでもなし、會議や、寄合などに顔を出したことがない。

ある點はよく良吉と似てゐるのであつた。しかし、この地主は村社の鳥居を建てるときにすら寄附をしなかつた。また寺の山門が壊れて普請をする時にも一錢の寄進をしなかつたが、自身の贅澤には随分馬鹿氣きつたことをしてゐた。

あの時は高價で馬を購つて其れに乗つて歩いて村人を驚かしたり、ある時は東京から庭造りを呼んで二月もかゝつて石の配置や、松の手入をしたり、幾度となく庭園の模様を換へるために大金を費し、また倉を建て換へたり、家を増築したり、新たに池を掘つたりしたけれど、他人のためには一錢も惜しむといふ程の利己主義であつた。

其の男の顔を思ひ出すと、良吉は憎いと思ふ心以外に何といふことなしに一種のをかしみに微笑まれずにはゐられなかつた。

「何うしたといふんだ」と、彼は穩かに言つて、人の好い作爺の顔を見た。

「若旦那さんも知つてゐなさるでせうが、一昨年の秋、悴と二人で一月もかゝつて木の根を起して、向ふ山の麓を開墾して蕎麥を蒔きやしたのでございます。其れも、彼處だけは誰も手を付けなかつた木の根ばかりの荒地でして、どうにもならなかつたんです。地主さんが、いつか爺や、お前此處へ圃を造らないか、骨を折つて圃にさへすれば五年や、十年の年貢はたゞで借してやるからおつしやつたので、そんならといふ氣になりやした、悴と一生懸命に一昨年開墾したんです。其れがまだ二年と経たないうちに先達のことですが、加藤の手代めがやつて來

やして、今年から豆三斗取り上げるから、他人なら四斗取り上げるのだが、お前達が骨を折つて圃にしたのだから三斗にして置くといひやがるんです。先づ、何處へ行つたつてあんな地主さんは他にありません」と、爺は外を見ながら語つた。

良吉の眼には、「昨年の秋がつひこの間だつたやうな氣がする。散歩に山の方へ出かけると、火が見えて、其れに近づくと言藪を焼き拂つてゐる作爺の姿が煙の中に、動くのが見えた。

「大變に遅くまで勢が出るな」と、聲をかけると、彼方から作爺の聲で、

「今晚は、日が短いのではかどいきません」と、答へた。

青い煙は、底冷えのする日暮方の空に上つて、黒く見える山の方へとなびいてゐた。

樹 ぶ 呼 を 雨

其の時のことが思ひ出されたので、

「其れぢや約束とは違ふじやないか。いくらなんでも勝手に口約束にしる破るといふことは不都合な話だ。地主に遇てよく話をしたら何うだね」

「行きましたつて、手代が出て来て地主さんに遇はしやしません。手代が悪い野郎でして、いつもしさうなんです」

「それでは、いくら地主でも濟まないだらう」と、良吉は横暴な地主の行爲が普通人情のある者の行爲であらうかと疑はれた。

「あんな地主さんの田や、圃を作つてゐる私達が不運なんでござんす。さうあきらめるより仕方ありません」と、作爺は、さう思ひ込んでゐた。

「ほんたうに弱い者いぢめだなあ」

「ポンプのことで、役場の衆と青年會と採めてゐやすが、どちらが勝つもんですか私等には分りません。助役始め書記なんかの手合は加藤の子分ですから、加藤さんにあやまらんければならんといひますし、青年會はあやまる必要がないといつてゐやす」

「ポンプのことつて、どんなことがあつたんだね」と、良吉は分らぬので聞いた。

「まだお聞きなさいませんか。若旦那は何處へもお出かけなさらんから、無理もありませんが、村に學問のあつて口の聞ける者がいないのでございます」と、作爺は人の好い笑ひをして、眼をしょぼ／＼さして次第を語つた。

村端に脊の低い博勞が住んでゐた。顔に痘痕のある醜男だつたけれど、よく女を騙す術を心

得てゐた。先妻に子供まであるのを無理に離別して、情婦を家に引入れて其の後釜に据えた。先妻は其れを深く遺恨に思つた。雪が消えて、田圃に春が来た。ある穏かな日の午後であつた。博勞の留守に裏の物置から出火して忽ち火は四方に燃え擴つて母家に移つた。村の人々はこの不意の出来事に驚いて、田や、圃から飛んで歸つた。而して、大騒ぎをした。つひにこの一軒は丸焼になつて漸く鎮火したのである。其のことはやがて先妻が嫉妬から放火したのだと分つた。

事件は其の日のことである。村には、別に消防夫と名の付くものがなかつた。青年團が活動をして消防に盡力した。けれどまた村には供用のポンプがなかつた。

「加藤さんへ行けばポンプがある。地主さんへ行け」と、其時、一人が叫んだ。

「さうだ地主さんへ行けポンプがあるから」と、若者等は口々に言つた。

多勢が地主の家の門から駆け込んだ。

ちやうど、地主は其日の其時刻は街に行つて遊興に耽つてゐたのである。彼は花街に、東京生れの女で最負にするまだ年の若い藝妓があつた。よく彼は二日も三日も其家に居續けをして

茫然とした顔付で村に歸つて來ることがある。

其の日は、また手代も留守であつた。後には、青い顔をした病身の女房と下女がゐるばかりだつた。

若者等は、地主の女房にポンプを借してくれるやうにと頼んだ。女房は主人が留守だから分らないと言つたが、また火事なら使つてもいゝだらうといふやうな曖昧な挨拶をした。

このポンプは夏の暑い時分に、地主の家で廣い庭へ水を撒くために東京からわざわざ取り寄せたものであつた。若者等は早速、小舎の中からポンプを引出して、皆な勢で火事場の方へ引いて行つた。彼等はまだポンプの使ひ方に不慣れであつた。しかし、何うにか、かうにか其れを役立はしたが、餘り皆なが大力を出して小さなポンプを苛めたので機械を壊してしまつた。

地主は家に歸ると子分を呼び付けて怒つた。

「俺が金を出して買ったポンプだ。村の爲に買ったのでない。然も留守中に引出して壊したのだ。俺がゐれや決して借せやしない。これまでだつて、これからだつて俺は村の者の世話にならうとは思はない。勝手にポンプを使つて壊したなら、辨償するのがあたりまへだ」と、言つた。

子分の者は、大抵役場組であつた。其の時は、たゞ頭を下げて、一々尤もなことだと聞きながら黙つてゐた。

彼等は、其れを青年會の皆なにはかつたのである、すると中には顔を赤くして激昂した青年もあつた。

「なんで俺達は、平常あんな分らずやの弱い者いぢめを旦那様なんといつて敬つてゐるんだ。こんな時にポンプ位貸すのを村のためだといふことを知らないのか。自分の家がどんなことで焼けないとは限つてゐない。その時は誰が助けると思つてゐるんだ」と、息巻いた。

「理窟は何うでも、他から借りた物を壊したなら、辨償するがあたりまへでねえか」と、子分と見做されてゐる助役が言つた。

「加藤さんは、俺達の地主様だがな、金持で旦那様なんだ。ポンプの一つ位壊したつて何んでもねえだ。この村に住んでゐらしやるすかいなあ、村のためにしたことが、なんで悪い、あやまるちう理窟はねえだよ」と、一人の百姓が言つた。

「あんまり強いことは言ふなよ。田地を取り上げられねえものでもねえからな、直に内通する

奴等がゐるすかい」

「誰が内通するといふのだ」と、役場の書記が腕を捲つた。

「誰だか、俺あ知らねえがな」と、前の男は人の脊後に隠れるやうにして言つた。

「喧嘩をすんない」と、一人の若者が怒鳴つた。

其時の相談は、こんなことで遂に意見が纏らずにしまつた。

後で良吉はこの光景を作爺から聞いた。

「成程この春、火事があつたが、ポンプの話といふのはそんなことか。加藤さんは金持なんだから、お蔭で自分の家が焼けなかつたと思つて、やかましく言はなくていゝになあ」と、良吉は始めて聞いた話について考へを洩らした。

「この間、學校の先生が、若い者が夜五六人遊びに行つた時に言ひなさるには、お前達は地主などをそんなに怖がらんでもいゝぢやないか。無理なことを言つたら、皆なが加藤さんの田を作らなけれや、加藤さんだつて困つて、しまひには頭を下げて来るから、皆なが申し合せて誰も田を作らなけれやいゝ。また其れで食はれなかつたら、まだ世界には、人間が少なくて金儲

の出来るところがあるからつて、……………」

「カモ……なんとか、聞きやしたが、忘れしました。其處へ行けば北で寒いけれど、土地の廣い割にまだ開けてゐないから、働けば樂に暮らされるつて言はしたさうです」

「カムチャツカだらう」と、良吉は言つた。

雨 「たしかそんな處です。前の先生さんは、酒飲みで酔うと戯談あそびごと付いて女おんなつ子を追ひかけやしたが、今度の先生は無口で酒を飲みません。年始に加藤さんの處へは顔を出さつしやらなかつたといふので、生意氣だなんて言ふ者もありますが、子供には親切でいゝ先生だいふこんです」

ぶ 「どんな風の先生だね。話を聞くと面白さうな人だが、まだ一度も見たことがない」と、良吉は言つた。

樹 おはぐろ蜻蛉が飛んで来て、桔梗の咲いてゐる下の青苔のついた地面に止つて、羽を擴げたり、つぼめたりしてゐた。

「まだ二十五六の若い先生さんです。西郡の人だとかいひます。また、役場の衆の耳に入つたら長くはこの學校につとまらねえと思つてゐやす」と、作爺は煙草入を腰にさしながら語つた。

日の光りは幾分か衰へて、微風が出て来て木の葉の動くのが、明るい空に、笑ふやうに揺れて見えた。廂の下から覗くと、空はだん／＼北の方になるにつれて青くなつて、白い雲が其の方に飛んでゐた。

「どう、もう一度働いて來やす。ご免なさへまし」と、作爺は頭を下げて、日の光りの下に眩しさうに顔を擧めながら、足音を立てずに出て行つた。

良吉はやがて仕度をして、土が乾いた圃ぼに濁れて水を欲しがつてゐる野菜に水をかけてやるべく、つゞいて外へ出て行つた。

ある日、彼は町に住む叔母を訪れるために、松並木のつゞく街道を下を向きながら歩いてゐた。まだ涼しい朝のうちで、車や、人影が彼の前後になつて行くのを見られた。

亡なつた良吉の母と、其の母の姉に當る叔母とは性質が全く異つてゐた。子供に向つてすら強いことを言へなかつた母は、悲しい時は直に涙ぐんで黙つてゐるのが常であつたが、其れには境遇の違いもあらうが、叔母は、生活が困難な時分にも妹の助けを飽迄受けなかつたばかり

か、決して何事に對しても人の下手に出るやうなことがなく、勝氣を示してゐた。

叔父の死後、叔母の一家は悲境に陥つた。而して、叔母は少しばかりの地所も、公債も賣り拂はなければならなかつた。叔母は内職をして母子二人の生活を營んでゐた。其頃、從弟の憲一は小學校に通つてゐた。叔母は内職をした賃金で子供の鉛筆を買ひ、紙を買ひ帳面などを買つて與へた。良吉は中學校に行つてゐて、折々叔母の家を訪れると、叔母は仕事の手を止めて、かき餅を焼いてくれたり、豆を焙つてくれたりした。

叔母は、其頃は内職に提燈を張つてゐたのである。仕事をしてゐる傍の柱には、小さな六角時計がかゝつてゐて、ゼンマイを巻く彫形の鍵が、紫色の紐に結び付けられて、時計からだらりと垂下つてゐたのを記憶する。而して、もう一つ憶へてゐるのは、叔母が仕事の合間に眼鏡をかけて、「慶安太平記」や、「曾我物語」や、「里見八犬傳」などの稗史を読んだのが置いてあつて、良吉は從弟と共に其の本を繕いて繪を見たり、また叔母からいろいろ其の本の中に書いてある話を聞いたのであつた。曾我兄弟の物語や、由井正雪の話などは感憤して聞いたのを覚えてゐる。

思ふに、あの頃は、まだ世の中が今日のやうにせち辛くなかつたので、叔母の家の暮し向きにも貧しいとは言ひながら、本を読むだけの餘裕はあつたのであらう。叔母は、まだ其時はそんなに年を老つてゐなかつた。けれど、眼は早くから霞んで、眼鏡なしには細かな字を読むことが出来なかつた。

あれから幾年経つたらう。叔母は、もはや六十に近い筈である。尙ほ其の年になつて内職をして日を送らなければならぬ叔母の身の上を悲慘に感じた。

町に入ると、學校へ通つた時分の自分の姿が浮んだ。兩側を見廻すと、其頃からの店が其儘になつてゐるのもある。荒物屋の軒下に吊された草履や、杓やたわしなどには、昔からの埃が白くなつてかゝつてゐるやうに思はれた。

しかもかく世間は變らないやうで幾何人々の生活が變つてゐるか知れなかつた。

叔母は、良吉の姿を見ると、自分の子供が入つて來たやうに喜んで迎へた。而して、何うもてなしていゝか分らないといふやうにうろ／＼した。この邊は、舊の士族屋敷で家の前には少しばかりの圃があつて、野菜が茂つて靜かであつた。

何處かで蠶の糸をとつてゐると見えて、糸車の音が聞えた。

「暫く見えないから、病氣をしないかと心配してゐたんだが、何とも變りはなかつたかい。先達の町の祝ひになんで出て來なかつた」と、叔母は、良吉が暑からうと突して、團扇で風を送りながら言つた。

雨 「御無沙汰いたしました。叔母さんも變りはありませんでしたか、田舎へ引込んでしまふと、町へ出るのすら何だか億劫になりました。憲一から便りがありますか」と、良吉へ襟から染み出る汗を拭きながら言つた。

ぶ 「お前、羽織でも脱つて、冷たな水で顔洗つたら何うだい、家の水は冷たくて氷水のやうだが」と、叔母は、井戸水の自慢をしながら自から水を汲まうとして立ちかけた。

「かまはんで下さい」と、彼は答へた。

「憲一のことについて、是非お前に相談しやうと思つたのだよ。他に誰といつて、親身になつて話をする者はなし、私も、もうこの年になつて、ほんたうに心細い……」と、早くも叔母は愚痴を言つたのであつた。

良吉は、下を叩いて聞いてゐた。すると、叔母は其のことは、後でゆつくりしやうと、氣を換へて、

「お祭りには出て來るだらうと待つてゐたのだよ」と、話かけた。

「平和、戦勝祝賀會の時ですか。なか／＼賑かだつたといふことですね」と、良吉は、素氣なく言つた。

「賑かだつたにも、三日三晩といふものは、お前つゞけさまに煙花が上るし、山車が出るし、町の藝者が總出で手踊りがあるし、どんなに賑かだつたか知れないよ」と、叔母は絢爛たる其夜の光彩を、尙ほ眼前に見るやうに物語つた。

良吉は、其れを淋しい顔付をしながら聞いてゐた。やがて頭を上ると、靜かに叔母を見て、しんみりとした言葉付で、

「だつて叔母さん考へてご覧なさい。戦争に勝つたのも、重にかうして騒いでゐる人達の力ではありません。戦場に出て、死んだ、澤山な人々の力だと思ひます。其の死んだ人は、もう決して歸つて來ません。またこの世の中の、愉快なことも、賑かなことも、見たり、聞いたりす

ることはないのです。其等の死んだ人々のことや、遺族の身の上を思つたら、お祝い騒ぎどころぢやないではありませんか」と、彼は言つたのであつた。

良吉の言ふことを聞いてゐた、根は哀れみ深い叔母は、成程といふやうに頷いたのである。

「良ちゃん、其れはほんたうだ。お前の言ひなざる通りなんだ。お祭り騒ぎどころぢやないのだよ」と、叔母は心から同意したのであつた。

彼方で聞える糸車の音は、誰が廻してゐるのか、ちよつと杜絶れたが、またつゞきはちめる。

「東京から、たよりがありましたか」と、良吉は聞いた。

「どうしたんだか、この頃何とも言つて來ないのだよ。私は、あの子のためにどれだけ心配するか知れない。父親が死んでから、私の手一つで育て、來た苦勞を、其れは良さんだつて知つてゐなざるだらうが、女の手で内職をして、少しばかりあつた地所や公債まで賣つて、あの子にかけ中學にまで入れたのだ。其れが校長を排斥して停學される。もうこんな學校にゐるのは何うしても厭だといつて、言ふことを聞かずに東京へ出る。私もさう／＼は學費を送ることが出來ないので、憲一は苦學をしても勉強をするからと言つて歸らなかつた。其れから憲一もい

ろ／＼のことをしたらしい。今では工場につとめてゐるが、なんで勉強などが出来るものか。自分一人が食つて行くのがやつとだと思ふ。私だつてこの年になるまで頼るものはなし、息子があんなもので、此頃はほんたうに心細く思ふのだよ」と叔母は涙を前掛で拭きながら言つた。

「しかし叔母さん、これからは生なか役人なんかになるよりは、労働者の方が割がいゝんですよ。今迄と違つて、労働者がはゞをきかす時代になつたんです」と、良吉は、勝氣な叔母が自分の子供だけは、女の手でも立派な人間にして見せると心がけてゐたのに對して慰めたのである。

「世が變つて、さうなるんだつて先達も人様が言つて下さるけれど、かう遠く離れてゐるのは、何にしてもつまらない。子供を持つてゐても持たないも同じことだ。始めから子供がないのなら、其の覺悟はあるけれど、あつて當にならない程頼りないことはない。私もいつまでかうして働けるものでなし、この年まで何を頼りにして生きてゐるものか」と、叔母は泣いた。

良吉は、願みると、其處には貼りかけた状態が、澤山机の傍に積み重ねられてあつた。いつか聞いた時に千枚張つて十五錢とか十八錢とかいふことであつた。

日の短かい時は朝から仕事にかゝつても、夜までに其れだけを張り盡すことは困難であると言つたのを覚えてゐる。

「叔母さん、この頃でもやはり千枚はお張になりますか」と、良吉は聞いた。

「なんでそんなに張れるものかな、眼が霞んで根が盡きて、いつまで前のやうに仕事が出来るものか。仕方なしにしてゐるけれど、悴があつて少しの助けにならないのだから」と、叔母は、直に愚痴に返つた。

良吉は、しばらく黙然として叔母の身の上になつて考へた。而して、子供を怨み、生活の不安を訴ふるのを尤なことだと思つた。また親を顧みず、自から苦しんで生活のために勞働をしてゐる従弟の身の上を想像すると、やはり憎む譯には行かなかつた。

「叔母さん」と、やさしな女の聲がして、此時勝手許へ忍びやかに寄つて来て、戸口から覗いたものがある。良吉は振向くと、愛らしい十八九の娘が顔を赧めて、戸の蔭に隠れた。

「おとしさんかい」と、叔母は言つて、立上ると勝手許へ出て行つた。

娘は何か小さな聲で言つてゐた。やがて叔母は、お鉢の蓋を開けて、娘が持て来た皿に飯を

入れて渡したやうであつた。

「左様なら」と、娘は言つて、靜かに歸りかけた。

「お父さんは、どんなだい」と、叔母は聞いた。歸りかけた娘は、立止つて、

「有がたうご座います、やはりおんなじことです」と、答へた。

「其れはお困りだねえ、私もちよつと上らなければならぬのだが、よろしく言つておくれ、またお遊におゐで」と、叔母は言つてゐた。

娘の足音が聞えなくなると、叔母はまた座に戻つたのである。

「あの娘も、もうぢきにお嫁に行く年頃で、あんな、いゝ子はない。其れが朝から晩まで母親と状袋を貼つてゐるのだよ。父親が腎臓病で、この頃は床に就いたぎりなのだ。其れにまだ他に二人子供がある。役に立つのは、あの娘一人でどうしてやつてゐなさるか、ほんたうにお氣の毒なのだよ」と、叔母は人事とも思はれないやうに、しみじみと同情して云つた。

「醫者にかゝつてゐるんですか」と、良吉は、聞いた。

彼は、直に藥價を拂つたり、看病に手のかゝる其の貧しい家庭を眼に描いたからだ。

「この頃は、何から何まで、もとの三倍も四倍もするぢやないか。何うしてやつて行きなさるか、醫者の車がこの頃は、毎日午後から止つてゐるやうだ」

「やはり近所の醫者ですか。遠くなかつたら、車になど乗らなくなつてよさうなものですね。家によつては車代を拂ふのに困るでせう」と、良吉は金を取る以外に思ひやりのないこの頃の醫者を憎く思ひながら言つた。

を
呼
ぶ
を
「歩いたつて橋を一つ渡れば來られるんだけど、皆な體裁を造るのさ、ほんたうに貧乏人は病氣になつても、めつたに醫者にさへかゝれない」と、叔母は答へながら、良吉の前にあつた茶碗に茶を注いだ。

樹
良吉は、子供の時分叔母が張つた提燈を三十も五十も大きな紺の風呂敷に包んで、其れを負つて、町の紙問屋へ持つて行つたことがある。憲一は留守をして、後から叔母が、自分に従つて來たのであつた。

「出世前のお前に、こんな提燈などを負しては濟まないから」と、叔母は言つて、自から其の風呂敷包を負つて出て行かうとしたのを、良吉が無理に負つて行つたのである。晝間は世間に

對して見つともないと、つまらぬ心配をした叔母は大抵、日が暮れてから持つて行くのであつた。而して、其だけの賃金を受取り、歸りには子供のものや、日常の入用なものを買つて來た。

良吉は、行つた時に見た紙問屋の主人の顔付や、多くの内職者に對する傲慢な言葉付や、提燈の張方が粗末だといつて叱り付けてゐる有様を知つてゐる。

大抵は生活に虐げられてゐる人々で、この主人の苛酷な態度に對してもひたすら頭を下げてゐるばかりで物も言へない程の、意氣地のない青い顔の男や、寡婦や、まだ年をとらぬうちに世帯染みた娘等であつた。

其様な人間が、この店にはたえず二人や、三人見られないことはなかつた。

「今、娘が來たぢやないか。あゝして毎日のやうにご飯をもらひに來るのだよ。あの家では外國米を食べてゐるので、外國米ではねばりけがなくて糊に出來ない。其れで糊にするだけ、いつも御飯をもらひに來なさるから上げるのだ。私の家は一人だし、別々にご飯を焚いては却つて不經濟だから、高くても、日本米を食べてゐるけれど、多勢ならなか／＼さうはいかない」と、叔母は言つた。

「皆な、あの紙屋の仕事なんですか」

「あゝ、こゝらは大抵あの紙屋の仕事をしてゐる。去年まではバテンが流行つたが、戦争が終へると、外國へあまり行かなくなつたと見えて、ずつと賃金が下つたし、麻つなぎがいゝなどゝいふ人もあるけれど、この近所ではどこでも状態を貼つてゐる」と、叔母は答へた。

彼は、過る日町へ出て、紙問屋の店頭を通つた時に、覗くともなく見ると恵比壽顔の肥つた主人が、金齒を露出して何事か客と話しながら笑つてゐるのであつた。誰でも年だけは平等に取るものだと思はれたのであるが、あの時はまだ若かつた主人もいゝ年をとつて爺さんになつてゐた。良吉は、其れを思ひ出して、叔母に話をする、

「あゝ、あの家も、もとは小さな店だつたが今では大した身代となつたらしい。かみさんもこの頃は絹物ぐるみで、店へはめつたに顔を見せない。家も金をかけて立派にしたし、財産を息子に譲つて、自分達は樂隠居をした。先達は、京、大坂から奈良の方を二人で旅をして來た。あゝいふのが何不足ない身の上だ。息子の嫁は近在の豪家からもらつたといふが、器量も悪くない」

「問屋はそんなに金が儲かるのに、其家の仕事をしてゐる者はいつまでたつてもよくなりつてはない。つまらんものですね」と、良吉は、資本家と、労働者が同じ働きをしながら、否、労働者の方がずつと多く働きながら利益は全部資本家が占有する不自然を思はずにはゐられなかつた。

「彼方には金があるんだし、此方は其家の仕事をさしてもらつてゐるのだから仕方がないけれど、なんだかたゞでも、金をくれるやうに大きな顔をして、店に仕事を持つて行く者に小言をいつたり、鼻先きであしらつたりしてゐる。其れが癪にさわるのさ。いくらか苦勞をしたゞけ主人はまだ物が分つてゐるが、倅となつたら、其れは薄情者でいやならよせ、他にいくらも仕事をするものがあるといはぬばかりにつんつんしてゐる」と、叔母は不平を洩した。

「息子つて、どんな奴ですか」

「まだ嫁をもらつたばかりの年ぢやないか。小造りなにやけた男だがな」

裏庭に面した椽側に出て見ると、柿の木に澤山實が付いて其の青い實が無數に乾いた地面に落ちてゐた。蟻が白い土の上を彼方へ行つたり、此方に來たりして動いてゐた。

「これが澁柿でなかつたらなあ」と、従弟と見上げて語り合つた少年時代が二たび思ひ出される。またこの木と櫻の木とに細引を結び付けて、鞆を造つて二人で乗つて楽しんだことがあつた。

良吉は、木の葉蔭や、梢の間を透して、輝かしい風のある夏の空を眺めながら思ひ出に耽つてゐると、叔母が後方に來て、「良さん、東京へ行つて下さるかね」と、先刻、彼が憲一の様子を見に行つて來やうかと言ひ出して、さう相談がきまつたのを、もう一度、叔母は念を押すのであつた。

「久しぶりで、また自分の用事のないこともありませんから、近いうちに行つて來ます」と、彼は、都會にゐる自分毎日のやうに散歩したK街やS街の光景などを思はず眼に浮べてゐた。

東京行の列車の中に、良吉はあつた。

彼は、怠屈を感じて、新聞を見たり、外を眺めたり、いろ／＼のことを考へてゐた。

雑誌を見ても、新聞を見ても、新刊書籍の廣告を見ても、實にマルクス全盛時代であること

が分る。しかも其のマルクス自身は貧乏をして死んだのであつた。後になつて多くのマルキシストが、彼の思想の宣傳に従事したために、いろ／＼な意味で思ひがけない徳を得るといふとは不思議なやうな事實である。アルツイバシエフの小説の中に、驕傲なピラトがシモンに向つて——あのユデヤの乞食坊主は愉快といふものを知らない。實に不思議な男だつた。而して、あの男の言ふことは何んだか意味ありげだ。けれど、あの男でないお前達はいつたい何者だ——と、言ふところがある。そんなことが、同時に彼の頭に浮んだのであつた。

トルストイは、ほんたうに人間を愛さうとした。而して苦しみぬいて死んだ。其の一生は心の善と惡の戦で終つた。彼の知れるトルストイアンには何でもなく誰でも愛し得る。流行の洋服を着たベテン師が多い。一人でも、二人でもさういふものが主義者の中にあることは概はしいことだ。而して、彼等とトルストイとは何の関係がないのだと良吉は、思つた。

「幾百年の昔から、人道主義者の群があつた。基督教徒の宣傳があつた。けれど、彼等の多くは空理空談の徒に過ぎなかつた。彼等の社會主義的運動が幾分なりと、この人生を幸福に、より善く導いたと信ずることが出来るであらうか。長い間、皆なは正義の勝利を待つてゐた。然

り、永遠に、正義の勝利を待たなければならぬかも知れない。けれど従來の道德や、教育は何をなし得たか。而して、現在世界の有様はどんなであるか、吾々、多數の無産労働階級の生活はどんな有様であるか。餓死を忍んでも、尙ほ、人道主義に頼れといふのか」

彼は、斯く言ふ急進黨の叫びを聞いた。

「たゞに金の爲めに叫ぶにあらず、人間平等の権利を主張するためなり」と、根本的に眼醒んとしつゝある、無産労働者の社會主義的運動開始を、而して、其のさまざまの實行方法を最近の英米に於て見るのである。

良吉は、しばらく眼を閉じた。頭の中にはさまざまの幻影が浮んで、彼の心を落付けなかつた。

二たび眼を開けた時に、彼の頭は、また、もとの無感激な冷靜に返つてゐた。

「トルストイズムや、基督教的社會主義が、たとへ、人生を救ふことが出来なくとも、人生は絶滅によつて、この矛盾と苦痛から脱することが出来る」と、彼は、考へた。

彼は、露西亞の作品の中にかゝる同一の思想と人間とを見出した。其時は、全くの個人主義

者に似合はない懐かしさを感じるのであるが、恐らく、其の人に對してといふよりは、寧ろ主義に對して感じたのであらう。

進化論に於て、生物學に於て、將來に於ける人間生活に希望を認めるものは一つもない。化學は熱の研究によつて百二十萬年後には人類の絶滅を證明する。吾人は不幸にしてこの自然科學の結論を覆すべき何ものゝ事實を持たない。而して、すべての社會現象が絶滅に達するまでの過程であると見做され得る。

彼の恐怖は、この刹那の生を最も強く、また最も深く愛するからだ。生を愛しないものになんで生の不安があり、懷疑があらう。たとへ生を熱愛する者が、同時に自殺を考へたからとて、其れは決して矛盾でない。

彼は、物質よりも、精神作用の不思議と、自由とを考へずにはゐられなかつた。

——自分は子供の時分に、學校の往來に藥屋の前を通つて、棚の中に劇薬の罈が並べられてあるのを見た。其の硝子戸には赤い紙が貼つてあつた。私は、この劇薬の罈の入つてゐる棚を見るのが何より怖い中に好きであつた。毎日、其れを見るたびに無限の興味を感じた。

——ある男が、生活に疲れた結果、神経衰弱に罹つてゐたが、其の男はダイナマイトといふ言葉を聞くと、飛び上るやうに活々とした事實がある。彼は、其の刹那だけ、顔の色が變り、感興を覺えて、はしやぎ出したといふのだ。

今、自分は、何に對しても感興を持たないやうな Nihilist 的な氣持である。たゞ、自殺といふことを考へる時にだけ、感興が湧いて来る。すべての人間が、自殺倶楽部の會員になつた時を想像すると非常に愉快だ。たゞ考へるだけで愉快だ。

——思ふに、皆なが變つた生活を望んでゐるのだ。貧乏人は社會革命を望み、少し金のある者は精神革命を望んでゐる。而して、其れを主義として宣傳したら、よりいゝ生活がなされるかと考へてゐるのだ。

これは物質的な運動と解するより、人間に共通した、一種神秘的な心の運動である。良吉は自分の何ものにも怯えない、無感激な心を淺間しく思つた。其れを自然主義の異端化であると信じてゐる。しかし、今は容易にこの重い、暗い心持を打碎くことが出来ない。何等か異常な事件が頭上に落ちかゝらなかつたら、痴鈍な、鉛のやうな、無感激な心の外皮を打壞

くことが出来ない。惱める彼は其れを望んでゐる。

「あゝ、自分は、まだ年が若いのだ」と、彼は、考へた。

汽車は、トンネルを過ぎて明るい平野を走つてゐた。

二人の紳士が話をし始めた。互に知り合つてゐる間柄らしい。

良吉の注意は其の方に向いた。

「いえ、社用です。二三日で歸るつもりです」と、一人が答へた。

「この秋内閣は變りませうか」

「さあ、どうなりますか分りません。兎に角、朝鮮問題やら米價騰貴やら困難な立場にゐるやうです」

「此間、S町で十六になる女の子が製麵機に巻き込まれて重傷をしたと新聞にありましたが、あれは死にましたか」と、眼鏡をかけた夏インベネスを着た紳士が言つた。

「さうです。私は、見たのでありませんが、右の指を三本とか切斷して、頭髮が殆んど全部皮膚と共に肉から剥け落ちたそうです。而して、頭の骨が割れたといふのですから、悲惨な話で

す。病院へ行つてから、約一日生きてゐたといふのが不思議な位です」と、脊の高いやはり鼠色のインベネスを被た瘦せた男が答へた。

「新聞で見ますと、少し動かしても出血が夥しくて、手が付けられないと言ひながら、新聞記者や、警察官などが行つたものと見えて、母親が枕元で昏睡状態になつてゐる娘を呼び起したので、死にかゝつてゐる娘が苦しい、苦しいと訴へたと書いてありましたが、いくら無智とはいひながらよく起したものだと思ひましたよ」と、肥つた男が眼鏡越しに脊の高い男を睨むやうな眼付をしながら言つた。

「洋服を着た人間や、剣を下げた警官などを見ると、田舎者の者は大へんに偉い人だと思つてどきまぎするのです。黙つて見てゐる人間も悪いのですが」と、脊の高いのが笑つて答へた。「いかさまさうでせうな。實に、あの記事を読みました時に驚きました」と、肥つたのが、やがて、話を他に轉じた。

良吉は、この話を傍で黙つて聞いて思つたのである。

この一日に、この世界に於ける大工場や、小工場で機械のために、不注意や其他のいろ／＼

な原因から死亡したり、負傷したりするものが幾何あるか知れない。また、常に暗黒な日の光りを見ない坑内で働きつゝある鑛山の坑夫等がある。中には多くの少年労働者を使用してゐる處もある。よく少年が見番をしてゐるうちに疲労のために居眠りをしてレールの上へのめつてゐると、急にトロツコが疾つて來て、轢殺されるものがあるといふ話だ。

また、澤山の労働者を使用する炭坑などでは、一人の死といふものを、習慣的にあまり驚かない。注意が行届いてゐたなら、其等の多くの災禍は被らずに済むのだとさへ言はれてゐる。其れ程、仕事に氣を取られて人間の命といふものが輕ぜられてゐる。

實際、機械の方が人間のする仕事の幾倍かをするのである。たゞ、同盟罷工をした時にすべての機械の運轉は止つてしまふ。而して、其時、機械を支配するものは人間であつて、機械が人間を支配するのではない。生産力の源は労働者自身にあるといふことが分る。このことは其時、心の麻痺した資本主に始めて感じられるのである。

やがて、汽車が東京へ着く時分であつた。良吉は頭を汽車の窓から出して、彼方の空を望むと、一抹の黒雲が棚引くやうに、低く煤煙が空を濁してゐた。

時計を見ると、もう後十分ばかりで、あの賑やかな人間の雑踏した巷が自分の眼前に現はれるのだと思つた。

宿屋に着くと、其夜はぐつすりと思つてしまつた。明る日、彼は、街を歩いた。場處によつては、大分變つたところもあつたけれど、大通りなどは概して變つたとは思はれなかつた。幾多の新しい洋食店や、雜貨店などの間に心の眼に残るやうな老舗は、やはり其儘になつて商を営んでゐた。

彼は、五六年前、かうしてこの銀座の街を歩いたのを、つい昨日のやうに感じたのである。あるレストラントの窓の下で、テーブルに對つて腰をかけ、流るゝやうに涼しい服装の人々を乗せて幾たびか摺れ違つて過ぎる電車の影を眺めながら、彼は麥藁の管から舌尖に甘く染みる酒を吸つてゐた。考へるともなく、學友の身の上などが思ひ出された。ある者は夭折し、ある者は消息が絶えてゐる。此時、階下で奏でてゐるピアノの音が、悲しみを誘ひ、刹那の現在を喜ばせる。

電車を降りてから、しばらく場末の町を歩いた。従弟の憲一は、既に良吉の行くのを知つてゐる筈であつた。

従弟はブリキ屋の二階に住んでゐた。狭いギンギンと鳴る梯子段を上つて、破れた襖を開けると四疊半の疊の汚れた室がある。灰色の壁は陰氣臭くて、光線の射工合がよくない。其の間が憲一の借りてゐる室であつた。被換への着物などが釘にかけてあつて、下には自炊道具が置いてあつた。机が一つと、其の上に書物が二三冊載せてあつた。他に飾りといふものがない。窓際に赤い花の咲いてゐる土鉢があつたが、水が切れて其の花は凋れてゐた。

窓から見下すと、小さなマッチ箱を並べたやうな貧民長屋の勝手許や、居間の中の有様が手に取るやうに見られて、下水が不完全なために、幾日天氣がつゞいても低地に溜つてゐる水の乾くことがない。其の水溜りの周圍に細い棒を立て、繩を張つて、其れに白や赤の洗濯した襦袢を隙間なく吊してある。

良吉は、なるべく其等の醜惡な光景が目につかないやうに脊を向けて、久しぶりで逢つた従弟に對してゐた。たとへ、心で貧民の生活に同情はしても、目の當り其れを見る時は不快の感

を押へることが出来なかつた。

すべて美しいものには、其れ自から高く、貴いところがある。現在の社會では階級の生じた争ひはあるが、美しい建築や、寶石や、繪畫に對する反感がない。良吉は、他人の生活に立入つて、責任をもつて、其れを何うすることも出来ないのを知つてゐた。自身の生活すら持てあましてゐるのであるから。今、從弟に向つて意見をするのは、何といふ矛盾であるかと心で自分を冷笑したのである。

呼　　たゞ決して立入つたと言はずに、自分の意見だけを話すつもりで、靜かに從弟の顔を見た。
ぶ　　生活が、いつしか從弟の容貌までも變へてしまつた。おつとりとして、夢見るやうな面持が何處にも見られなかつた。青黒い顔、其れは炎天に野で働く百姓の日に焼けた顔色とは異つて、一種陰慘の影をとどめてゐる。頭髮は延びてゐて、鼻先が尖つて、眼が深く落窪んで、鋭く光つてゐた。

憲一は、正しく兩方の膝頭を揃へて、姿全體の感じが何處か隼といふやうに、神經質に口を噤んで、良吉の言ふことに耳を傾けてゐた。

「お母さんは、決して樂に生活をしてゐなさらぬ。東京で働いても、特に割合がよくないやうなら、田舎に歸つて母親を安心させるだけでも、よくないかと思つて、實はお前の心持を聞きに來たのだ。私も、東京を去つて、もう長いことだから、實際について労働者の現状を知つてゐない。自分で歸れとも、歸るなとも、言へないが」と、良吉は言つた。

「兄さんのおつしやるだけのことはよく分りました。私も前には大きな工場にゐましたが、少し事情があつて、其處をやめて今は小さな工場の鑛部に働いてゐます。其間に病氣をしたりして、つい母のことが氣にかゝりながら、しばらく少しの助けにもならずにしまひました」と、憲一は、時々淋しく笑ひを浮べながら語つた。

「一先、田舎へ歸らないか」

「田舎へ歸つて、私にも、妥協的な生活をせいと兄さんはおつしやるんですか」

「東京にゐれば生活は、妥協的でないといふのかね」と、良吉は從弟の顔を冷かに見た。

「いや、ないとは言ひませんが、都會の労働者は、眼醒かけてゐます。生活の氣分が、田舎とは相違してゐます」

憲一は反身になつて、眼を光らした。

「其れは、すべて未來を考へての生活だ。現在母を救ふといふ考へはないか」

「兄さんは、やはり、私にも母といつしよになつて同様な生活を送れとおつしやるのですか。

なんで、母の生活を私は知らないとがありません。私は、母の苦しんでゐる有様を思ひ、母と同じやうに虐げられてゐる、貧しい人々の身の上を思ふと、血が燃え上ります。ほんたうに昵としてゐられない思ひがします。而して、資本家と労働者の關係を根本的に改革しなければならぬと考へます。其叫びを上げるのは第一に都會からです」と、憲一の言葉は熱して來た。

「憲一、資本家は都會にあつても、田舎にあつても同じ者だよ。而して、貧乏人の受ける苦痛も同じい。貧乏人は相扶け合はなければならぬから、親子、兄弟の仲は大抵いゝが、金持は骨肉同志で利益のために争つてゐる。世間を憚らないだけ田舎の金持が一層醜いかも知れない」と、良吉は飽迄、冷靜であつた。

「兄さんは、なぜ社會のために、あなたは戦はれないのです」と、憲一は、狂熱的に底に憎しみと感情の燃える瞳を良吉に向けた。

「俺は病人だ、肉體の上ばかりでない、精神上から言つてもだ、何に對しても進んでやる氣が起らない。お前のやうに熱烈な要求がない。あるものは自己否定のみだ。この世紀は、俺みたいな病人を他にも澤山産んでゐる筈だ」と、良吉は、口では言つたが、顔には重苦しい影がかつた。

「叫びを上げるには、田舎では、やはり駄目です」

「苦しんでゐる者は、皆な同じい。早く理解がある。實感が共鳴させるのだ。私は、お前が駄目だといふ理由が分らない」

「智識に缺けてゐるのです。語る同志がないのです。新社會はやはり大都會から創ります。森の中や、田園からではありません」

「さう、田舎からではない。たゞ、私はお前に主義を捨て貰ひたい、而して、孤獨な、お前を頼りとするより他に此世に何の望みを持たない、母親を慰めて貰ひたいのだ」と、良吉は言つた。遠くやつて來たのはたゞこれだけを言ふためであつた。而して、彼は、口を噤んでしまつた。下を見詰て、深く思ひ込んでゐた憲一は、溜息を洩した。やがて、青白い顔を上げて、

「分りました。歸ります」と、彼はきつぱり答へた。

良吉は、黙つて、憲一の顔をちつと眺めてゐた。

「兄さんは、いつお立になります」

「俺は、もう別に用がない。明日の午後、立つ考へでゐる」

「ぢや、ごいつしよに歸ります。いづれ、停車場でおあひします。兄さん、私には約束をした女があるのです。毎日工場へ通つてゐる、貧乏人の娘です。今夜、女に遇つて、約束を取消して來ます」と、憲一は告げた。

良吉は、これを聞いて、いさゝか驚いた。

「何も、其の女との約束を取消すやうな必要がないぢやないか」と、彼は言つた。

「いゝえ。遠く別れば互の境遇が自然に違つてしまひます。而して、約束したことが苦痛になる時が來ます。この先何うなるか分らないことですから、約束は取消した方がいゝのです」と、憲一は答へた。

良吉は、彼等の戀愛は、趣味や、人生觀の理解から生じたといふより、物質の缺乏から起つ

た同情であると思つた。やがて、彼は暇を告げた。

歸り途を彼の學んだ學校の方に取つた。

學校の門を入ると、ちやうど暑中休暇で、何の教室の窓も閉つて建物の外景は寂然としてゐた。獨り雀が啼きながら高い軒端を飛んで、其の友と戯れてゐる。既に、この時、低く傾いた赤銅色の西日が、校庭に植つてゐるポプラの樹をうす赤く彩つてゐた。詩を高唱して、青春を讚美した一群の人々があつたが、其の人も、もう返つて來ない。

感慨に沈んだ足どりで、彼は、學校の門から二たび遠ざかつて、下宿の多い通りを、電車路の方へと歩いて行つた。豆腐屋の喇叭の音や、巷から渦巻き起る喧騒の響きが、一日の黄昏を知らしてゐる。

「一日は誘惑に終る。而して、永久に人生には理解がない」と良吉は思つた。

明る日の午後、良吉は途中で用を済して、時計を見ると、まだ餘程汽車の立つ時刻には間があつたが、停車場に行つた。すると、入口の處に既に憲一は立つて、往來の方を向いて彼の來

るのを待つてゐた。見ると、小さな包みを一つぶら下げてゐた。

「大へん早かつたぢやないか」と、良吉は聲をかけた。

「別に、宿にゐたつて仕方ありませんから、早く此處へ來ました」と、淋しく笑ひながら答へた。

「まだ、一時間ばかりあるから、少し山の上でも散歩しやう」と、良吉は言つた。二人、並んで停車場から出かけた。

「あの時分から、亂暴であつたがきちやうめんな性質であつた」と、良吉は歩きつゝ、従弟の子供の時を思ひ出した。あの時から見ると、二人の境遇は變り過ぎたと考へたのである。

二人は、新しく話合つて、別に其れに興味を持つといふこともなかつた。見晴の好い處に出ると、眼下になつて停車場が見られた。立上る煤煙のために、この附近一帶に樹木は生色がなく、黒く窒息をして枯れてゐるのもあつた。

空を仰ぐと、日の光りが見えない程、煙のために曇つてゐた。

空の濁つてゐるのは、獨り此處ばかりでなかつた。眼を遮るものもない、この高い處に立つ

て、四方を見渡すと無限につゞく大都會の建物の上に林の如く亂立した煙突からは、黒蛇の蟻るやうに幾筋かの煙が纏れ合つて、恰かも微風だにない午後の空に動かなかつた。

この黒煙の下に幾百萬人の労働者が汗を流して働きつゝあるのだ。

この世界の文明と活動の全權を握りつゝあるものは、少數の資産家ではなくて、眞に多數の産業労働者である。而して、労働者の生活問題は、一人の問題でなく、またこの都市だけの問題でなく、實に海洋と大陸に亘る全世界の生活問題であつた。

良吉は、斯く考へると、きつとなつて憲一を見た。

「女との約束を取消して來たか」と、聞いた。

「取り消して來ました」と、憲一は答へた。其の顔は青褪て見えた。

「女は、何と言つた」と、良吉は、冷酷と見えるばかりに、其のことを聞いた。

「突然に言ひ出した時には泣きました。けれど、しまひに潔よく承知しました」

彼は、頷きながら、従弟の言ふことを聞いてゐた。

「憲一、お前のお母さんのことは、私が引受けた。行き届かないだらうが、出来るだけのお世

話をするから、お前は、東京に止つて、これまでどほり信ずる主義のために戦つてもらひたい」と、突然にも良吉は言つた。

これを聞いた、憲一は、驚きと喜びのために眼は輝いた。

「兄さん、其れは本當ですか？」と、自身の耳を疑つたのである。

雨 「本當だ」と良吉は穩かに答へた。

を 「兄さん、あなたはやはり私の信じてゐたとほりの兄さんでした。あなただけは私を知つてゐて下さると思つてゐました。兄さんは決して、ニヒリストでありませぬ」と、憲一は躍らんばかりに激昂して、しゃべりつゞけたのである。

樹 「ぢや、お前は直にこゝから別れて宿へ歸つたらいい」と、良吉の言つた調子は、既にいつもの如く冷かに聞えた。

「僕は停車場までお見送りをいたします」

二人は、公園の林の間を歩いた。而して、無言のまま、停車場の方に向つた。

——一九一九、六月——

風の鞭

誰でもちつと顔を見られるのを喜ぶものでない。

殊に眇目のおさくが、しよんぼりとした姿で立止つて、顔を見る時は、其の眼の底に何等か悪意があるやうな氣すらしたのであります。

「小供の癖に」と、村の人々は、其時心の内で思つた。而して、おさくはあまり誰からも可愛がられなかつた。

父親は、殆んど後妻には頭が上らなかつた。おさくは、繼母のために、常に苛まれて來ました。けれど、あまり父親からも、また村の人々からも慰いたはられなかつたのです。

其れは、彼女に、おんぼりとした、可愛氣がなかつたといふことに歸します。

しかし、其れは、彼女の生れつきではなかつた。實に、この無邪氣な心を永久に失つたある怖しい幻影を、ある時見たからであります。

まだ、五つになつたばかりのおさくには、其れが幻影に過ぎなかつた。眞の光景であるとするには、彼女の頭は、あまり働かなかつたのです。あり得べきこと、あり得べからざること、一切が、幼ない彼女の眼には、幻影にしか映らなかつた。

いつもの如く、おさくは外に遊んでゐました。家の内には母が坐つて、下を向いて何か仕事をしてゐたのです。おさくは外に出て遊んでゐることに倦みました。而して、家の内へ入つて來ました。母が坐つてゐた處に、影が見えませんでした。おさくは、家の内を探して歩きまわした。何處にも、母の影は見付からなかつた。家の内は、いつにない寂然としてゐました。

おさくは、椽側に出て厠を覗きました。しかし其處にも見えませんでした。もう何處にも家の内を探す處がなかつた。彼女は、小さな足音を立て、うす暗い納屋の方に行きました。其の中には、味噌樽や、漬物桶や薪木などが積んで置いてある處です。其の入口の戸は、極めて開き具合が悪かつた。殊におさくには、さう感じられたのでした。おさくは、がたびしややつて、やつと其の戸を開けて中へ入りました。中はうす暗かつた。而して、直には、はつきりと分らなかつた。

彼女は、母を呼びました。しかし返事がなかつた。尙ほ、二足、三足奥へ入ると、不意に、眼の前に、だらりと垂下つてゐるものがあつた。おさくは、びつくりして聲を立てようとした。子供心に、ぼんやりと立つて、其れを見上げると、白い足の踵が見えた。其れは、母の足であつた。彼女は、もつと上を仰ぐと、母は頭髮を亂して、青白い顔をして、繩に頸を掛けてぶら下つてゐた。

「母ちゃん、母ちゃん！」と、おさくは、つゞけさまに叫んだ。而して、其の足に縋つた。足は冷たかつた。けれど、母は返事をしなかつた。

おさくは泣いて、泣きあかした。其の後のことは自分にも分らなかつた。其の目から、母を探ねても、もう母はゐなかつたのです。

「お母ちゃんは、何處へ行つたの」と、父親に聞いた。

「お母ちゃんは、病氣で死んでしまつたんだ」と、父親は答へた。

おさくは、過去のことを一切忘れてしまひました。たゞ、納屋の中にぶら下つてゐたものがあつた。其れが母であつたといふやうな記憶だけが残つてゐました。

「お母ちゃんは、いつ死んだの」と、おさくはもう少し大きくなつてから父親に問ひました。「お前が生れると直に死んでしまつた」と、父親は答へた。

おさくは、自分の記憶に残つてゐる幻影を疑つたのです。彼女は、其のことを誰に聞いて見ることにも出来なかつた。この時から、彼女は、すべての人の顔を見ると、人間は、みんな嘘付だといふやうに思はれたのです。みんなが自分に、眞實のことを言はずに隠してゐるんでないかと思はれたのです。

おさくは、いつしか無口な子供となつた。而して、人の顔を黙つて、ちつといつまでも見詰てゐるやうな子供となりました。眇目だけに人々に厭な氣持を抱かせたのであります。

おさくは、彼女を苛めました。大きくなつても、二人の間には、少しの親しみがなかつた。

おさくは娘盛りになると脊が高くなつた。體付きもしつかりとしてゐました。平常短かい粗末な着物を纏つて働いてゐました。彼女の健康さうな腕や、足は、短かい着物の外に露はれてゐました。

秋の日のことです。風は寒く、葉を吹き捲つてゐる午後であつた。おたきは、おさくを叱つたのです。

誰に對してもさうであるが、おさくは、嬉しいこと、悲しいことを言葉に現はしたことがありません。たゞちつといつまでも立つて相手の顔を見詰てゐるばかりでありました。大きくなるに従つて、彼女の眇目で睨む眼付は相手に一種の執念深かさ、氣味悪さを覚えさせたのであります。

いつまでもかうして見詰ることによつて、相手の胸の底に隠された祕密を見破るやうに、また、怨みを相手の胸に刻むやうに感じさせたのであつた。

この時も、おさくは立つて、ちつと繼母の顔を見詰てゐました。櫛の齒を通さない、纏れた彼女の頭髮を風は吹いて、長い髪毛は、顔の周囲になびいてゐた。繼母は、これが自分の産んだ子供であつたなら、どんな場合にも、かうした怨めしい而して憎しみの骨に刻むやうな眼付で、假りにも子といふ名づく者から睨まれるやうなことはなからうと思ひました。

繼母のおたきは、行末のことが何となく怖しくなつた。けれど、今、負けてゐては、却つて

よくあるまいと考へた。親に對して、そんな顔付で、しかも執念深く睨むとは何といふことだと思つた。繼母のおたきは、負けてゐずに、散々に汚なく、おさくを罵つたのであります。

おさくは、いつもかうして、誰人からでも辛く當られた時は、思はず其の人の顔を見詰るのが癖になつたのです。必ずしも、其れは憎悪からばかりでなかつた。また、怨恨からばかりでなかつた。子供の時分からさうであつたが、其時、自分にも、やさしくしてくれた母があつたやうな氣がしたのです。其の母が、ある時納屋の中で、頸を吊つて死んでゐたやうな氣がしたのであります。其れはたしかに記憶に残つてゐる筈だ。而して、幻影でなく事實だといふやうな氣がしたのです。誰も、其のことを知つてゐる者がない。知つてゐても自分に話さないのかも知れない。父親は、そんなことはない。其れはお前が夢を見たのだ。お前の母親は、お前が産れると直に死んだといふのである。おさくは皆んな人間といふものを信じなかつた。而して、自分が心に悲しく思つた時は、いつも母が頸を吊つて死んでゐた黒い影が、夢のやうにぼんやりと眼の前に浮んだのであります。

彼女は、どうかしてはつきりと、死んだ母の顔を見たいと思つた。何うかしてはつきりと、

其の顔が思ひ出せないものかと心にあせつたのです。彼女は、繼母から苛められても涙が出なかつたかはりに、いよ／＼心に悲しければ、悲しい程、虚空を見詰て、忘れ難い怖しい幻影を見守るのであります。

「なんで母は、死んだのだらう」

風 かう、彼女は、考へると、益々無口な人間とならざるを得なかつた。

「其れとも、妾が子供の時分に見た夢を忘れずに信じてゐるのだらうか」

の 哀れな、強情なおさくは、こんなことを思ふこともあつた。けれど、其れによつて、この世の中が、遽かに、明るく、またさう考へることによつて、自分は、何もかも忘れてしまつて、愉快になる筈がなかつたのです。

「めつかち、手前が睨んだつてな、こわくはねえぞ。村の衆は、みんな手前の強情張りのことを知つてゐるさかいな。親に向つて、なんでもせいやい。手前なんか、この家にゐなくていゝ人間だ。どうせ俺とは仇同志だすかい、何處へでも出てうせると、くたばつちまへやい」と、おたきはおさくの顔を見ずに仕事をしながら怒鳴つてゐた。

おさくは、繼母に何を言はれても黙つてゐた。而して、いつまでも一處に立つて、ちつと繼母の方を見詰てゐました。地の上に落ちてゐる蘂屑が、心なく轉がつてゐた。而して、おさくの髪の毛は、やはり風に吹かれて長くなびいてゐた。

黒雲は、西から東の方に、ぐんぐん頭の上を流れてゐました。葉の黄色くなつた、木立は空の模様が變るにつれてざわめき立つてゐた。

おたきは、何となく胸騒ぎを感じました。其れは、いつまでもおさくが此方をちつと見詰てゐたばかりでない。あんな強情な女だから、あの思ひ詰てゐる様子では、事實何處へかこの儘行つてしまひはせぬかと思つたからです。

夫のゐない、留守の間に、そんなことがあつたら、世間に對して、自分の顔が立たないと考へると、おたきは、平常、随分おさくを罵つたり、辛く當つたりしたことがあるにも係らず、この時は、何ういふものか、あまり自分の口が過ぎたと思ひました。

おさくは、まだ黙つて、ちつと此方を見詰て立てゐました。繼母は、知らぬ顔をして、仕事をしてゐました。而して

「早くしてしまはないと、晩には雪でも降るか知れない」と、獨り語を洩らして、自分の氣をまぎらはせ、同時に、おさくの氣持をまぎらはせようとしたのであります。

其の後から、「平常は、これ位のことを言つて氣にかけない癖に、今日は、少し蟲のゐる所が悪いと、いつまでも意地張つてゐやがる。いくら繼兒根性といひながら、こんな奴があるもんか」とおたきは、心の中でつくづくおさくを憎いと思つてゐました。

おたきは、下を向きながら、過去の思ひに耽つてゐました。其れはほんの東の間であつたけれど、いろ／＼なことが考へられたので、いつしか遠い氣持になつてゐました。ふと、おたきは氣付いて顔を上げた時には、其方にはおさくの立つてゐる姿が、何處へ行つたか、全く見られなくなつたのであります。

おたきは、急に胸を突かれたやうな思ひがしました。彼女は、先刻の豫覺がいよ／＼事實となつたのでないかと思つた。

「あの強情張りの阿魔めが、人を困らせようと思ひやがつて」と、おたきは、心の中で憤りながらに邊を探し廻つた。けれど、何處にも其の姿を見なかつたのです。

おたきは、慌てて家に入つて来ました。彼女は、この時、納屋の方に當つて、人のゐる氣は
いを感じたのです。いふまでもなく、其れがおさくであるといふことを知ると、おたきは、おさ
くが何をしてゐるか其の様子を見ようと思ひました。彼女は、忍び足をして、納屋の入口に近
づきました。而して僅か許り、音のしないやうに開けた隙間から、うす暗い裡を覗きました。

おさくは、其の中で、聲を立てて泣いてゐた。おたきは、曾て、おさくがこんなに泣いたの
を見たことがなかつた。彼女は自分が言つたことが、其れ程おさくにとつて悲しいことであつ
たかと、省みたのであります。しかし今日に限つて、おさくがこんなに泣き、口惜しがる理由
が分らなかつた。

おさくは、顔から流れ落ちる涙を短かい着物の袖で拭いてゐました。やがて、おさくは、
薪木の上に載せてあつた、荒縄を取り上げて、其れを泣きながら解いて、天井の低い梁に懸け
た。而して、しばらくまた両手で顔を掩ふて滅入るやうに泣き入つてゐた。

息の音を潜めて覗つてゐたおたきは、おさくが繩を輪に結んだと同時に、戸を押し開けて中
に飛び込んだのであつた。

父親が歸ると、おたきの言ふまゝに、おさくを家から出して、何處へでも口があつたら奉公
にやることにきめたけれども冬であつた。而して、直には、其の口のあらう筈がなかつた。
物憂い冬が過ると、春になつた。遠い國から、この寒村にまで女工を募集に、口の上手な男
がやつて來た。おたきは、父親にすゝめておさくを旅へ出さうとした。けれど、流石の男も、
眇目のおさくを見ると、連れて行かうと言はなかつた。夜業があるから、眼のよくないものは
つとまらないといつて斷つた。

木々の芽をふく頃になると、おたきは一層おさくを見るのが惱ましい氣がしてならなかつた。
のです。けれども去年の秋の事があつてからあまり口に出して罵らなかつた。其の代り心の中
でより残忍な憎しみを加へたのであります。

小學校の教師に、戦争に行つて歸つて來た、左腕のない男がりました。其の男は不幸な人
間でした。どういふ考へがあつてか知らないが、おさくを自分の妻にもらひたいと、人を介し
ておたきに話しました。

父親は、いつも外に出て働いてゐて、稀にしか家に居なかつたから、而して、後妻のおたき

が権力があつたから、其人はこのことをおたきに話した。喜んで、承知するだらうと其人は思つたのです。

其時おたきの心は不思議に働いた。一日もおさくの顔を見ることから早く逃れたいと思つたのだけれど、おさくを學校の先生の女房にすることに對して、更に烈しい憎悪と嫉妬とを覺えたのです。而して、先生の女房になつて、この村に住んでゐたなら、おさくがどんな復讐を自分に對してするかも知れぬと怖れたのです。

呼　そんなにいゝ位置におさくがなるなら、どんなことをしても彼女を自分の傍から離すまいと心にきめた。おたきは、このことを何うかして、おさくの耳にも、また夫の耳にも入れたくないと思つた。

おさくにとつて、この上もない良縁を、自分の口から斷つたと聞いたなら、實の父親である夫は怨むばかりでない、あの強情者の執念深いおさくが、どんな復讐をしないものでもないとおたきは思ひました。

「其れは、私共にとつても、あの娘にとつても、この上もない有がたいことですが……」と、

おたきは、申込んで來た人に對して答へながら、心の中で、外の若葉に照り映える日の光りを見やりながら、何んとかおさくを陥れてこの縁談を破壊するとは、叶はないものかと後の言葉を考えて苦しんでゐたのであります。おさくはちやうど圃へ出てゐて、留守であつた。

「先生さんは、器量や、仕度なんかを望んでゐらやつしやるんでねえだ。たゞ自分が子供の時分から不合せなもんだからやはり不合せな女を妻にしようといふ考へから言はつしやるんで、この家にとつても、こんな良い縁はねえと俺も思ふんだ」と、來た男は話しました。

おたきは、後の言葉に行きづまつてゐたが、大膽にも、ついこんな嘘を言つた。

「こればかりはお前さんにしか言へない内證だが、繼子の仲で言ふのでないが、あの子は悪い癖がある。其れだから先生さんへは上げられない」と、おたきは、流石に胸をどきつかせながら言つた。

「悪い癖つて、何か盗むのかい」と、男は眼をまるくして問ひ返した。

「其れだから先生さんへは上げられない」と、おたきは、殆んど機械的にもはや自分の言葉にどれ程の意味があるかといふことも反省する能力を失つてゐるやうに繰返して言つた。

すると、これを聞いた男は、其の言葉におたきの想像することの出来なかつた程の驚きを感じたらしく、頭を振つて、やがて此家から辭して去つたのであります。

其の日から、おたきは恐怖に襲はれました。

おたきは、流石に村の者に向つては言ひませんでしたけれど、町に出ると、遇ふ人々におさくの嫁入口を頼んだのであります。成べく遠い處へ、而して、容易に家へは歸つて來れない處へ彼女をやらうと思ひながら。

ある時、遠い村の者が、偶然のことからおたきに話をしました。

「實は、婢といふのは、白痴なんだが、其れ程でもないのです。家は少しは米も取れるので貧乏人ではない。何しろ一人息子なものだから、両親が可愛がつてゐて、一生獨身で置くのは可哀さうだから、もう來てくれるといふ嫁があるなら、不具者でも、どんな者でもいゝといふのだが……」と、言ひました。

おたきは、これを聞くと心で喜びました。而して、内々其の男と相談をきめて歸りました。

夏のはじめに、この話は、ついに纏りました。おさくは、先方の男が白痴だといふことは知

りません。たゞ、両親の言ふなりに、黙つて、其の遠い村へ嫁に行くことになりました。

おたきは、おさくがこの村に長くゐては、いつか學校の先生の口を斷つたことを耳に入れないものでもない。だから、遠い處へやつて、年に一度も歸ることの出來ないやうな處へやらうと思つたのです。

空は晴れて遠い山々の頂きが霞んで見えました。燕が飛んで來て、長閑に囀つてゐます。もう日にまし暖かくなつて、往來を歩くと汗の體に、にじむ頃でありました。

汽車も、また車も行かない山路を七里も越えて、彼方の村におさくは行くのでした。三里行けば、後は、馬に乗せるといふ先方の約束でありました。

朝早く、此方を立てば、夜には、先方へ着くといふので、其の日の朝になると媒介者は急ぎ立てました。

「急なことで、好い着物が間に合はないから」と、いふ口實で、おさくは、夏だといふのに裾に綿の入つた給を被せられました。其れは、おたきが何處からか持つて來たのであつた。

おさくは、絹物と名がつくばかりで、重い厚い着物を纏ひました。而して、其の時ばかりは

結立の頭髮をして、草履を穿いて媒介者に連れられて、日の上らない前に家を出ました。

太陽が上つた時分には、おさくは、もう大分遠く村を離れてゐました。草履から立ち上る白い埃は、袴の厚い着物の周圍に舞ひ上つた。彼女が馬の迎ひに来て居る村に着くまでには、額際からは玉のやうな汗が滴つて、頭髮は濡れて、草履は摺切れて、着物は眞白になつてゐた。

おたきは、其の日から、また、おさくが不意に歸つて來はしないかと怖れたのです。

三日目に、おたきは、おさくが歸つて來はしないかと氣が落付かずに、家の前へ出たり、また入つたりしてゐました。五日目に、おたきは山の圃に行つて働いてゐたが、おさくが今日あたり逃げて歸らないものでもないと思つて、幾たびとなく手を止めて立上つて、彼方の遠い山の方を眺めました。山は淡く煙るがやうに霞んで見えませんでした。而して、村につゞいてゐる細路を、陽炎の裡に連つてゐるのが遙かに望まれました。けれど、其の日もやがて、靜かに春きましたけれど、おさくは歸つて來なかつた。

おたきは、父親が娘の様子を見に行つて來るといふのも無理に止めてやらなかつたのである。來年にもなれば、おさくに子供が産れるだらう。さうすれば、永久におさくは歸つて來ること

がないと思つたからであります。

秋の寒い日に、おたきは、一人で畑に出て働いてゐますと、ふと彼方の薄の蔭に眇目のおさくが、いつもの短かい着物を被て、手足を露はして、ぢつと此方を見詰てゐる幻影を見ました。彼女は、思はず水を浴びたやうに慄然としたのです。

風
山々には雪が降りました。聽てこの村も來年の四月頃までは、雪の下に埋るのであります。海鳴りの音がして、山を越す路は、全く杜絶してしまふ。さうすればおさくは歸ることが出來ない。おたきは、其の日が早く至るのを待つた。

雪は降つて、地の上が眞白になりました。この景色を見た、おたきは喜んだ。然しこれくらゐでは駄目であつた。もつと、深く雪が積らなければ彼女には、安心が出來なかつたのです。

馭 者

終日空の雲は凍つてゐました。

馭 其の下には、塔の尖つた先や、煙突などが突立つてゐました。路を歩く人々は、無数の蟻のやうに散ばつて、其の間を黄色な電車がのろく走り、白い煙を上げて、黒い自動車慌しげに駆けてゐます。

者 悲しさうな細い音色や、また、太く、其の割に平たい物を叩いてゐる音などが、何處からともなく舞ひ上つてゐる、茫漠とした音響の中に一段、飛び離れて聞えて來ます。而して、其の細い音色も、平たい音も、いつしか無限の空間に跡なく消えて行くのであります。

電車の停留場の赤い鐵柱の傍には、散り残つた柳の木の葉が、折から洩れるうす日に照らされて、今にも散つてしまふ、はかない命の一瞬間にまどろむ如く見えました。

たとへ、自然の一つ、一つには、このやうな意味があつても大概の人は、これに對して心を

止めやうとするものもない。皆な他のことを考へたり、自分のことを考へて、この廣い世の中に、時を同うして、一つ事を心から同じく考へるといふことは稀れなのであります。

この時、人々の歩いてゐる間を分けて、また、彼方から走つて来る自動車を避けて、一臺の青く塗つた馬車が走つて來ました。其れは、この都會で名の聞えてゐる大きな呉服屋の馬車で、あつて屋號を書き入れた金色の紋が付いてゐます。而して、其の馭者臺には一人の男が、ちやうど鑄造の像のやうに嚴然として鞭を持つて前方を睨んでゐました。

其の男の顔付きが、いかにも傲慢に見えたのです。而して、この男が、馬車の上から路の上を歩いてゐる人々を小馬鹿に睨んでゐるやうに思はれたのです。

第一肩頭に垂れかゝつた、袖の短かい外套を被て、饅頭形の帽子を眼深に被つて、其の廂から、人々を睥睨してゐるのは、これに氣を付けた者は、癪に障りました。

何も、こんな風をしてゐるから、其の男が幸福である譯でない。普通の服裝をしてゐるよりは幸福である譯では決してない。而して、かういふ様子をするには、男の知つたことでない。彼が廣告の道具に使はれてゐるといふまでに過ぎないのである。

けれど、彼が、こんな風をしてゐるので、どれだけかうして、馬車に乗つて路を行く時分に、知らぬ人々から憎まれたか知れない。あの贅澤な、金持にしか用のない、華麗な品物が大きな建物の廣い店の硝子張りの中にいっぱい飾つてある。而して、其のことは金のない人々の心を焦立たせまた不快ならしめる以外に、時としては、彼等をして生活について絶望さへ感じさせる、其の呉服店の馬車であつて、其の箱の中には、やはり金持の處へ送り届けられる、贅澤な品物がいっぱい入つて居り、其の男が、この番人であるといふ處から……

其の男の名は喜作であつた。

三年ばかり前のこと、彼は、信州の山中で温泉場に通ふ馬車の馭車をしてゐました。彼の娘は十五で都會に奉公に出た。而して、彼は、長い間の田舎の生活に飽いて、やがて都會を、多くの田舎の人が、いゝ悪いにつけて憧がれる。而して、其處へさへ來れば、華かな會で空想に描いたやうな生活が送られると思つて、先祖からの家や屋敷を賣り拂つてしまふやうに、喜作も出て來たのであります。

しかし、かうして出て來た者が、またすべて空想から眼醒める如く、彼も、また現在の生活

が、當年の生活に較べて、決して好いとは考へられなかつたのです。

彼は、馭者臺の上に乗つて、此邊の市街の喧騒とは、全く無頓着に、自分が若い時分から毎日のやうに通つた山路を眼に描くのであつた。停車場から七八丁も行けば、路は、はや険しくなつてゐる。石の多い、凸凹の乾いた路は、しばらく河の流に沿ふて、山の間へと連つてゐる。

雨 船橋を渡る時に、ラツパを鳴らした。彼方からも、白い日除をした馬車が温泉場から歸りの客を乗せて坂を下つて來るのが見えた。

呼 河の水は、銀色に光つて、靜かな漣を立て流れてゐる。煙草の煙を輪にして飛ばしたやうに
ぶ 輕やかな雲が空に浮んで、地平線に頭を並べた山々の色が鮮かに、高原の夏の感じを午後の光
樹 りの裡に湛へてゐた。

其のやうな自然の景色も彼にはなつかしかつたが、其れよりは、毎日、自分の馭した二頭の馬の姿が記憶の裡に蘇生するのでした。四里に餘る路を、日に幾たびとなく往來して、疲れ、疲れて、終りに役に立たなくなつた時は、屠殺場に送られて行くのが、是等の馬の運命であると考へると彼は、いつでも其の上のことは思ひたくなかつた。

人間だつて、やはりさうした運命だと、喜作は、あきらめてゐる位であるから、寧ろ、其のことにについては、あまり考へなかつたが、同じ馬でも、かうして手入が行きとゞいて、立派な、而して、あまり重くはない車を引くの、あの、石の多い山路を汗を流して、日に幾回となく、朝早くから、夜は遅くまで走らせられるのと幸、不幸について殆んど較べ物にならないと考へたことがたび／＼ありました。

しかし、其の考へは、實に、彼が、この大きな呉服店に雇はれた最初の考へであつて、彼が、かうして毎日、この馬を馭して、堅いアスファルトの上を蹄を響かせながら走るのを親しく見た時は、自身の田舎にゐた時の生活が今よりは根氣の詰るものでなかつた如く、この馬も、毎日、單調な生活を繰返すのを樂とは思はなかつた。

「さうだ、見かけにはよらないものだ」と、彼は、誰に言ふとなく、獨りつぶやいたのであります。

彼は、山路を驅つた二頭の馬について思ひ出した。

一頭は、赤毛の色艶のいゝ肥えた馬でした。而して、他の一頭は、色のやゝうすい、細つそ

りとした、痩せた馬でした。

二頭の馬は、頭を並べて、足並みを揃へて走りました。一頭が他の一頭より先に行くといふことがなく、互に申し合せたやうに、互に相慰はりながら、苦しい坂路を上つて行つた。

一頭を鞭で打つと、他の一頭も打たれたやうに、其の鞭の響きに踊り上つた。而して、しばらくして、打たれた方を慰めるやうに、歩きながら體を寄り寄せるのでした。

何の宿命でか、かうして死ぬまで使役に堪へなければならぬのか。而して、其の運命をこの友とのみ分たなければならぬのかといふ風に、二頭の馬は、互に物こそ言はなかつたが、慰はり合つてゐました。一頭が疲れて來ると、自然他の一頭も歩みをゆるめた。而して、二頭は、互に先になることもなく、また遅るゝこともなく、苦しい長い路をたどつたのです。

馬車の中には、いろいろの客が乗つてゐました。其等の人々は、馬について思ひやりがなかつた。馬の苦しむのと、彼等の笑ひながら話し合つてゐることゝは、全く無關係であつた。

普通ならば、肥えた、色艶のいゝ馬が強くて痩せた馬の方が早く疲れる筈であつたけれど、どういふものかいつも肥えた馬が先に弱るのでした。

其處から温泉場に一里といふ坂の頂上に、一本の高い樅の木が立つてゐました。まだ、其の木の處まで行かないうちに、赤毛の肥えた馬は、二度ばかりも倒れたことがあつた。其れは暑い日であつた。あの大きな横腹に、波を打つて、今にも息の切れるやうに喘いで、口から白い泡を吹いてゐた。全身の血管は、縦横に腫れ上つて、ちやうど細引の縫れ合つたやうであつた。而して、すつかり毛が汗に濡れてしまつて黒く其の色が變つてゐた。

そんな時でも、痩せた方のは、平氣であつた。幾分かは疲れてゐるやうに見えたが、また全身に汗は流れてゐたが、柔和な眼を開けて、俯向いて、不幸な友を見てゐるやうな、見てゐないやうな様子であつた。

者 「オイ、こんな處に降してしまつて何うするんだ。荷物があるから、俺達は歩けない。一疋が何ともないのに、此奴は意氣地がないぢやないか。ぶん擲つて起したら何うだい」と、客の中から怒鳴る者もあつた。

喜作は、其の二頭の馬のことを思ひ出したのです。別けても、やさしかつた、色の白つぽい痩せた馬の姿が眼に浮びました。どんな時にも、柔和な大きな眼を開けて、運命に忍従してゐ

た姿が、限りなくいちらしかつたが、今頃は、あの二頭の馬は何うなつたであらうと思つた。

彼は、鞭を上げた。先になつて、眼隠しをされて走つてゐる黒毛の大きな馬の尻を打つた。

「ハイ、ハイツ」と、叫んで、彼は、前方を歩いてゐる人々を叱した。

而して、次の瞬間には、彼はまた異つた空想に囚へられてゐるのです。

空に浮んでゐる、凍つた雲の一つを睨んでゐるやうに、彼の眼は、ちつと前方を見詰てゐました。尖つた鼻頭は、磨れたブロンズのやうに光つて、いかにも高慢ちきに見えた。けれど、

其の現はれが何んで彼れ其者であらう。

もう日が暮れるに間近かな時分であつた。

歸つて来た娘のお筆は、七圓餘りの給金を皆な自分の物を買ふために費つてしまつて、親の前に出さなかつた。櫛や、白粉や、襟巻などを買ったといふのであつた。

喜作は腹を立てた。其れでなくても、年末でいろ／＼の入用なものがあるのを知つてゐる癖に、あまり我儘過ぎると思つたのです。而して、二言、三言、娘と言ひ争つた。

お筆は、自分の取つた金を自分で勝手に費ふのに、何が悪いかと言つて、平氣な顔をしてゐ

た。而して、何處かに、親を親とも思はない様子が見えました。人の好い喜作は此時かつとなつた。いきなりお筆の横顔を擲つた。お筆は泣き出すかと思つたのに、打たれたまゝ平氣であつたばかりか、眼に嘲笑を浮べてゐた。喜作は、柔かな肉と、ツヤ／＼した頭髮に觸れた自分の手應へを、尙ほ心に感じてゐたのです。其れは、決して全くの他人の肉體でない。實に自分の血と肉を分けた子供の肉體を擲つたのであると考へると、其の手應へが、尙ほ手に残つてゐるのに對して、あまり好い氣持がしなかつたのです。

けれど、心で何う思つても、眼は、やはりいま／＼しさうに娘の顔を穴の明く程、睨んでゐました。

いつの間に、こんなに親を親と思はなくなつたのだらう。彼は、かうして叱つた時に悲しくて泣き出した昔の娘の姿を眼に思ひ描きました。而して、もはや親を怖れなくなつた娘に對して、限りない淋しさと絶望を感じました。次に、其れよりも激しい憤りを覺えたのであります。

彼は、つゞけさまに、もう一度、娘を擲らうとしました。この時、お筆はす早く、其處から身を避けて、外に逃げ出しました。而して、下駄を穿いて、入口の柱につかまつて、すらりと

した體を斜にして、笑ひながら、此方を振向きました。

流石に、喜作は、其處まで娘を追つて行かなかつた。彼の心は、急に其の怒りを忘れたやうに、茫然として娘の姿を眺めてゐた。

血色の好い顔、愛くるしい大きな眼、其れは、親の權威をもつてしても、何うすることも出来ない、たゞ若い者が其れを愛し、また若い者にのみ向けられる、眼であり、羞恥であると感じると、喜作は、胸から腰にかけて流れる線が、すっかり全く女らしくなつてゐるのに始めて氣付きました。

お筆は、忽ち其の姿を街頭の賑かな物音の起つて、聞えて来る方へと消してしまつた。家の裡には、電燈がついた。喜作は、下を向いて思ひに沈んだ。

「あなたは、いつまでも子供のやうに思つてゐなさるが、あの子も、もうお嫁に行く年頃ぢやありませんか」と、此時、妻は言つた。

彼は、其れに對して、何とも答へることが出来なかつた。やがて自分達から永久に去つて行くであらう子供について、限らない悲しさをはじめて味つてゐたのであります。

「あの子も、この頃、夜遊びに出ますが、間違ひがなければいゝがと思つてゐるのです」と、妻は、考へ深さうな顔付をして、また、傍から言つた。

喜作は、やはり黙つてゐた。

馱者臺に乗つてゐる彼の顔は、依然として前方を睨むでゐます。彼は、其の時のことを思ひ出した。

「或は、さうかも知れない」と、娘のことについて心に獨りうなづきながら、折々、鞭を上げて黒い馬の尻に一撃を加へながら、

「ハイ、ハイツ」と、叫んで、前方を遮る人々を叱した。

其の顔は、いかにも高慢ちきに見られたであらう。中には、不平を言つて、彼の顔を見上げて、睨み付けて行く者もあつた。

はからずも喜作は、嫁入の晴着を馬車の中に満載して、先方へとどける途にあつたのです。

これを馬車に收める時に、美しい着物や、すべての裝飾に使ふいろくの布地が、赤や白や、紫や、青の端口を見せて、しつとりと絹地特有のしとやかさに重ねられてゐたのを見た。其の

有様を眼に思ひ出してゐた。

彼は、自分の不幸な娘の立姿を空中に描いたのです。而して、こゝにあるすべての晴着を彼女に着せて見てゐるのでした。

「どんなに美しくなるだらう。而して、どんなに喜ぶだらう」と、彼は、我が娘の生れ變つたやうな様子を空想しながら心の中で叫んだ。

を やがて、晴やかな儀式の席に出るんだ。自分もまた生れ變つたやうに、羽織、袴で盛装をして娘の父親といふので、其の席に坐るんだ。

ぶ 金色のびか／＼として、燈火は、四邊の眩しい裝飾の座に射返るだらう、暖かな廣間にはも、樹 客がいつばいに詰め込んでゐるんだ。而して、彼等は自達分の喜び事のやうに、笑つたり、

しやべつたりしてゐるんだ。
人間のされることで、なくて、俺達にばかり出来ないことがあるもんか。而して、其れをして何が悪いと言ふんだ。

「この馬車の中にあるものは、みんな、今だけは俺の自由になるんだ。俺は、其れを娘に着せ

ることも出来るんだ」

彼の頭は茫としました。而して、神経は興奮してゐました。

「ハイ、ハイツ」と、鋭い聲で叫んで、頻りに彼は鞭を上げて馬を打つた。

馬は、寒空の下の、暮方の街の中を、音を立て走りました。其の音は、乾いた土の上に狂氣
取 ぢみた音を立てた。

右にも、左にも路を曲らないだらう。何處へなりと、たゞ眞直に、夜中、この街の中をかくして馬を走らしてゐたらどんなであらう。

喜作の頭の中には、たしかに、そんな考へが起つた。

者

——一九二〇、一二作

月に祈る

私の家は貧しかったのです。私は、他の、供の持つてゐるものは、やはり欲しかったので、どろかして自分もそれを買つてもらひたいと思ひました。

母にさへ歸つてからねだつたなら、きつと其れを買つてもらふとが出来よう。しかし、私は、いまゝでもにさう思つて、母にねだつたけれど、其の望みが、めつたに達せられなかつたのを考へないのではなかつたが、やはり、其れは、まだ自分のねだりが足りないからだと思つたのであります。

私は、かく考へながら家に歸りました。心に何か思ふことがあると、自づから憂鬱になります。小さい口は結ばれて、眼は輝いて、いつものやうにはしやぐことがない。其の時母は、坐つて、下を向いて仕事をしてゐました。また、起つていそ／＼として働いてゐることもありません。

母は、私を愛してゐた。他の母親がその小供を可愛がるよりも一層深く愛してゐたやうに、私は子供心ながらそう思ひました。それで、母は一目私が學校から歸つて來た顔を見ると、何もかも私の心の底に包まれたものを見抜くのでした。

私は、そんな時、自分の顔がどんなであつたかを、よく知ることは出来ません。門口からはしやいで歸つた時は、母は、直に快く私を迎へました。

「オ、早く歸つて來た。芋を蒸かして置いたよ」と、言つて、私を喜ばせた。

「早く袴をとつて、顔を洗つてからお遊びよ」と、母は、私を元氣づけてくれました。

しかし、私は、どうしてもはしやぐことが出来ないことがある。心の中に、どうしても母にねだつて買つてもらひたいものがあると、私は、家へ入つてからも胸がいつばいで、物を言ふことが出来なかつた。

いまから考へて見ると、母は、そんな時、どんなに苦しかつたのか知れない。母は、下を向いて、黙つて仕事をしてゐました。何か私から言ひかけられるのを怖れるやうに、小さくなつて、成るだけ私の顔を見ないやうにしてゐました。

「ねえ、おかあさん」と、私は、彼女の前に立つて、咽喉につかへるやうな低い聲を出して、先づ言ひかけた。

母はやはり聞えぬ風をして、下を向いて仕事をしてゐました。

「ねえ、お母さん……」と、私は、言つた。

やはり、母は、下を向いて黙つてゐました。私は、母が頭をあげて、私の顔を見向くのを待つてゐた。

「ちき晩御飯の仕度をしなけれやならん。早くこれだけやつてしまはう」と、母は、私にかまはず、獨言をして、いくら働いても、これでいふことは自分達にはないといふやうな調子でありました。

また、母が起つて働いてゐる時であると、一層歩みを小刻みにして、忙しさに體を運んで、成る丈け、傍に立つて、母の返辭を待つてゐる私の顔を見ないやうに、あちらへ行つたり、こちらへ來たりして働いてゐました。

どれ程、母は、私の學校用品以外のものゝ頼みを聞くことを苦痛に思つたでせう。どうかし

て其の頼みを聞きたくないものだ、聞けば、たとへ買つてやらなくても、困る中から買つてやつたよりも強い心の苦しみを受けなければならぬのを知つて、どうか、其の願ひを聞きたくないものだと、母は、いろ／＼に自分の體を動かすことによつて、強ひて話を避けるやうにしたのであります。

雨 私は、子供であつたけれど、母の苦しむのを知らぬのではなかつた。また、子供であつたが故に、飽迄、時には自分の意地を通したいとあせつたことがあるのです。

呼 そんな時、氣の小さい母は、流石に聲を震はして、眼にいつばい涙をためて私を見ました。樹 知つてゐやう。それを、そんな無理をいつて飽迄、母親を苦しめるものでない」と、母は、まるで、ちがつた人間のやうになつて、眞面目に私に向つて言ひました。

私は、かう母が改まつて言ふと、叩かれて、叱られた時よりも一層悲しく思ひました。そして、なんだかほんたうの母ではないやうな氣がしました。

しく／＼と、私は、別に母の傍から離れて泣いてゐました。いつまでも泣いてゐました。そして、どこか心の中で、

「なんで、お前はそんなに泣いてゐるのだ？」と、やさしく言つて、うしろから私のほんたうの母が近寄つて来て肩を叩いて、慰めてくれるのを待つやうに泣いてゐました。

「其れは、私の空想でありました。ほんたうの母の顔も、聲も、頭髮も、いまの母の顔や、聲や、頭髮をはなれて想像することが出来なかつたからであります。

ほんたうの母が、まだどこかにあると思ふのは、全く形のない空想であることを知りました時に、私は、畢竟、この世界に自分といふものは一人であつて、母とも同じでないことを悟つたのです。

「愛を感じない者は、また、決して死について考へない」と、私は、言ひ得ると思ひました。ちやうど、其の少年時代の眞實で、可なり怖しかつた心の記録を、私は、これから語らなければなりません。

村へ歸る途中で道が二筋に分れてゐる處がありました。其一筋をいつものやうに歩いて行け

ば自分の家に歸るのでした。そして、他の一筋の路を歩いて行けば、どこに出るか私は、其れを知らなかつたが、其の路が、極めてさびしかつたのは、其の路を歩いた時に幾たびも振返へられるので分りました。

ある日、私は、其の路を歩いてゐました。心の中に、ある不満を感じながら、しかも其の路は、また更に二つに分れてゐました。私は、あてもなしに、其の一つを歩いて行きました。

いつしか山の麓のしんとした池の畔に出ました。廣々とした草原に輝いてゐる日が、やはり他の半面の水の上に照り渡つてゐたけれど、他の半面は岸にまで迫つて繁つた、黒ずんだ杉の森の影が落ちて、水の上が眞黒になつて見えてゐました。

私は、空を仰いで、しばらく、錐のやうに尖つた森の頂を眺めてゐました。空はよく晴れて、氣が遠くなる程、澄んで黙つてゐた。二三時間前まで、學校にゐて、みんなと笑つたり、駈けたり、騒いだりしたことを思ひ出すと不思議な氣がした。誰が私のこんなところに來てゐることを知つてゐやう。

しばらく、私は、草の上に坐つて考へ込んでゐました。小鳥が、森の繁みで啼いてゐます。

小鳥すら、私がこゝにかうしてゐることを知らないものゝ如くに。もとより、母は、私がこゝにゐることを知つてゐない。

私は、黙つて起ると、ちつと眼を下に伏せて水の面を見詰めました。青々として、動かすに落付いてゐる水の上には、草原に咲いた、いろ／＼の花の姿を映してゐます。

母は、今頃家の門口を出たり、入つたりしては働いてゐるであらう。そして、時々思ひ出しては、往來の方を見て私の姿が其處に現はれはしないかと求めてゐるであらう。さう私は考へると、このまゝ永久に歸らずに、池の中に身を投げて死んでしまはうかと思ひました。

母はどんなに泣くだらう？、其の有様を想像すると、自分も泣かずにはゐられなかつた。きつと母は、あんなにほしがつたものをあの時買つてやればよかつた、あんなに叱らなければよかつたと後悔するにちがひないと考へると、また、頻りに死んでしまひたい氣が起りました。

私は、其の時の池の水の色が、どんなに魅力の深いものであつたかを後年になつても屢々思ひ出したのであります。

「お母さん、もし僕が死んでしまつたら何うする？」と、私は家に歸つてから、その夜ランプ

の下で母にたづねました。

「お前が死んだら、お母さんも一つに死んでしまはう」と、私より他に頼りとするものゝない母は、戯談でない、ほんとうにさう思つたらしく言ひました。其の言葉を聞くと、私は、晝間池の畔で描いた空想を思ひ出して、もとよりそんなことを母には話されず、咽喉のつまるやうな苦しさを覚えました。

其れから、僅か一年と経たぬうちに、母は死んだ。そして、私ひとりがこの世界に残された。學校も、友達も、あの静かな山の麓の池も、すべて故郷の一切を見捨て、東京にゐる叔父を頼つて行かなければならなかつたのです。

私の苦しい生活が其れからはじまりました。後になつて、母と共に貧しいながら生活をしてゐた時が、一番幸福の時代であつたことを悟る時が來ました。けれど、どんなに苦しくても、また叱られても、何人にいぢめられても私は、二たび死なうと思つたとはなかつたのであります。私が死んだとて、誰が泣いてくれるであらうか。誰がそれに對して何んと思つてくれるものがあらうか。木の葉が一枚散つた程にしか、社會の人々は思はないであらう。さう思ふと、私

は、反動的に死ねないばかりでなく、自分を眞に思ひ、眞に愛するものは、私ばかりであると思ひました。

どんな辛いことがあつても生きて居よう。決して死ぬものでないと、私は、もし死んだら戀しい母の許へ行かれるから、死んでしまつた方がいゝと一時は思ふことがあつても、すぐにもつと強い反抗の念に囚へられるのでした。

この時分から、呪ひといふことを知つたのです。

痛ましい少年の時代を物語る、そして、永久に記憶する。氣味の悪い話がある。

叔父の家は貧しかつたから、私は、何か働いて、常に賃錢を取つてゐました。

ある時のこと、電車の通る街頭に立つて芝居のちらしを往來する人々に、一枚づゝ配つてゐました。もとより、私の前を通る人に限つて渡したのであるが、電車路の彼方側では、程隔つたところに、私よりは、一つ二つ年上の女の子が、やはり片手に澤山のちらしを抱へながら前を通る人に一枚づゝ配つて居ました。

二人は、同じく、ちらしを撒くといふ以外には、何の關係もなかつた。けれど、私は、折々

頭を上げて、彼方の橋の方を眺めました。そして、熱心に通る人々の前に走り寄つて、廣告の小さな紙片を手渡してゐる彼女の姿を見ました。

「姉さんのを仕立直してもらつたのよ」と、彼女は年にませた顔付をして、胸にかけた眞白なエプロンを見まはしながら言ひました。この雪のやうに、白い前垂れをかけると、彼女の姿はずつと年よりは大柄になつて見えました。そして、この近所の活動寫眞館の女給仕や、もしくはカフェーの女ボーイに較べても、決して見劣りのしないばかりか、たゞ幾分か年が少な過ぎるといふ位のもので、誰でも間違へると思はれる程でありました。

私は、其の時、彼女のばつちりとした眼付を見て、そして、自分の見すばらしい、何の目も惹くものがない様子と見較べて、きつと彼女の方が私より早くちらしを配つてしまふであらうと考へました。

「どちらが早いか、配りつこをしませうね」と、彼女は媚びるやうな眼付で、私を見てかう言ひながら彼方に行つた。私は、たゞ黙つて重い氣持でうなづいたのであつた。

彼女の姉といふのは、少女の話によると、彼方の橋際のカフェーに給仕をして居るといふこ

とである。彼女は、其の姉のゐる處からさう遠くは隔らぬ處に、立つてちらしを配つてゐるのでした。

初夏の午後の日の光りは、この街の賑かな通りを、また、さまざまな色彩によつて景氣付けてゐる建物の竝んだ、其の上を照した。日は西に傾くにつれて、中空を走つてゐる電線をうす赤く染めてゐる。そして、たま／＼煙るやうに微風に波打つてゐる並木をば明るく浮き出してゐた。私は、ふと故郷にゐた時分の青々として廣やかな野原の景色などを空想してゐました。

少女は、いつも私よりは、ちらしを先に配つて家へ歸りました。明る日も二人は、同じ電車路に立つて通る人々にちらしを配つてゐた。そのうちに天氣が變りかけて來ました。空はいつの間にか、全く曇つて、濕り氣を含んだ風が顔を吹きつけました。早く私は、ちらしを人々に配らうと思つて、歩いてゐる人の前に走つては、急いで差し出してゐた。引つたくるやうにして行く者もあれば、身を避けて過ぎる者もあつた。また、邪険にもいらないと叱り付けて行く人もありました。私は、空模様と歩いてゐる人の顔を見並べて悲しくなりました。

少女の白いエプロンが、風に吹かれてゐるのが見えます。彼女は、手に紙片を持つて、折り

しも其の前を通る人に差し出しますと、その人はそれを受取つて行きました。また、次に來かかつた洋服を着た若い紳士は立止つて其れをもらつてゐました。そして、少女の立つてゐる方へ行きつゝあつた男は、先刻私が差し出した時に、邪険に叱つた男でした。彼女は其の男の前へ走り寄りました。私は、ちつと眼を星のやうに輝かして、遠くの光景を見守つてゐますと、其の男は、彼女には叱りもせず、紙片をもらつて行きました。

雨が風に混つて降つて來た。私は氣が焦立ちました。電車の家根は濡れて、眼の前を往來してゐました。その時酒に酔つた男が、ふら／＼とした歩き付をしながら、レールを横ぎつて彼方に行つたかと思ふと、少女の傍へ寄つて、からかつてゐるのが見えました。通る人々が、雨にぬれながら其方をば、ぼんやりとして見返つてゐるものもあつた。

雨が強くなつた時に、人々の姿は、だん／＼路の上から消えてしまひました。いつしか彼女は、みんなちらしを配り盡して歸つてしまつたらしく、その姿はもう見られませんでした。

私は、雨が直に止まないかと思つて、まだ残つてゐるちらしをぬらさないやうに、懐に入れて柳の木の下に立つてゐました。

晩方になると、やうやく雨が晴れて、月が出ました。私は、月の下で、もらつて來ただけのちらしを配るために、また通る人々に渡してゐました。心には、私の競走者に對する、恨みと復讐心とが燃えてゐる。誰に頼る者もない私は、頭の上ですべてを知り盡してゐる月に向つて訴へるより他になかつた。

「どうか、あの少女を殺して下さい」と、私は、ちつと黄色な月の顔に見入つて、白い雲が慌しげにその下を通る時に心で叫びました。

「明後日から、妾は姉さんのゐるカフェーへ雇はれるのよ、もう、こんなちらし配りなんかしないわ。馬鹿らしいんですもの」と、其の次の日に、少女は私に告げました。

通る人々の顔を見るのが、私には物憂くなりました。また、自分の歸るところとしては、あの西日の當る狭い四疊半に、道具や、子供等といつしよにゐるより他にないのだと思ふと、そして、叔母は、がみ／＼と言つて子供を叱り付け、唯一の杖とも頼む叔父は無口で、夜遅く歸つて、酒を飲んで臥てしまひ、朝は早くから出かけるので碌々顔すら合すことが少ないのだと思ふと、私は、これから先に楽しみの日のあるやう答がなく、たゞ暗くて、どうなるのかと思ひ

ました。

賑かな、カフェの裡で、白いエプロンをかけて、彼女の働いてゐる姿などを眼に描いて、私は、たま／＼この店の前を通つて中を覗いても、その中には私のやうな汚ない風をした人間は一人もゐずに、彼女は、見ても、もう私などには眼もくれずに、高慢ちきな顔をしてゐる。

私は、憂鬱を感じたのです。

この時、人々が駈けて行きました。私は、何事が起つたかと思つて、人々の駈けて行く方を見ると、

「誰か轢れた」と、いふのです。私は、急に眼がさめたやうに、空想から破れるとびつくりして、自分も駈け出して行きました。

「子供だ」

「子供だ」と、言つて、みんなは黒山のやうに重なり合つて、ある一つの電車の下を覗きました。気付くと、電車はみんな止つてゐた。私は、人々を分けて、やつとそれが見える處に出て覗いて見ると、白いものが眼に入った。次に耳のはたで、「女の子だ」と、言ふ聲が聞えた。

私は、其處で卒倒せんばかりに驚いた。

轢れたのは彼女であつたからです。私は、はじめて現實に觸れた。

私は橋際のカフェーに、彼女の姉に知らせるべく一生懸命に走つた。

其夜、私は、月の光りを怖しくて見ることが出来なかつた。身ぶるひしながら、黄色い、圓い月を仰いで、

「どうか、あの女の子の死なないやうに」と、片脚を切断されて不具となつた、彼女のために祈りました。

蓄音器

蓄 醫學校を卒業したけれど、直には國へ歸らずにKは、つい秋まで東京にぶら／＼と日を送つてゐました。彼は、あの淋しい、樂みといふものは考へても眼に浮んで來ない田舎に入つてしまふのが、何となく堪らない思ひがしたのであります。かうしてゐるうちに、何かの具合で、この儘此方にゐられないものでもない。父親の氣が變つて、もう二三年語學を勉強したいと言つてやつたのが、聞き入れられるかも知れないといふやうな空想に耽つてゐたのです。

器 この都會にゐることが、どうしてさういふのかと問はれたら、彼は、其れに對して確かりした答をするのに苦しんだであります。彼にとつてもこのせゝこましい都會の生活が田舎の生活に比較して、より自然であるとは言はれなかつたばかりでなく、また、正しいといふ理由も見出されなかつたからです。しかし、何となく其處から離れ難い氣がしたのは事實でした。

すべての空想も行路樹の葉がうすく色づくと共に、はかないものとなりました。頑固の父親

からは、「お前が勝手にゐなければさうするまい、もう此方からは金を送らない」と、言つて来たのです。

雨 Kは、路を歩きながら、思ひ出したやうに立止つて、西空に浮んだ雲の影を見ました。既に雲の色にも、秋の光りは染んでゐたのです。これから、日に、日に寒くなる都會を思ふと、冬のからツ風の吹く、東京はあまり好い處にも思はれませんでした。いつそ田舎に入つて火爐にでも、もぐり込んで吹雪の音を窓の外に聞きつゝ、日を送らうと思ひました。子供の時分の生活が油然として眼に浮んで來ました。彼は、長い間忘れてゐた、この懐かしい思ひ出を抱きしめたいやうな愛撫の心が起りました。

樹 「あゝ、なんて、今迄の俺の心は散文的であつたらう」と、彼は、都會生活の間に、いつしか銷磨しかゝつた本來の純眞な心持を顧みたのでありました。彼は、トルストイの小説を思ひ出しました。大學生活を卒へて、田舎に歸つて百姓になつた青年のことを、

いろ／＼の感慨は、彼の頭の中に湧き、また消えて行きました。而して、其等のすべては、二たび心にとめて考へて見る程の價值なき空想に過ぎませんでした。

著 けれど、たゞ一つ、五年の間父親が一度も東京へ出て來なかつたことが氣にかゝつた。卒業の時ばかりは、出て來るだらうと思つたのが、其れにも出て來なかつた。彼は、父親とこの賑かな街をいつしよに散歩したいと、日頃どんなに思つたでありませう。何處には、かういふ珍しいものが見られる。何處には、かうした甘いものが食べられると、彼が、數年間の都會生活で知つたものを、其の時は、平常田舎で孤獨な淋しい生活をしてゐる父親を慰めるために役立てやうと思つたでありませう。

音 早い時分に母を失つたKは、父親の手で育てられたのです。其の過去の慰めのなかつた父親の生活を考へるたびに、彼は言ひ知れぬ感謝と同情の念に堪へられない思ひがしました。

器 黒ずんだ樫の木に當る風の音を聞きつゝ、黙り込んで室の中に獨り坐つてゐる父親の姿を眼に描くと、其のさびしい、いつしか肩の骨の瘦せこけた姿を取り巻いて、落葉が驅り木枯が叫ぶのを見たのであります。

「あんなに陰氣に、憂鬱に、頑固に、いつたい、誰がしたのだ？」と、Kは、眼に涙を湛へて言ふのでした。

Kは、いつでも、たゞ一人の父親のことを考ふると心の平静を失つたやうに、時には物狂はしくなつて、室の中を歩き廻りました。而して、疲れて一處にがっかりと坐ると、

「皆な死んでしまふのだ」

かう、暗くなつた障子の一點に瞳を据えて唐突に叫ぶのでした。この動かし難い眞理は彼の頭を全く虚無にせずには措かなかつたのです。

「蓄音器を買つて歸らう」と、Kは思つて、ある楽器店の前に立止りました。其の店は可なり大きく、硝子戸のはまつた店頭には、西洋のいろ／＼の楽器もかゝつて居ました。彼は其等の無心の金属に、彼方側の行路樹の上を低く掠めて来る短い秋の日脚が映つて、一種悲しみを含んだ、うす赤い金色の光線を反射してゐるのを眺めてゐました。彼は、一臺の上等な蓄音器を買求めて、其の中に入れてかける、西洋の鳴物や、日本のさまざまの俗謡なども買ったのであります。恐らく、父親も嘗つて、こんな唄を聞いたことがなかつたらうと思はれました。また、自分もこの都會を去つてしまつたら、音樂會へ行つて見るやうな機會は永久に断たれるばかりでなく、また宴會などに臨んで華かな女等の口から聞くこともないであらうと思はれると、一つ

はこれからの淋しい自分を慰めるために、そんなやうな唄の譜を、持つてゐる金額を胸の中で算段して、出来るだけ多く求めたのであります。

賑かな、快樂と幸福とまた罪惡と秘密と殆んど想像されない人生の事實を包容してゐる都會を振向いて、いよ／＼最後の一瞥を亂雑した建物の彼方に投げた時に、Kは限らない淋しさを感じましたが、自分が荷物の中に一臺の蓄音器と數多くのしかも若い、見もしないけれど好い聲の従つて美しく想像される女等の唄の譜を澤山携へてゐるといふことが少なからず一種の氣強さを覚えさせたのです、

「この街の中程に、この蓄音器を買つた店があるのだな」と、彼は、窓から頭を出して伸び上つた時に、ゆるやかに汽車は動き出したのであります。

彼は、其れから意屈する程汽車に揺られました。而して、未熟な心持の悪い短い夢の間にも、董色な壁の下に机の置いてあつた下宿屋の光景や、また友達と話をしてゐる都會生活を目のあたり見てゐたのであります。

「すべてが、今は思ひ出となつた」と、彼は、ある國境の山の断面に眼を注いで思つたので

した。

町の停車場に下りると、彼は、山路を歩いたのです。人手に渡さずには彼は、蓄音器を負つて
険しい峠をも越しました。曇つた空の下で、色づいた木々の葉が、わびしげに風に戦いでゐる
のを見ました。

雨 やがて彼は、古い、暗い家の裡で、久しぶりに父親と相對して坐つたのでした。

を 「それは何か？」と、父親は言ひました。

呼 「蓄音器です」

ぶ 「外來患者にでも、お前が開院した時に聞かせるつもりか」と、無愛想に父親は言ひました。

樹 「いえ、お父さんに聞かせるつもりで買つて來ました。いろ／＼面白い唄の譜があります」と

Kは父親の何となく不機嫌な様子を怖れたのです。

父親は、獨り、廣い野原の中にでも坐つてゐるやうな、さびしい、しかし孤獨を飽迄も守る顔
付をして、つくねんと黙つてゐました。Kは、この場合、賑かな唄を鳴らして聞かせるのは、
似付かぬやうな、極めて不自然なことのやうに感じたのでありますが、自分が一旦言ひ出した

ことなので、止むを得ず蓄音機を鳴らし始めたのです。

幾十年、恐らくは、もつと其れよりも長い間、この大きな古い家には、こんな賑かな、而し
て、若々しい女の聲が聞えたことがなかつたでせう。すべて老朽しきつて、煤けてゐる戸障子ま
でが一時にびつくりして、其の生氣の失せた顔を急に擡げて眼を見張つてゐるやうに思はれた
のであります。

父親は、黙つて、其れを聞いてゐました。Kは、たとへ父親が口ではあゝいつても、心の中で
音は、珍しいのでこの音色を愉快に、また楽しんでゐるのであらうと思つて、自分もいつしか其
の唄の節に頸を傾けて聞いてゐるのでした。

器 「面白いか」と、不意に父親は言ひました。

其の聲は、我慢して聞いてゐたのが、もはや押へ切れなくなつたやうに、低く咽喉にひつゝ
して聞えました。

Kは、ちやうど心の中で疑ひを抱いてゐた時でした。この何處のものとも分らない女の唄を
しかも壓搾しられ切つてゐる聲を器械の自動によつて聞いてゐるといふことは、考へて見れば

つまらない趣味だと思つてゐたのです。

「お父さんは、面白くありませんか」と、Kは問ひました。

「俺に聞かせるためなら止してくれ。俺は先刻から我慢をしてゐたのだ。この年になつて何が聞きたいことがあるもんだ。面白いとも何とも思はない」と、父親は眞面目に答へました。

折角、父親に聞かせて、其の心を楽しませやうとしたのが何の役にも立ちませんでした。もう父親は、楽しむといふことも、笑ふといふことも全く忘れてしまつたのです。其のことに思ひ至ると、Kは、窓から見える外の暗い景色を眺めて、此處にかうしてゐるのも否み難い人生であることを感じたのであります。

其れから、父と子の物を言はない、寂寥の日が過ぎました。Kは、室の隅の上に乗つてゐる蓄音器を見て物思ひに耽りました。其の中には、面白さうな、また賑やかな唄が、しかも若い女等によつてうたはれたのが澤山ある筈だ。しかし其れは箱の中に入つてゐる畢竟一枚の板にしか過ぎない。而して、其の箱の上には埃が、既にいつの間にかかゝつてゐる。かうしてあれば恐らく永久に其の儘であるものだらう。其れが自分等二人の淋しい生活にとつて、どんな

愉快をもたらすものだ。考へて見れば、何もかもつまらない。と思つたのです。

「お前が開院をした時に外來患者にでも聞かせるつもりか」と、曾て父親が、言つたのをKは思ひ出しました。

人間といふものは、病氣になつた時に、はぢめて人生の暗い、而して、平常考へなければならぬ筈であつた一面に氣が付くのだ。其の眞面目な心持を抱いて來る者に、なんでこんな唄が聞かされやうとKは思ひました。

「谷の中へでも投げ込んでやれ」と、Kは、ある日、蓄音器を見ながら言ひました。

もう一つは、この冷淡な、陰鬱な自然の前に、女のキイキイ聲を思ふ存分調子高く叫ばして見たかつたのです。其れがせめて、この時の彼の憂鬱な氣持を幾分なりと晴れさせることのやうに思ひました。

Kは、わざ／＼蓄音器を抱へて小山の上に立ちました。寒い西風が烈しく山の巔きを吹いてゐました。彼の短かい頭髪を梳つて、どつと足許の溪に落ちて行きます。麓には村の臺場があります。其處に立つてゐる銀杏の樹を風が襲ふて、黄色な落葉が空に舞ひ上つてゐるのが見下

されました。

彼方には、灰色の日本海が、白い牙を露はせて咆哮してゐます。黒い、物凄しい雲が終日其上に垂れ下つてゐます。今にも雪を催うしさうな風は、曠野を掠めて、悲しい歌をうたつてゐます。此時、Kは、蓄音器のラツパの口をちやうど海に對つて聞かせるやうに其方に向けて据えました。やがて、跳ねたり、踊つたりする人間のはしやいだ唄の聲が、烈風の中に聞かれたのです。

「ハー、コリヤ、コリヤ」

この高調子な、歡樂極つた人間の叫びが、無心の如く見える自然を冷笑するかの如く聞えるかと思へば、愴茫として吹く風の叫びが人間の跳ねたり踊る歡樂を一揉みにして、無に歸してゐるが如くにも思はれたのです。

兎に角、この蓄音器は精巧に出来てゐるものでした。根氣よく鳴らしつゞけたら、この嵐のままに暮れてしまつて、夜になつても、うたひつゞけてゐるであらうと思はれたのです。

「痛快、痛快」と、Kは、獨り齒ぎしりしながら、寂寞とした天地の間に立つて眼を見張つて

言ひました。

たまく、風の中を嶺を越えて吹かれて飛んで來た鴉が、この時ならぬ異様の鳴音に驚いて羽ばたきを亂して、けたましく啼きながら頭の上を過ぎて行きました。

流石に、谷の中へも投げ込まれなかつた、蓄音器は、冬を越して、明る年の春まで無事でありました。

春になると、何處からともなく、頸の周圍の赤い小鳥が集つて來て木の蕾を食べた。Kも父親もこれを何うすることも出来なかつたのです。

「いま／＼しい奴だ」と、父親とKは、日に幾たびとなく、小鳥を追つて言つてゐたが、Kは木の下の雪の上に蓄音器を鳴らしたのでした。寒い風の中で、其の音は震ひながら、其れでも陽氣な唄をうたつてゐた。

雪が消えると、雀が集つて來て、圃に蒔いた種子をみんな掘出して食べるのでした。

「不埒な奴だ」と、Kは言つて、蓄音器を圃の中にかけた。すると、蓄音器は、誰も人影の見えない圃の中で終日、とぎれたり、またつゞいて鳴つてゐました。

「ア、コリヤ、コリヤ」と若い女の高調子な聲は、いつしか枯れ／＼に、荒漠たる圃の中で消
磨して行つた。其の時分には、野菜が厚く、莖が太く、其の色が艶よく伸びたのでありました

二〇、一〇作

思はぬ變事

「其れには、仔細のあることです」

山は迫つてゐた。こんもりと黒すんだ木が、六月の銀色の空に聳えてゐた。温泉場の近くの、
とある田舎路の傍に腰を下して、二人がいろ／＼の話をした時、この男は、身の上話をしたが、
其時かう言つて、やがて其の言葉を進めたのであつた。——不思議な教師でした。不思議とい
ふよりも、今、思ひ出して見ると、厭な感じの頭に残る教師でした。眼尻の垂れ下つた、痘痕
のある顔で、唇が厚くて、何となく、残忍性のあることを思はせるやうな人間でした。

この男は、顔をちつと見られるのを大變に嫌つたやうです。生徒の中で、教授の時間中に、
眼を上げて、自分の顔を見詰るものがあると、其の子供を憎んだのです。よく大人にも、さう
いふ人と、また場合とがあるものです。必ずしも深い意味があるのではなく、相手の顔を、いつ
までもぼんやりと見詰てゐることがあるものです。

この教師は、さういふ時に、殆んど堪へられない程の嫌悪を感じたらしいのです。其れが、相手の者が大人なら、我慢をしたのでありませうが、いづれも年のいかない子供のことですから、彼の恣まなる感情は、直に暴虐性に變じて、無心な其の生徒に、「眼で見た」復讐をしたのです。

雨 「何の某、今日は残るのだ。皆な歸つても、お前だけは、家に歸つてははならないぞ。後に残るのだぞ」と、教師は、突如として言つたのです。

呼 この不意の怖しい教師の權幕に、級中の生徒は、皆な驚きました。其の中でも、さう叱られた、何の某は、どんなに驚いたか知れません。

樹 けれど、平常から、怖しい教師として知られてゐたので、かうした霹靂は始めてとはなかつたので、其の子供は、心の裡で、自からの不幸を悲しまずにはゐられませんでした。他の生徒は、其の某が、どんな悪いことをしたのかと、一同、其の方を向きますと、不幸な生徒は、耳朶まで眞紅にして、黙つて机に向つて首垂れてゐたのです。而して、もとより、其れが、たゞ、教師の顔をぢつと見たのに原因することを誰も知ることが出来なかつたのです。

顔を見るといふことが、其れ程までに叱られるのに値するかといふことは、子供には殆んど氣付かれない、また、考へられないことだつたにちがひありません。

しかし、この妙な殘忍性をもつてゐる教師は、もはや、自分の顔を疑視してゐる——其れは、皆、他の生徒も自分の方を見てゐるが、特に、あの一人の生徒の疑視から受ける不快ではない——眼がなくなつて、其の子供はいぢらしく俯向いてゐるのを發見したのであります。

思 思はぬ事 かうした場合に、後に殘された生徒は、全く廣い教室に獨りとなつた時に考へられずにはゐられませんでした。

「何を俺は、悪いとをしたらう。あの時、俺は、先生の顔は、馬鹿に大きく、唇が厚く、どうして、あゝ、眼尻が垂れてゐるのだらう……人間の顔といふものは、實にかうして見ると、不思議なものだと思つて、心の中で、たゞ思つて見て居たに過ぎない。そんなに思つたとが分るだらうか。其れ以外に、何も悪いことをした覺えがない。なんで、先生は私を残しただらう」やがて、M教師はやつて來ました。其の教師は、Mといつたのです。